

キー著：弔問お断り

—推理小説—

あらすじ

マックス・ネドマンスキーは死んだ。これは間違いない。だが同時に、確かな事実も、これだけである。

死亡を確認する医師は、医師でない。偽の医者が死亡を確認した時点では、まだネドマンスキーは生きていた。多くの人がネドマンスキーを殺す十分な動機と機会もあったという事実に惑わされて、ネドマンスキーが自然死を遂げた可能性も大いにあることを忘れてはならない。さらに、自殺の可能性だって排除できないし、囑託殺人の可能性さえ考えられるであろう…万事がきわめて錯綜している。

事件のあと、ひとりの男が逮捕される。男は明らかに一殺人以外の点では本人も争っていないように—ネドマンスキーの寝ていた部屋に押し入った侵入者であるが…そのときネドマンスキーはまだ生きていたのか？ それともすでに死んでいたのか？ また、死亡していたとすれば、どのようにして命を落としたのだろうか？

「彼はまだ生きていた!」、と侵入者は言い張る。「この耳で、彼がのどをゼイゼイ鳴らしていたのを、隣室から聞いた。しかし、だれかが彼を絞め殺したかどうかまではわからない…」

ともかくも、捜査の過程で、すべてが殺しを物語っていることが明らかになる。それから、さしあたり犯人としてほとんど問題にならないと思われた、別の男がかなり具体的な動機をもっていたかもしれないとの事実が浮かびあがってくる。

問題はただ一点、被疑者に動機が本当にあったか？…

重要人物

マックス・ネドマンスキー 死ぬ—疑問なのはただ死因。あるいはむしろ、だれによって殺されたか？

ヴァルター・ネドマンスキー

マリーア・ネドマンスキー

ギド・ヴィンクラー

マルティーナ・ダームス

ディーター・ドライアー

各人各様の理由からネドマンスキーの急逝に興味をいただいていた疑いがある。

マンフレート（「ポーカーフェイス」）・ラーベ

殺人の容疑をかけられる宿命的な状況に陥る。

ローベルト・ボルケンハーゲン

情報通として活動し、それにはある種の危険がともなっているかもしれないことに気づく。

キー

おおむね読む仕事に専念しながらも、見当はずれな銃口の的になる。

序

湖がこれほど大きく見えたことはなかった。私はたえまなく回転双眼鏡で眺めているような気がした。岸边にある私たちの丸太小屋は、いまではもう小さい褐色のさいころにすぎなかった。そうして奇妙なことに、私がネド三号をUターンさせ、小棧橋をめざして進めば進むほど、ますます岸边の白い別荘は小さくなっていった。私は涙がでるまで目をこすった。眼鏡もふいてみたが、どうにもならなかった…天候のせいかもしれない。雲は低く垂れこめ、ときおり広く張りつめたコンクリート舗装の下を走っているような気がした。水は灰色で妙にねばねばしているみたいに感じられる。エンジンは単調にうなり、プラスチックの船腹はかるやかに震えていた。マックスが緑のバスタオルを肩にかけてくれたが、それでも寒かった。私たちは二人きりで、どこにも船影はない。鳥も、魚も、昆虫さえも一すべては死にたえたようであった。いったい何時なんどきだろう？ まだ昼前か？ もう夕方なのか？ 私にはわからなかった…奇妙なことに、弟は万事に無頓着で

あった。彼にはいつもと変わらぬ船旅だった。弟はなんの気配も感じとっていなかった。会社のこと、電子式情報処理の可能性、モダンな宣伝法や、新しい経営協議委員会とのトラブルのことなどを話していた。普段どおりに。

そうこうするうちにすっかりなぎ、私はエンジンをとめ、あてもなく漂っていると、背後にそびえる連峰の絶壁に最初の雷雲があらわれた。鈍い不気味な雷鳴。暑くなった。暑く、うだるように蒸し暑い。汗がふきでたが、相変らず私は寒かった。大気が突然むっとし、私は息苦しくなり、喘息持ちぜんそくみたいにあえいだ。弟は万事をさほどまともに感じていないらしい。新聞を手に取り、笑いながら多段組みの記事を指さし、まあ読んでみろという。だが、私には読めなかった一文字があまりにも小さすぎ、ただ点の羅列にすぎなかった。おれのことを書いてある、と弟はいった。その声は、湖水一面にとどろき、目にみえぬおびただしい拡声器から私にむかって、まるで大波のようにどっと押し寄せてきた：マックス・ネドマンスキーは、その行動力と能力と手腕によって、業界大手に反旗を翻すことに成功した。複合ビタミン糖衣錠の生産に踏み切って以来、ネド工場は、ふたたび安定した未来が期待できる。新開発のネド＝ビタミン剤はまぎれもないヒット商品となった… 拡声器は鳴りつづけたが、私はもはや耳をかさなかった。万事を軌道にのせ開発した私のことなんか、いずれにせよ記事にならない。奇形の変人、ヴァルター・ネドマンスキーのネタなどに、だれが印刷インクをむだ使うものか？

マックスはしかし喜びに顔を輝かせていた。もう一度水に飛び込もうと、弟は広いバスローブをかなぐり捨てた。若くりりしくみえ、同年代の男らのように肥満じゃない。私は天を指さし、いまにも嵐あらしがくるぞ、と注意した。だが、すでに湖で泳いでいた弟は、いつでもはいあがれるように、ボートを近づけておいてくれ、と激しく息をはきながら私にむかって叫んだ。そして力強いクロールで西岸めざして泳いでいった。事実またみごとに前進してゆく。私はエンジンをかけ、弟のかたわらを先行した。数時間が過ぎ去ったと思われるが、二人はたえず堂々めぐりをしているような気がしてならなかった。

そのうちにわかあらしに嵐になった。突風が湖面をたたき、たちまち暴風が荒れくるった。泡立つ波がしらがボートの赤い船首を洗った。雨が私の顔面を打ち、湖

岸線は見えなくなった。マックスが叫ぶ：さあ、引き上げてくれ！ 私は大きく旋回し、泳者をめざして進んだ。弟の両手がたかだかと浮かび、指は伸び広がり、船べりまで、あと僅か数センチになった…そのとき、私は再びアクセルを踏んだ。ネド三号はあっというまに走り去った。後方に怒号が響きわたる。私は数秒間待って向きを変え、マックスめざして舞い戻っていった。波と悪戦苦闘していた弟は、したたか水を飲んだにちがいが、泳ぎはうまかった。冗談はよせ、ばかばかしい、やりすぎだぞ、と弟は叫んだ。私はあやまり、じょうぶなナイロン・ロープを投げてやった。徐々に弟は体をボートに引き寄せてきた。もう助かったと思った瞬間、やにわに私は突然ロープをはなした。たちまち私たちのあいだに二身長の隔たりができた—さらに三、四、五。弟は懇願し、哀願し、罵倒ばとうに脅迫をかさね、ついに水をしこたま飲んだあげく、いまや喉のどをゴロゴロ鳴らすばかりになった。猛烈な勢いで私をめがけて泳いでくる、死の不安に駆り立てられて。私はたえず一挺身ていしんたらず先行するように、速度を調整した。おまけに、逆巻く怒濤どとうのものともせず、こちらがぐるぐる弧を描いてまわったために、弟ははるかな岸辺に近づくこともなく、徐々に全精力を使い果たしていった。ときおり弟はなりゆきに身をまかせて、私をののしるかと思えば、またボートに近づこうともがいた。

私はエンジンが数秒間ノッキングを起こし、ネド三号が動かなくなったとみせかけた。あいつにふたたび希望がわいてくるかもしれない。エンジンがとまれば、きっと救われると思って。私は必死にふるまう素振りをみせ、相手がありっけの力をふりしぼるさまをうち眺めていた。案にたがわず、弟は近づいてきた…

あと船尾までわずかに一メートル、五十センチ。はやくも両足を打ち合わせて、水からはねあがり、赤と白の救命浮輪をつかもうとする—その瞬間に、私はさっとアクセルレバーをつかみ、矢のようにボートを遠ざける。

マックスは激しく波立つ湖に没し、またもや浮きあがり、口をぱくぱくさせてあえぐ…

マックスが視界から消えるまで、私は五分以上待たなければならなかった—すっかり消え去るまで。

以上は、そうこうするうちに埋めつくされた、ことによると三〇〇枚に達するカ

ードのわずか三枚にすぎない。要するにヴァルター・ネドマンスキーの白昼夢だ。まんまと酔わせることに成功したあと、ヴァルターが返礼にと私のために書きとめてくれたものである…これはほんらいセンセーショナルな記事にもってこいのネタであろうが、ただ長すぎる。いまましい！ 四ページ、と編集長はいった…まったく頭がどうかしている—四ページとは！ それをまず書いて見せろ、とボスはいう。「しぼれ、キー、しぼるのだ！ それがみそだよ！」 バカか。ボスが私のことをキーと呼ぶのは、もう気にならない。編集部全員が私を略称で呼び、私にむかってただドクターと呼ぶ連中も二・三人いる…いや、それにしても編集長はいつもこのようなくだらぬことを…冗談じゃない、自分でやってみろ！

いまちょうど午後八時だ。床につくまえに、このルポを書くかどうか決めなければならない。はたして夢が…夢がよいネタだとは思わないが、さっそくカードを選別するとするか。たった四ページの記事のためにまだ二九七ページの資料が残っている…くそっ！

ここの眼前に横たわる紙の山から、グラフ雑誌四ページ分、写真をふくめて、最大限四ページ—にしぼれという。人間業じゃない！ しかし、あまりにも多くの労力をネドマンスキー事件にそそいできたので、いまさらおいそれと簡単に資料を引き出しにしまってかびが生えるにまかせるわけにもいかない。

実録？ 笑わせるな！ 実際どこに私はそもそも事実をつかんでいるのか？ 大部分は命題か推測か憶測か…どうだっていい。資料にざっと目をとおすまでは、まったくなにもいえない。

書き出しが見つからなくて、すべてが水泡に帰すのではないかと心配だ。もしかするとヴァルター・ネドマンスキーの白昼夢でなんとかなるかもしれない。最初は夢にすぎないものが、あつというまに現実になりかねないことを、あるいはマックス・ネドマンスキーが攻勢に転じることも十分に可能だということを、ただそっとほのめかさなければなるまい。また、なんとしても読者にこう告げなければならないだろう：心配ご無用、お待ちかねの殺しはきっと見つかります—ただもう少し先になりますが。それに、殺人など夢にも思わなかった、某氏にっちもさっちもいかなくなります…犠牲者の選択肢は広い。ただ、私としてはカー

ドにさっと目をとおしさえすればよい。

マックス・ネドマンスキーとヴァルター・ネドマンスキーはすでに出てきた。ひとつティーナをとりあげてみよう。

カード番号二四

マルティーナ（「ティーナ」）・ダームス、二十四歳、マックス・ネドマンスキーの秘書兼愛人。過酷な運命、ネドによって窮地から救い出された。精神病（精神分裂）の母親。私が描く情景は、女性担当官インゲボルク B の秘密情報に基づいて構成されている。

ティーナは小柄、きゃしゃ、ひ弱で、少女のよう。面長、ブルネットの髪が長く肩にたれている。目は大きく、とび色、アーモンド形、やや日本風。小さい鼻は開き、円蓋をかぶせたよう—ベルリンでは「昇天鼻」と呼ぶ。マックス・ネドマンスキーは典型的なロリ・コンⁱで、ティーナは彼があさったコレクションの貴重な宝である。マックスは彼女のためにクーアフルステンダムの近くにしつらえたアパートへ定期的に通う。

だが、それだけでは満足できない。マックスは欲望の充足を先送りすることに慣れていない。ある昼下がり、秘書室にはいり、ドアを後ろ手で閉める。汗とアルコールの臭いがする。

「いったいどういうこと？」女が問う。

「わかるだろ」男は答えて、ズボンをまさぐる。

女はあとずさりし、尻^{しり}を事務机にぶつける。なおも追ってくる男をつきとばす。叫ぼうとするや、男は粗暴なキスで口をふさぐ。右手は、女の黒いスカートにすべりこみ、裾^{すそ}をめくりあげてゆく。逆らうが通じない。男は怒りくるった。女が手首につけている、鎖が床にころがりカチャカチャ鳴る。

「なんのためにわしはおまえに金をだしておるのだ？」男はあえぐ。

女は無言のまま身をまかせる。

ちょうど事が終わったとき、電話が鳴る。男は女から離れ、ズボンをととのえ、受話器をとる。

「はい、教授」、マックスは苦しそうに息をはずませながら話す。「はい、す

ぐ研究所のほうへうかがいます」 彼はかがみこみ、鎖を拾いあげ、何気なくポケットにすべりこませる。それからドアに近づき、錠をあけて外にでる。女には一瞥もくれずに。

ティーナはむせび泣きながら机に向かっている。「殺してやる！」、とつぶやく。「あいつが憎い、あいつが憎い、あいつが憎い…」

…これも悪くない。しかし、出だしとしては？ わからないが…ともかく残しておくべきだろうか。ただ少し型にはまった三文小説のきらいがある…ふん、それで？ とどのつまり、文芸雑誌ではなく、わが社はグラフ雑誌をだしているのだ。

こうして私のリング・ファイルをのぞき、カードボックスをかきまわして言えることは、ただ一つ、潜在的殺人犯らは私たちのなかにいる！ 彼らは例外なく、このようなストーリーに力を貸してくれ、僅か数行で生き生きと蘇らせることのできる人びとだ。これは大きな利点である。

カード番号三六

ギド・ヴィンクラー、二十六歳、マックス・ネドマンスキーの甥^{おい}、職業は工業商人。巨漢。弁膜症。古風でじじくさい感じ。ボンの友人ヴェルナーFあての手紙にこうしたためている—

…こうしておれは相変わらずひどく不幸せだ。ティーナが心底好きでたまらない。考えも夢もティーナに左右されているが、いつか彼女をわがものにすることは、大西洋を泳いで渡る大胆な企て同様、望みがない。ときおり、おじの事務所で用事があれば、おれたちは会っている（そのためならおれはもちろんどんな機会も利用している）が、おずおずと言い寄るたびに、にべもなくはねつけられる。ティーナはまったくおじの言いなりだ。おじが彼女を贈り物責めにしている。マックス・ネドマンスキーのような男には、手取り一〇五〇マルクのおれなんかじゃ歯がたたない。ヴェルナー、きみがまたベルリンにきたとき、なにもかも洗いざらい話しあおうよ。おれはこわい—おれ自身がこわいのだ。繰り返しおじを消そうと考えているおのれに気づき、はっとする—あののろわしい吸血鬼を！

この手紙を資料として手に入れるために、いくらかの苦労と百マルク紙幣が数枚必要だった…私はめくりつづける。ああ、マリーア・ネドマンスキー！

カード番号五一

マリーア・ネドマンスキー、四十八歳、再婚でマックス・ネドマンスキーの第三夫人となる。無愛想、やや男っぽい顔、優雅な服装、傲慢^{ごうまん}。親しい知人（同じテニスクラブのエーファ＝マリーアR）の証言：

…ええ、私たちはヴィマー殺人事件についても話しましたわ…覚えておいででしょうか？ ヴィマー夫人は夫をE六〇五で毒殺しました。夫が何人もの娘と浮気をして妻を裏切り、全然かまってくれなくなったからです。私たちが事件について話し合ったとき、マリーアはいった、ネドマンスキー夫人はこうおっしゃいました。「ヴィマーさんの気持がわかるわ。私なら彼女を無罪にし、おまけにご褒美もさしあげたいわね。あの手の男はあのような目にあうのが当然です！ いつか私たちはみんな同じような問題にぶつかるわ…」ほんとうに、ドクター、私は背筋がぞっとしました！

カード番号六二

ディーター・ドライアー、二十一歳、見習工、数年間マックス・ネドマンスキーのもとで使い走り、執事、エンターテイナー、庭師兼管理人として働く。小柄、小太り、童顔、あだ名「デブ」。さまざまな調査に基づいて、私が描いた情景：

ドライアーはネドマンスキーの洋梨形の頭に目を凝らした。距離は五メートル、いや、もっと近いかもしれない。おもむろに銃口をあげた。きわめて冷静だった。銃身は微動もしない。思わず知らず息をとめる。いまや照門と照星とネドマンスキーのひらべったい額が真一文字にあわさった。ほんの一瞬、銃身がかすかに右にゆれた…ドライアーは悠然とずれを修正し、引き金を引く。弾は右目うえの額を貫通した。

これも悪くない書き出しだろう。もっとも、ドライアーは、マックス・ネドマン

スキーの写真をネド工場の広報誌から切り抜き、一箇のダンボールにはりつけて、空気銃の練習にうってつけの標的にしたにすぎない、と付記しなければならぬまい。

カード番号五四

マンフレート・ラーベ、三十一歳、愛称「フレディー」、荷役労働者、目下のところ泥棒稼業にいそしむ。彼の共犯者は、金持連中のパーティーにおさめる、高級調整食品店で働いている。ラーベはそこから、どこでパーティーがあるかの極秘情報を入手し、来客たちが浮かれているあいだに、忍びこみ、装飾品や金銭を着服する。仕事仲間（ギンターG）はラーベについて：

フレディーは冷酷な若者だ。邪魔立てをする者はだれでも殺す、と何度かおれにいったことがある。すでに殺人未遂の前科もある。しかし、そのことはだれも知らない。

以上が事件本来の主演たちだろう…待てよ、まだいたぞ…カードはどこへいった？ あ そうか—ずっと前のほうにあるはずだ。資料は通し番号で整理しておくべきだった。系統立てて仕事をしないと…あったぞ！

カード番号三三

マックス・ネドマンスキー、五十六歳、企業家。五月二十五日夕刻、クーペ七七の車中で取引先にもらした所感：

わしのまわりでうごめくすべてのものが、いやでたまらん—まったく想像もつくまい！ ときおりわしが何を考えておるか、わかるか？ ろくでなしどもを全員わしの誕生日に別荘へ招いてやる—わしを好きになれなくせに、たえずおべっかを使う、いとおいしい親戚や、いわゆる友人たちを…そしてな、下の地下室には山ほどダイナマイトがあり、やつらがわしの健康を祝して乾杯する瞬間に、店全体がふっ飛ぶ—そうなれば、今度こそ少しは様変わりするだろう！ いずれにせよ、なにもかもがむかつく…あんたは建設業者だから、ハインツ、毎月再開発地域で古い団地アパートをふっ飛ばしているはずだ—こちらにちょっとダイナマイトをまわしてくれないか…なに、いやだと？ 笑わせるな！ あんたの弱み

を握っておりますぞ—わしがほしいといえ、ダイナマイトをこちらにまわすのじゃ、いいかな？！

「おやおや、わしは酔っぱらってしまったかな！」

悪くない、かなり効果的な説明になる。ただ適当な箇所におく必要がある。しかし、いったいどうすれば私の取材したものを有意義に整理できるだろう？ いやな仕事だ！ もう八時半になった、くそいまましい！ それに、あの三倍もいまましいボルケンハーゲンもまだどこかへ収めなければならない。結局のところある意味では主役なのだから。

カード番号二一

ローベルト・ボルケンハーゲン、二十七歳、情報学の学生。それにもかかわらず、ことによると有能なジャーナリストになるかもしれない—ときおり、そのような気がする。ボルケンハーゲンは私と話しているうちにこのようなことを話した：

二人の人間のあいだで演じられる社会的な行動を、ジャーナリストまたは作家として、百パーセント適切に記述し分析し説明できるのは、似かよった状況のもとでみずからも一度実行したことがある場合にかぎられる。内省は、現実を適切に把握することができる、唯一の手段です。いや、これは殺人の場合にも当てはまる。殺人者だけが、他人によって犯される、殺人を正しく記述し、動機を暴露することができる。体験者だけが犯人を理解できるからです。ドクター、あなたはその点で能なし、紳士詐欺師、ほら吹き、文学的詐欺師にすぎないかもしれませぬ。

付記—ボルケンハーゲン所蔵の小型本（ローベルト・ムシル¹¹著：若いテルレスの惑い、ロコロ第三〇〇番、一四五ページ）に、下線が次の文章に引かれているのを見つけた：思考では正確に測りえない、ぼんやりしたもの、言葉ではあらわせないが、たしかに自分の人生である、ひとつの人生が、私のうちに、あらゆる思考のもとにやどっている…

ムシルではなく、ボルケンハーゲンがああときいったことは、たしかにいろんな

点でたわごとにすぎないが、ボルケンハーゲンは少なくとも誤解を恐れずに意見を述べ、しかも意見をかなりの確にまとめることができる…ちなみに、私をとんだ目にあわせてくれたのは、ボルケンハーゲンである。彼の功名心さえなければ、今晚はすばらしい夕べを送ることができ、この雑然とした情報の山をいかに簡潔なルポに濃縮…えーと、「しぼる」とよいかについて、頭を痛める必要もなかったのに…

ただしぶしぶ私は、はじめてボルケンハーゲンと接触したときのやりとりをしたためた、覚え書きに手をのばす。

クーアフルステンダム沿いのテニスコート、七月十一日午後四時、灼熱^{しゃくねつ}、マーロ コーチによるテニススクール。サーブ練習で、私のボールはきまってサーブラインを割る。マーロは気の毒そうにほほえみ、私は怒りにはらわたが煮えくりかえる。私たちは全面が外側の道路に面した八番コート。ところが、ボルケンハーゲンが私のそばに立って邪魔をするまで、全く彼に気づかなかった。

「こんにちは、チャンピオン！」 ボルケンハーゲンが声をかけてくる。彼は明るい色調のジーンズ、トマトのように真っ赤なタオル地のシャツを着て、靴下もはかずサンダル履き。右手には、ことによると指の太さほど詰まった、オレンジ色のファイルをもっている。次のような会話が展開する。

ボルケンハーゲン： チャンピオンは一日にして成らず…

私： 情報学の勉強は観察眼を鋭くするものだねえ！ ここへどうやってきたの？ 引っ越してきたの？

ボルケンハーゲン： なぜです、ぼくはもう新興団地の住人みたいにみえますか？ それぞれに番号のついた独房をあてがい、われわれの社会にみんなと生き写しの人びとを押しつけるために、そこでテレビを見、飲み、食い、眠り、睡眠前にセックスができる団地の住人に？ ぶるぶる！ まるでサイロのなかの鶏みたい…そうして外では、卵をフライパンに割りこみ、畜殺祝いを準備する人びとが待ちかまえている—いわゆる社会…

私： その畜殺業者の共犯者である私に、そこのファイルの中にお持ちのものを

買い取ってほしいの？

ボルケンハーゲン： 千里眼ですね？

私： いや、ボルケンハーゲン通だ。わが社での見習期間以来、私に売りつけようとするルポは、これでもう三度目だよ。

ボルケンハーゲン： 懸命に努力する者はだれでも…ねえ、この話はほんとに魅力的で奇抜ですし、^{あぜん}唾然としますよ！ お読みになれば、生まれてはじめて文書によるオルガスムスを体験なさるでしょう。センセーショナルなものです！

私： ベアーテ・ウーゼ事件について書いたのかね？

ボルケンハーゲン： いいえ。ネドマンスキー事件です

私： ネドマンスキー？ あのネド工場の社長？ もしかして自社の丸薬でも飲んで窒息したの？ それとも西洋の没落を防ぐ薬でも発見したのかな？

ボルケンハーゲン： なんのために？ 私たちにはすでにゴム製の警棒とか催涙ガスとか放水車がありますよ…ねえ、グラフ雑誌はお読みじゃないのですか？

私： 私が？ おいおい、私はその雑誌をつくっているのだよ！ でも、ご興味がおありなら、実は、アイルランドの荒涼とした村里でちょうど三週間ばかり休暇をすごしてきたところだ。

ボルケンハーゲン： この十年間でもっとも興味深い刑事事件を見逃されましたね。あなたにここで情報を与える補習授業ができるとは、なんと光栄なことでしょう。当事者から直接得た極秘情報です—ありえないと思われるでしょうが、ぼくはありがたいなどといっちゃおれないほど、ひどく事件に巻き込まれています…三日三晩タイプライターにむかっていた。話の残りは、事件が落ち着いたときに、お渡しします。しかし単刀直入に申しますと、ぼくは五〇〇〇マルク必要なのです。

私： 私も。

ボルケンハーゲン： このルポはそれだけの値うちがあります…南米じゅうをヒッチハイクしたいのです、ドクター。ともかく外国に出たい。つまり、連中がぼくを手放してくれ次第。

私： だれが邪魔するの？

ボルケンハーゲン： さしあたりまだ警察が…読んでください、そうすれば、ぼ

くのいっていることがおわかりいただけます。このまますぐ印刷にまわせるように、一人称形式では書いていません。あなたの名前で公表されるか、ぼくの名前にするか、まったくどちらでも結構です。肝心なのは、そろそろぼくに才能があることを認めていただくことです。

彼はファイルを私の手に握らせ、あいさつもせずに消える。

たしかに、これはローベルト・ボルケンハーゲン、情報学、社会学および政治学専攻の学生、二十七歳、神々のちようじ寵児であった。わが社のカメラマンたちが大変な苦勞をしたおかげで、私のデスクにある三枚の鮮明な写真は、とにかくすばらしい。長いが、肩まではとどかない髪。ブロンドの口ひげをたくわえた、やさしい丸顔。空色の笑っている目：ガングホーファーⁱⁱⁱなら、明るいアイロニーをたたえた二つのほのかに光る湖、と形容するだろう。ずんぐりした、いや、ボルケンハーゲンはがっしりした体格だが、動きは柔軟で、猫のように俊敏な感じがする。私は彼が好きだ。笑うと頬ほおにえくぼができる…

さぞ骨が折れるだろうが、ボルケンハーゲンの告白は慎重に読むとしよう。彼がここに書き集めたものは悪くない、きっと悪くないが、このままの形で多くを借用できるかどうか？ まあ、一度見てみよう…

ボルケンハーゲンは記念教会から出発し、クーアフルステンダムをゆっくり流していったが、明らかにタクシーを待つ客はなかった。あの晩は穏やかで乾燥し、映画館も劇場もまだはねていなかった。必ず八時には黒のベンツに乗っていてくれ、とチーフに念を押されていた。それというのも報道機関が当時、流しのタクシーが少なすぎる、とうるさく騒いでいたからだ。ボルケンハーゲンはやっと一人の客を拾った。テムペルホーフ空港からノイケルンへ老婦人を乗せ、チップ込みで、ちょうど五マルクもらった。むしろどこかのタクシー待合所へ行って待つほうがよかったであろう。チーフはいつも空車のキロ数が多いことに文句をつけていた。だが同僚らの辛辣しんらつな批判がこわかった。ボルケンハーゲンは背中に長髪をコニャク色のシカ皮ジャンパーの襟えりまでなびかせ、口ひげをたくわえ、しかも学生だった。もちろん極左分子だが、狂信者でも煽動者でもなかった。自分が仕

事仲間にくわわれれば、どうして運転手たちが防衛態勢に切り替えるのか、よく理解していた。連中が寄生虫や怠け者や無政府主義者の悪態をつけば、口をつぐんでいるか、あるいは同調さえしたが、ほとんど事態は好転しなかった。

グループでイビサ島^{iv}へでかけ、いまごろは間違いなく団体旅行の責任者と仲良く寝ている、ザビーネのことをボルケンハーゲンは考えた。彼女はどうも団体旅行の引率者に弱い。そのことに何か異を唱えようものなら、こっぴどく笑いとばされた。彼女は医学生で、父上はさる私立病院の院長だった。

ボルケンハーゲンはシュリユータ通りに折れ、そのあとカント通りを経て動物園にもどろうとする。相変わらず乗客はなかった。このような状態がつづけば、南米への飛行などは問題にもならない。

街角に早出の売春婦たちが立っていた。モムゼン通りを越えるとすぐ、保温トレーラートラックが対向してきたために、ボルケンハーゲンは工事現場の前で停止しなければならなかった。そのとき、二階にペンションがはいっている、五階建ての化粧漆喰^{しゅくい}で飾りたてた高い表玄関が目にとまった。玄関の間のあかりがぱつとともり、グレーの夏服を着た男が階段を降りてくるのが見える。男のかたわらには、肌にぴったり張りついた皮のスカートをはいた、長い黒髪の娘がつきしたがっていた。男はサンゴのような赤い女のハンドバックにまだなにかを押しこんでいた。玄関先で素早く握手をかわして別れを告げると、男は手をあげてボルケンハーゲンを呼び寄せた。

ボルケンハーゲンは縁石ぎわに車をとめ、後ろにもたれ、ドアを押しあけて、男を乗せた。乗客はなんとなく見覚えがあるように思われた。

「バーデンアレー！」、男はつつけんどんな声でいった。

「ノイ・ヴェスト＝エントですね…」 ボルケンハーゲンは空車札を倒し、メーターを入れて発車した。アルコールの臭いがした。後部座席の男はすでになり飲んでにちがいない。

ボルケンハーゲンは往来の交通に目を凝らそうと苦労した。一刻の安らぎもえられない。以前にどこでこの客と出会ったのか、絶対につきとめやろうと思った。昔の教師ではないし、グラビア雑誌の編集者でもなく、きっとまた、郊外の自分のあずまや近くで道を横切ってきたなんてことでもない一日曜園芸家や家庭菜

園地区の住人は、ダイヤ入りの指輪などを小指にはめていないものだ。

「音楽をかけてくれないか!」、後ろから声がかかった。

ボルケンハーゲンは言いつけにしたがった。一瞬バックミラーに男の頭がうつった一洋梨形の頭。小さい顔。薄い、きちんと後ろにとかしつけた暗褐色の髪に、ひどく胡麻塩ごまじおがまじっている。大きくてやや扁平の鼻と、めだって肉づきのよい鼻翼。ボルケンハーゲンに見分けられるかぎりでは、褐色がかかった肌に、いくつかの黒ずんだ老人性色素斑はん。ちょっと出っ張っている巨大な耳、二重あご、小さくてずるそうな水色の目…

メッセダムとマズーレンアレーの交差点をわたるとき、不意にピンときた。マックス・ネドマンスキーだ—もちろん! TuS ヴェスト=エントで知りあった、そこでネドマンスキーは陸上部門の後援を手がけていた。あれから、かれこれ十年になるはずだ。

ボルケンハーゲンは、ネドマンスキーに話しかけようとは思わなかった。彼を特別好きだったことは一度もない。ボルケンハーゲンからみれば、この社会がとにかく今日のようになったことに責任がある、資本家連中の一人にすぎない…ボルケンハーゲン自身、この点がジャーナリストにしては少しぼやけているような気がするが、いくらかよいジャーナリストになろうと思えば、必要な場合には反感をおさえるすべを心得ていなければならないことも十分承知していた。

テーオドーア・ホイス広場を一周し、ヘーア通りに折れた。二分後にはバーデンアレーについた。奥まった屋敷、公園のような庭。上流階級の人たちが住む地域だ。

「とまれ!」、とネドマンスキーはいった。

ボルケンハーゲンはアクセルを離し、そっとブレーキを踏む。車が歩道ぎわにとまると、メーターを切り、車内灯のスイッチを入れた。「四マルク八〇プフェニヒです」、運転手は後ろを振り向きながらいう。

ネドマンスキーは小銭の山を手にはひろげて、五マルク硬貨を一枚探しだした。「つりはいらん!」すでにドアを開けようとしていたとき、乗客は一瞬はっとする。「おい、きみをよく知っているような気がする—うちで働いていたのか?」

「いいえ、まったく一度も」

「じゃあボウリングで知り合ったのかな…？」

「それも違います」

「にやにやするところを見ると、わしを知っているな？ どこでわしを乗せたかいいふらせば…さあ—いってしまえ！」

ボルケンハーゲンは、誇りと自信に満ちあふれて、ネドマンスキーをあっさり外にほうり出してしまうような男ではなかった。むしろ、黙ってぶちのめされれば、どんな気分がするかを、あとで的確に描写できるように、小さくなってさんざん殴られるタイプであった。いまただこういった：「ぼくをお知りになったのは、T u S ヴェスト=エント、つまり陸上競技からです。ぼくは百メートルを十一秒で走ったことがあります。十一秒〇…」

「ボルケンハーゲンか！ こりゃ驚いた、きみはわしの大きな希望の星だった。一度ローマと東京できみが走るのを見たかった。そうしてうちの宣伝にくわわっておれば、きみはしこたまもうけられただろうに。わが社はあの強壯飲料—『ネド・スポーツ』もつくっているからな。きっと知っているだろうが…まあ、飲み物はまだほかにもある。さあ、ヘーア通りへいこう。そこに一軒感じのいいレストランを知っておる」

「喜んで、でも、ぼくはまだしなければ…」

「ごちそうする—口答えはなしだよ！」

ボルケンハーゲンは、うかつにも弱さと好奇心のつながりについてよく考えもせず、誘いにのってしまった。

ほどなく二人はこちんまりしたレストランの張り出し部分に腰をかけ、飲みはじめた。寸分の狂いもなく盛りあがってゆく—二十分ごとにビール一本と穀物酒一本のペースで。

「あのころはまだいい時代だったなあ？」 ネドマンスキーは顔を輝かせた。

「当時、おまえはすばらしかったし、おまえたちのリレーチームも：四十四秒三—まだ今日のこのように覚えているぞ…ほかの連中はいったいどうしている？」

「ぜんぜん知りません。彼ら三人とはみんな縁が切れました…」

ネドマンスキーがまたもやしゃべりだし、スポーツの思い出にふけているう

ちに、ボルケンハーゲン是不意に心地よくなってきた。ネドマンスキーは、その傘下におさまってさえおれば、もはやなにもわが身に降りかかるおそれがない一味にくわわっているような安心感を相手にあたえた。ただネドマンスキーの気に入られるように、飲み、耳を傾け、うなずいているだけでよかった。刻一刻とますます親分に共感していく自分が手に取るように感じられた。いい気分であった。

「ルーディ・ブーフマンはいったい何をしている?」、親分が尋ねた。

「あの男? あの男は包装材を扱っています。商売は^{フロリーレン}繁盛し—そうしてやつは^{デフフロリーレン}処女を奪ってま—す!」ネドマンスキーは腹をかかえて笑った。

ボルケンハーゲンもいっしょに笑い、「昔とまったく変わらないですねえ」といった。

ネドマンスキーははつらつとしていた。経営のことやら、ボーリングクラブのことやら、サウナのことやら、とりわけいろんな旅から得た、さまざまな出来事や逸話を話した。だが飲むにつれて、彼の元気はしぼんできた。ゆっくりとだが、確実に空気が抜けてゆく、風船のように思われた。ついには黙りこみ、自分のグラスにじっと目を凝らした。

かなり酒に強いボルケンハーゲンは、ネドマンスキーがぼんやり物思いに沈む姿を心にとめ、ある種の満足感にひたりつつ、賢明にも黙っていた。

ネドマンスキーはふたたび話しはじめたが、ゆっくりとぎれとぎれに、何度も言葉をのみこんだ。ひどく酔っぱらっていたせいではない。酒飲みが二個の人格に分裂し、一方がふだんのしがらみから解放されてしゃべり、行動すると同時に、他方がかたわらにすわり、いぶかしげに眺めるという段階にきていたにすぎない。ボルケンハーゲンは十分に縁遠い存在であって、危険もなく、同時に気晴らしには都合のよい相棒に思えた。この男と話せば、きょう憂さ晴らしになっても、あしたに尾を引くことはない、とネドマンスキーは考えた。

「すべてはまったくの見かけ倒し!」、ネドマンスキーは途切れ途切れに話した。「大工場、独裁者、大富豪…耳には快く響くだろうな? わしをうらやまぬ者はない。まあ使用人に聞いてくれ—だれもがわしのような身分になりたいという。だが、内情はどうか…」

あわれな企業家連中は、とボルケンハーゲンは考えた。国民の裕福な暮らしを

守るために身を粉にして働かねばならぬが、だれにもわかってもらえない。

「やつらはみんなわしを憎んでいる。みんなだ！ この気持がわかるかな？」

かわいそうに、とボルケンハーゲンは思った、きつとつらい目にあっているのだ！ でも、ぼくの苦勞にくらべりゃ目じゃないよ。

「わしは包圍されている。見ることもできず、捕らえることもできないが、向こうはわしをずたずたに引き裂こうとねらっている、野獸どもに取り囲まれておる。やつらはつまり…凝り固まった憎しみからできているのじゃ！」 ネドマンスキーはダブルの穀物酒を一気に飲みほした。

「まかぬ種は生えないでしょう…」

「わしがこうなったのは、こちらの責任かね？ あるがままのわしを受け入れてほしいのじゃ！ われわれはみんな平穩無事にすごせるだろうに…それぞれがあるがままに使われなければならん。だがまだ、わしがだれであるかをやつらに見せてやるだけの力があるぞ！ いまにびっくりするようなことになる、いまにな！」 不意にネドマンスキーの元氣ははかなく消え、いまにも泣きだしそうになった。「わしを好きな者はおらん！ わしが急にぼったり倒れて死ねば、やつらには一番好都合だろうなあ…」

「だれが一番喜ぶのでしょうか？」

「だれが？ まあ、どいつもこいつもだ！ 兄、女房、^{おい}甥、女秘書、庭師—ほかにだれがいるか知らんが…クロバエども、わしがくたばるまで、ただじっと待っているハゲタカどもだ…わしを好きなやつはおらんが、わしの金は—それはみんながほしがっている！」 ネドマンスキーはげっぷをした。「つましい生活環境から抜けだし」、と彼はつづけた。「わしはせっせと働いて出世した…ずいぶん苦勞したよ、ほんとうに。そうして今度はあのならずものらと悪戦苦闘せにゃならん。もはややつらから逃れられん。連中はわしの体じゅうに根づいている。四方八方からわしに吸いついておる…わしは五十七歳になる、いいかい？ もう新しい暮らしははじめられん！ 相変わらずの調子でやっていくしかないのだ…どこか別の所にいってもよくならん。まあ、わしらはがまんするしかない…聞いておるか、ボルケンハーゲン、きみは大学出だが、わしは—わしは裏庭の四階出身だ。はっきりいって、一度ほんとうにやつらのスーツケースのまえに糞くそをし

てやりたいよ…乾杯！」

「乾杯！」ボルケンハーゲンはあくびをかみ殺した。ぼつぼつ酔いがまわってきた。ウェイトレスが通りかかったとき、そのむっちりした腰にのしかかろうとしたが、突きもどされた。やっとの思いで立ちあがり、千鳥足でトイレに行く。軽く揺れながら用をたしたあと、冷たい水で顔を洗った。

だがレストランは相変わらず薄暗く、煙がもうもうと立ちこめ、夢うつつの状態であった。人びとは^{かめ}亀よりものろのろ動き、ただ声ばかりが明るく、刺すように響いていた。一つボタンさえ押せば、一挙に酔いが醒めるといいのだが、とボルケンハーゲンは考えた。胃がさしこみ、彼は顔をゆがめた。

ネドマンスキーは涙ぐみ、ほのかに光る目を大きく見開き、相手をじっと見すえた。「笑っておるのか、ボルケンハーゲン！ きみはまだ笑える…」

「このいまましい世の中になにか笑うことがあるでしょうか？」

「じゃあ、わしの葬儀にきたまえ一人びとが笑っているのが見られるから！ そりゃもう大変なものだよ！ やつと^い逝ったぞ、あのおやじが！ あの皮肉屋、あの自己中、あのエゴイストが！」グラスがおどるほど、ネドマンスキーはこぶしでテーブルをたたいた：「わしがくたばれば、王国は、ほんとうに心から泣いてくれる者にやる！ その者に、生涯かけて集めそろえたものを全部くれてやるが…そのような殊勝な者はいないのだ！ わしはもう長くない。最近心臓発作を起こしたが—おい！ きみ、もうこれでお陀仏^{だぶつ}かと思ったよ。こわい！ 連中がもう心の中でどんなに歓声をあげていたと思うかね…」

ボルケンハーゲンはついにうんざりした。この金満家になった薬屋の無駄話のいったいどこがおもしろいのか！ ついてこなければ、きっと五、六〇マルクは稼いでいただろうに、と思った…だが、だしぬけに立ちあがる勇気もなかった。おそらくネドマンスキーは怒りくるっただろう。きっとまだいくらか心にたまっただうっぷんをぶちまけずにはいられない様子だから…相手のほうからきりあげさせようと、ボルケンハーゲンはわざとばか話をはじめた。

「あなたと似た状況にある富豪が登場する、小説を読んだことがあります。主人公はありあまるお金をもちながら、相続人ともくされる人たちはみんな彼が好きじゃなかった。そこで富豪はどうするか？ わざと倒れ、死んだふりをして、

親類縁者の語る言葉に耳をすますのです…もちろん、結末はハッピー・エンドになります。主人公がいつもさんざん殴ってきた、お手伝いさんが彼を愛しているから…とまあこういうような話です」

ネドマンスキーはボルケンハーゲンをじっと見つめていた。「おい…」 心の激しい動きが見てとれた。「おい、そいつは名案だ！」

「小説にはさらに、主人公と結託していた、医者もいました。医者が診察し、賢明な口をきいたので、みんなが信用したのです」

ネドマンスキーは思案した。「協力してくれる医者を、いったいどこから呼べばいいのか？」 突然ネドマンスキーの顔が晴れやかになった。「きみが医者をやれ！」

「いいですよ！」 ボルケンハーゲンは瞬時もためらわなかった。「喜んでいたします！ これは世紀の着想です！」 不気味な情景。不条理劇。スキャンダル。支配階級の退廃を裏づける証拠—それに自分は全体の花形となって…ついに規格化された世界からふたたび華々しく離脱する！ 熱くなり、燃えてきた。「みんながだまされるように、あなたのために医者を演じます！ なんだかんだいつでも、ぼくは三年間ショーにでていました—毎晩！ それに医学知識も、そこいらの医師よりも豊かです：ザビーネは医学を学んでいますからねえ。門前の小僧習わぬ経を読むというやつですよ。彼女の父親は大物、教授、院長です…だからきつと適当な小道具をかき集めてみせます」

「わしらが今日めぐりあったのは、天の配剤じゃ」、ネドマンスキーはそう言って笑った。「きみのガールフレンドのおやじ殿に万歳三唱—万歳、万歳、バンザ〜イ！—よし、これは一世一代のギャグになる！」 ネドマンスキーはむせた。「家じゅうがむせかえるほどいっぱいになる、我輩の誕生パーティー中にやろうじゃないか…わしはふたたび心臓発作を起こす。きみはわしを寝室に運ぶ。わしは死に、喪中の遺族が故人のことをどういうか、きみは耳をすますのじゃ。それからきみは消え、わしが弔問客のなかにちんにゅう闖入して叫ぶ：まんまと一杯くわせたぞ！ あれはまだ青二才の医者だった—まあいいじゃないか、過ちは人の常！」

「でも、あらかじめ紹介していただき、ぼくもなにかさかしらなことを話して

おかなければなりません—ぼくが本物らしくみえるためにも」

「もちろんだよ。きみは自由大学付属病院のハルトマン博士で、わが社のネド・トランクライザー^①を患者に試用している、有能な若手だ」

「ええー…」 にわかにボルケンハーゲンは気がかりになった。「ぼくらはどうかしていますよ！」

「ふーん、それで？ ほかの連中はおかしくなるかもしれんが…想像してみたまえ。あいつらはみんなぼんやりすわって、わんわん泣きわめくふりをしながら、内心では、おやじがとうとうくたばった、とほっとしている。なにしろ財産や地位の相続分を懐勘定している連中にとって…念願が不意にかなうのだ：一人は結婚でき、一人はボスになれ、また一人は人生をやっとまた楽しむことができる。そうしてやがて…」 ネドマンスキーはぶざまににやにや笑い、げっぷをした。

「おい、こりやすばらしい！ いくらほしい？」

「なぜ？」 ボルケンハーゲンはぴんどこなかった。「いったい何の報酬です？」

「まあ、アイデア料だ！ それにきみの—ええと—出演料…」

「なるほど」 ボルケンハーゲンはぐっところえねばならなかった。「ええ、つまり…つまりですねえ…」 これほど酔ってさえいなければ、とボルケンハーゲンは考えた。いったいいくら要求すればよいのか…「ニューヨーク行きの学生航空券は約七百マルクかかりますが…」

「それを出せというのか！」 ネドマンスキーはボルケンハーゲンの手を取り、長いこと握手した。「あんたが気にいった！」それから二人は抱きあい、一瞬方向感覚を失って、互いにのしかかるようにもたれかかった。「きみはわしの友達だ、ボルケンハーゲン！」、ネドマンスキーはろれつのまわらぬ舌でしゃべった。

「最良の友だよ…」

「と～も、よきと～も、そはこの世で一番うるわしきもの！」 ボルケンハーゲンはわめき、頭がテーブルにぶつかる。「死がぼくら…ぼくらを分かつ日まで！」 ボルケンハーゲンはなおも口のなかでぶつぶついていた。

ネドマンスキーは、半ばテーブルの下に滑り落ちていた。少しよだれをたらしながら忍び笑いをする。「やつらは目をまるくするかもしれん、わしが突然…死

者の国からよみがえれば…」

ここでボルケンハーゲンの第一章は終わっている。まだ最終判断をくださのはためられる。このような着想がうまれる特殊な雰囲気をとらえるすべを、ボルケンハーゲンは実際に心得ていたのだろうか？ 一般に可能なことだろうか？

薄暗いレストラン。二人の男が、ふたりきり張り出し部分で、アルコールの魔力で結ばれると同時に抑制機制^{メカニズム}から解放されていた。ネドマンスキーのあてどない不安とボルケンハーゲンの不条理志向—いわば爆発性の混合体だ。おのれ自身と人びとを使って実験してみたいというボルケンハーゲンの欲求が、けちくさい皇帝妄想^{vi}に傾くネドマンスキーの資質とかさなりあう…ネドマンスキーはネロマンスキーと呼ぶべきだろうか。つまり飲み、女遊びをし、乱飲乱舞の酒宴に墮落する、にぎやかな^{うたげ}宴を催し、配下をいじめる、常軌を逸した自己中心的な人物—いわば俗物の尺度に引きもどされたルネサンス人だ。他方のボルケンハーゲンはまさしく万事をあおる男である。しかも、いろんな分野で良心のとがめを知らない人物だ、と私は確信している。しかし、彼が好きだし、共感さえ覚える。ボルケンハーゲンはただおもしろがって、人びとを挑発してふだんならしないような行動をさせるし、そのようなことに鼻もきく。本能的にネドマンスキーの急所にも気づいている：ネドマンスキーは—性格にふさわしく—愛されたいという願望に支配されているが、同時に、だれからも—彼が贈り物責めにしている人たちにさえも—愛されていないことを感じとっている。ネドマンスキーは、アルコールのせいで感傷的になり、ボルケンハーゲンが死亡を宣告すれば、だれかが心から泣いてくれるかもしれないと期待している…理解してくれる者が一人くらいはいるのではないか？ ありのままの自分を愛してくれる者が？

マックス・ネドマンスキーはローベルト・ボルケンハーゲンにとって理想的なモルモットだが、もちろん、そのようには書きとめていない。社会情勢を解剖したいという欲望も、いまだ徹底していない。そのために彼のルポが抜群に役だつわけではない。多くの個人的資料がふくまれているが、ただ本人自身のことからことごとく話題をそらせている。たしかに、多少の自己批判はあるが、見栄を張った少々自虐的なもので、核心をついていない。第一章は一面では十分に引き締

まっていない、けれども他面では、とらえるべき雰囲気の退廃や不条理やほとんど超現実的な側面を正当に評価するには、あまりにも圧縮されすぎている…だが、私にこれ以上よくすることができるだろうか？ だいたいこのセンセーショナルな事件を書こうと思えば、ともかく彼の資料が必要だ。続きを二、三取り出しみなければ…

あれ、もうすぐ九時だ。いまだにさほど鮮明に見えてこない。私はせざるを得ない…いったい第二章はどこだ…あった。

やっとボルケンハーゲンはワインレッドR四の駐車余地を見つけた。フェラーリ三六五GTCとコモドーレの隣にならべると、彼の車はかなりみすぼらしく見えるが、一般医師^{vii}のイメージにはぴったりだった。位置について…用意…ボルケンハーゲンは百メートル決勝レース前のようにいらだっていた。盛り砂のわきで立ちどまり、ゴーロワーズ^{viii}に火をつけた。

斜め前方、道路の向こう側に、まるで小さい城のような、ネドマンスキーの邸宅がたっていた。生け垣はないが、建物と歩道とのあいだにたっぷり五十メートルはある、青々とした芝生が横たわっていた。白い旗竿^{はたざお}に、青と黄と黄金に染め分けたネド家の旗がだらりとたれていた。家屋は、かなり急勾配^{こうばい}のスレート屋根の三階建てで、黄土色に塗装した擬古典主義ふうの箱型の建物だった。家そのものにはくつろいだ趣がまるでない。

練鉄製の門にむかって通りをわたり、どことなくバッキンガム宮殿を思い起こしながら、ボルケンハーゲンは石柱にインターホンの装置を見つけた。胸をときめかせながら、クロムめっきされているボタンをちょっと押してみる。

ガリガリ、ザワザワと雑音が入り、キイキイ声がる。「どちら様でしょう？」

「お招きにあずかりましたードクター・ハルトマン…」

門柱の電子モーターがうなり、金めっきしたネド家の薔薇章^{ばら}がついた練鉄製の門がおもむろに開いた。

ボルケンハーゲンは広い砂利道を通って、それとなく知らされていた屋外階段のほうへ歩いていった。

マックス・ネドマンスキーが出迎える。もちろんタキシードを着ていた。二人

は握手をする。

「おめでとうございます！」、ボルケンハーゲンは大声でいった。「新しい歳にご多幸と、とりわけご健康をお祈りいたします。あなたのことですから、きっと百歳まで大丈夫でしょう。会社もひきつづき大きな成功を収めますように。つまり：いつもいたるところでお幸せに！ 伸び、咲き、実りますよう！」

「どうもありがとう、先生！」ネドマンスキーはちょっと周囲を見まわし、それからボルケンハーゲンにささやく。「万事順調。食後にわしは発作を起こす。いまからわれわれは気をつけるとしよう。十時ごろになるだろうから、少々ご辛抱願いたい。なに一つ失敗は許されない…」彼は話を中断した。背後にぶよぶよした感じの若者があらわれたから。若者の好色漢らしい顔は、緊張と興奮のあまり紅潮していた。「ドライアー—わしの右腕だ」、とネドマンスキーはいった。「やあ、デブ、ぐあいはどうだ？」

「万事順調です、社長！」 好色漢は軽く会釈して消えた。

「しまった、プレゼントをお持ちするのを忘れました！」、ボルケンハーゲンは大声をだした。

「しっ！ そんなにわめくな…そんなことはどうだっていい。いらっしゃい…」ネドマンスキーは彼を広いホールへ案内し、ほぼ全員そろった客に紹介した。「ドクター・ハルトマン先生、きわめて有能な若手の医師で、幅広い基盤に立ってわが社のネド・トランキライザーの臨床実験をしていただくことになっている…ギド—つまり、ヴィンクラー氏で、わしの甥おいにあたる…ダームス嬢、わしの秘書…ヴァルター・ネドマンスキー、わしの兄で会社のよき中心人物…わしの妻…エッダ、わしの先妻の娘…ハムバッハ氏、娘の婚約者…ホイスラー上院議員…シュミット=テネファー教授夫人…フォン・ヴィソツキ所長…」

ボルケンハーゲンはもはやまるで耳を傾けていなかった。リズムカルに会釈をしながら、単調につぶやいていた：「ハルトマン…ハルトマン…ハルトマン…」

約三十人ばかりが細長い板張りの部屋に集まっていたかもしれない。おおむね紳士録に載っている人たちだ。ボルケンハーゲンは自分がちっぽけで、つまらない人間に思われ、ずっと遠くに離れていたかった。心のなかで—まったく文字どおり—ばかげた火酒の思いつきをのろい、手にじっとり汗がにじむのを感じた。

ネドマンスキーが約束してくれた礼金のことを考えようとしたが、どうしようもなかった。ふと自分がここの連中をこわがっていることに気づく。

腹がたった。ちくしょう！ ボルケンハーゲン^アは考える。気を取り直せ！ この者たちがいったい何様だというのだ？ そしておまえは何者だ？ おまえもいっばし人間じゃないか！ ちぢこまる必要はない、ただ、おまえの大切な先祖さまがだれ一人としてこの前の戦争のあと早めにくず鉄をあきなうことを思いつかなかっただけの話じゃないか…

「ちょっとドクター！」

そうだともしも：博士、議員、所長—君たちはまぬけさ！ おれだってそのうち博士号をとる。いまもまさに、君たちを…するために。ドクター？ ああ そうか、おれのことだよ。

ネドマンスキーが部屋を横切って叫んでいた：「ちょっと、ハルトマン先生—あんたは専門家でしょう…ちょっとこちらへきてくださいな！」 ネドマンスキーは自分の兄や総合電気製造会社の所長やジャーナリストや化学者と一緒にドアの近くに立って、議論していた。

ボルケンハーゲンは両手をズボンのポケットにつっこみ、横柄な態度を装って一団に近づいた。「なんでしょう…？」

「ねえ、先生、ドイツで実際にバーキットリンパ腫^{ドクター}にかかった人びとがいるのかどうか、言い争いしているのだが…」

ボルケンハーゲンは笑いをこらえるとともに、不安がふっとんだ。がん発生のウィルス理論は、ネドマンスキーとのあいだで取り決めていた話題の一つで、彼はザビーネの本を手がかりにしかるべく準備していた。「残念ながらわが国ではすでに二例の発病があります…」

「バーキットリンパ腫？ 初耳ですなあ！」 アーエーゲー所長は首をふった。

ボルケンハーゲンが講義する：「つまりは顔面領域におけるリンパ腺腫でして…ええと…一九五八年にバーキット教授によってアフリカで発見されたものです。バーキットリンパ腫の細胞に、ヘルペス型ウィルスに似たウィルス、いわゆるエプスタイン・バー・ウィルスが発見されたのです。この事実は、腫瘍^{しゅよう}が人間の場合にもウィルスによって発生することを示す、重要なヒントです…少しDN

SおよびRNS ウィルスの説明をさせていただきますか？」

ボルケンハーゲンは徐々に自信をつけ、ますます医学博士ハルトマンの役になじんでいった。紳士詐欺師であることは、独特の魅力があり、一種エロチックな快感であった。さらに、すべての反逆者が覚える、燃えるような幸福感もくわわった。これは体制側の慣習に対する反逆であり、成功者たち、すなわちボルケンハーゲンがまだどうやら恐れを抱いていた人びとに対するだまし討ちであった。このことが彼を異常に刺激し、役者の才が、いわばひとりでに、本人の知らないところで開花した。消化不良に悩む、マリーア・ネドマンスキーに胆囊たんのうの機能を説明するとき、彼は一分の誤りも犯さなかった。

ただし数分後には、彼自身が単に蛇足をくわえたにすぎないことがわかった。なぜなら、この仲間内では最初からボルケンハーゲンが医師であることを疑わず、彼の社会的役割をからかう者など一人もいなかったから。

こうしてボルケンハーゲンはすぐに自分が主導権を握っていると感じ、その後まもなく夕食をとるためにみんなが細長いテーブルにつくや、ネドマンスキーにこっそりうなずいて合図を送り、また食事の支度ができると、もりもり食べた。

二順目の料理のあと、ヴァルター・ネドマンスキーは立ちあがり、グラスを軽くたたいた。

「誕生日を迎えた、わが弟よ！ おまえの友人、仕事仲間—それにだれよりも—親戚一同の名において、五十七歳を迎えたことにあらためて心から祝辞を述べたい。数字を裏返せば、われわれはそのときまでおまえにさしあたり健康と衰えぬ創造力を望む年齢がえられる—またその暁には、祝意を百歳まで送り届けるために、ふたたび再会するでしょう。おまえが新たな歳にもあらゆる目標を達成するであろうことを、われわれは信じて疑わない—また、それに必要な幸運を祈っている。そして：お加減が悪いときは—ネド社の薬を！」

「ブラボー」 拍手喝采かっさい。「万歳！」 そのあと次の料理が運ばれた。

マックス・ネドマンスキーはじっくり時間をかけた。球形のアイスクリームが給仕される前に、ようやく乾杯の辞に答えようと、少々大儀そうに立ちあがった。

「ご来賓の方々！ 皆様にお越しいただき、私は幸せです。またもや一年がすぎました…」スピーチをやめ、二、三度大きく深呼吸をして、つぶけた：「また

もや一年がすぎましたが、私たちにとって幸いなことに、この一年間、仲間から去る人はなかった。私は固く信じていますが…」 彼はふたたび中断し、せきをし、あたふたと飲み、テーブルの甲板で体をささえた。

「マックス、どうしたの?」、マリーア・ネドマンスキーが叫んだ。

「なんでもないよ、おまえ、なんでも…失礼! ただ言いたかったことは、私の人生がこれほど豊かなのは、ひとえに、これほどおおぜいの友人がいて、私に…ああ!」 顔が真っ赤になり、両手を胸に押しあて、激しくあえぎ、かすれたうめき声をあげながらくずおれていった。

みんな硬直したようにすわっていた。

「ハルトマン先生!」、マリーア・ネドマンスキーが叫ぶ。「早く—主人を助けて!」

ボルケンハーゲンはテーブルをまわって走りながら、ぬれタオルをくれと叫ぶ。

ドライアーともう一人の男がネドマンスキーをあおむけに寝かせ、タキシードのシャツのボタンをはずした。ボルケンハーゲンはかがみこみ、胸部をマッサージする。ネドマンスキーがいかにも息苦しうにあえぐため、ボルケンハーゲンはあやうく不安になるところであった。一瞬手を休め、ドライアーに車のキーをわたした。「外にR四、ナンバーB—UR六七三—をとめてある。ちょっと私のかばん鞆かばんをもってきてください。ニトロリングアール=ゼラチンカプセルがはいっているはずですよ。それでなんとか切り抜けましょう…」 しまった、誇張してはならぬ、とボルケンハーゲンは考えた。医者には処置をさほど正確に説明しないものだ…「ちょっと手を貸してください!」、ボルケンハーゲンはヴァルター・ネドマンスキーに向かっていった。「寝室はどちらですか?」

「病人」を寝室へ運びこみ—夫婦は別々に寝ていた—、ベッドに寝かせた。ドライアーがかばん鞆かばんをもってくると、ボルケンハーゲンは、この目的のためにもってきていた、ビタミンカプセルを投与し、患者と二人きりにしてほしい、と他の人たちに頼んだ。

「おみごとでした!」 マリーア・ネドマンスキーも出ていくと、ボルケンハーゲンが口火を切った。「認めます!」

マックス・ネドマンスキーは身を起こし、額の汗をふく。「おい、あんたも悪

くなかった。でも、あのような心臓発作をよそおうのは、まったく骨が折れるよ。ただ、ありがたいことに、わしは一度ほんとうの発作に見舞われたことがあるのでな…」マックスは笑ったが、ハアハア息をしているように聞こえた。

ボルケンハーゲンが寒気がした。戸外はもうとっくに暗くなっていた。重苦しい雲があらわれ、風が雨を窓ガラスにたたきつけた。ボルケンハーゲンは不意に胸がしめつけられる気がした。多幸感が消えうせ、われながら驚く考えにとらわれていたことにふと気づいた：このように死とたわむれることは、神への冒瀆^{ぼうとく}にほかならない—

「お聞きください、ネドマンスキーさん」、ボルケンハーゲンは切り出した。「ぼくにはわかりませんが…まだぼくらは引き返せませう。だれにもわからないでしょう—いまぼくらがもどって、こういっても—あなたが再び…」

「なんだと！」ネドマンスキーは笑った。「急におじけづいたのかな？ いやだよ、きみ—マックス・ネドマンスキーは断じて引き返さない！ このギャグは見逃せないよ。五十年先まで語り草になる」

「でも外の人たちにまでギャグを押しつけることはできません…」ボルケンハーゲンの声はかすれていた。「このように招待客を、こんなふうには友人たちをからかってははいけません。やりすぎです。ともかく礼儀に反します！」

「あんたの理想主義にはほろりとさせられる…友人たち？ あいつらはハゲタカだよ。わしの誕生祝いで新たなコネを期待している、冷淡な打算家たちだ。用心せねばならん、うわべだけの友人じゃ…だが、それはまだましなほう。たいていの者はわしを憎み、わしを追っ払いたがっている！ まあ、ネドマンスキーがこの世を去った、とあんたがいえば、どんなにやつらが嘆くか、どんなにわしをほめちぎるか、ひとつ聞いてくれ」

「ぼくにはわかりませんが…」ボルケンハーゲンはぶつぶついった。

ネドマンスキーは相手のためらいを恐喝の試みとうけとり、ナイトテーブルの引き出しをあけた。「申し出を二百マルク値上げしよう。頭金としてここに五百マルク置く」

「ふむ…」ボルケンハーゲンは青い五百マルク紙幣を胸の内ポケットにつっこんだ。「まあ いいでしょう、ぼくはかまいません。あなたがボスですから」

「もちろんだ！」ネドマンスキーはにやりと笑った。「このままわしをあと半時間ばかり『故人』としてここに寝かせてくれ。ただ、だれもわしの部屋へこさせぬよう注意してほしい。そのあと…」ネドマンスキーは手をこすりあわせた。

「そのあとあなたが生き返って姿を見せるとき、みんながぼくにリンチをくわえなければいいのですが」

「一種の医療過誤。それはだれにだって起こりうるもの…あんたは責任をとることで一万二千マルク稼げる。少なくともあとになって、あんたを一度調べてみようなんて思いつく者はいない…場合によってはわしが、すべては八百長だった、と釈明しよう—まあ、わしの出現にやつらがどう反応するか見ようじゃないか。わしはもう一度じっくり考えてみなければならん…眠りこまなければよいが！」

「ご心配なく、きっとお起こしします。そのまえにこっそりずらかるかもしれませんが…いや、いったんはじめたからには、ぼくだって、故人がふたたび姿をあらわせば、どんなに人びとがあっけにとられるか、見たいものです」

「きっと生涯忘れられない場面になる…頼むから、耳の穴をほじって、みんながわしについて話すことを残らず聞き取ってくれ、いいかね？ 特に、だれがなんというか、よく覚えておいてくれ。それがうまくゆき、ほんのちょっぴり気のきいた注釈をしてもらえば、もう一度謝礼の引き上げについて話しあってもよい。金は問題じゃない。とりわけ、だれかがともかくわしについてなにかよいことを話すかどうか、一人でも実際にわしの死を悲しむかどうか、どこかに慣習や仮面をこえたものがあるかどうか、よく注意してくれ—おわかりかな？」

「はい、はい、よく注意しましょう」

「さあ出陣だ」、ネドマンスキーはなんともいえぬ笑みを浮かべていった。

「幸運を祈る！」

「黄泉路を渡るとき、とくにご注意ください」、ボルケンハーゲン^{よみじ}は陽気そうにいった。「私はここにあなたの死亡を宣言します！」天井の照明を消し、ボルケンハーゲンは部屋を出た。

廊下にでると、どっと汗がふきでてきた。ボルケンハーゲンは立ちどまり、深呼吸をせずにはいられなかった。それからやっと先へすすむ。まるで催眠状態に陥ったかのように、こうこうと輝くホールへ足を踏み入れていった。

小さいグループにかたまっていた客人は、少し後ろにさがり、半円をつくった。会話はとだえ、あげた杯ももはや口に運ばれなかった。

ボルケンハーゲンは緊張した人びとの顔をじっと見つめたが、どの顔もしだいに肉色の卵形にかすんでいった。足もとでこの一瞬に落とし戸が開きますように、と念じるばかりであった。唇を動かすが、言葉にはならなかった。

「いったいどうした…？」 遠くのほうから声がかかる。

「ネドマンスキーさんはたったいましが亡くなりました」、とボルケンハーゲンはつぶやいた。

女房が私のためにコーラをもってきてくれる。こちらが読んでいるものを、女房はかなり正確に知っている。興味をもち、部分的に録音テープやメモ帳からタイプまでしてくれた。ただ、どうすればあつというまにこの紙切れの山から興味をそそるグラフ雑誌の記事がつかれるだろうか、これといった妙案はまだ彼女にもなかった。

「相変わらずネドマンスキーなの？」

「まあね…事務所にきたのは、資料を整理するためじゃない」

「ねえ、ボルケンハーゲンの手記にはまだ欠けているところがあることを、あなたにいうのを忘れていたわ」

「そうか、いったいなんだ？」

「彼はレストランでタバをすごしたあと、もう一度ネドマンスキー邸へいったわね—そうでしょう？」

「うん、そのとおり！ その事実を抜かしている…おかしい。でも、きみのいうとおり—うちが公表するなら、入れなきゃならん…」私はメモをとる：ボルケンハーゲンのマックス・ネドマンスキー邸訪問！

「ボルケンハーゲンは自分の役割をかなりうまく書き換えているわね？」

「たしかに…いうまでもない。彼は自分を中心にずらせて、おのれを三人称で呼ぶというあか抜けた控え目な態度をとりながら、彼自身が実際は興味深い人物になっている…ボルケンハーゲンがフルネームで登場するのがよいのかどうか、私にもわからない」

「彼をどうしようというの？ キー(-ky)に似せて、エン(-en)とでも名のらせたいの？」

「ひとつまじめに言えば、文体が繰り返しがらりと変わり、ところどころあまりにも即物的すぎるような気がする。とんでもない事件を正当に扱うには、もう少し皮肉な距離がほしいからね」

「でも、ストーリーはすばらしい、それは認めざるをえないでしょう。このようなものをとにかくあなたの引き出しのなかでかびが生えるにまかせてはいけないわ！」

私はうめき声をあげるしかない。

「じゃあ、しっかり先を読みなさい、私はもう少しテレビを見るわね」

「どうなりとご随意に」 ちらりと目で妻を追っかけ、ミニスカートのふりまき色気を楽しみ、無理もない思いを強固な自制心でしりぞけ、私はもう一度うめき声を発し、ボルケンハーゲンの原稿の続きを手にとる。

スクリーンの画面が突然凍りついた。すでにかなり前から大きな映画館にすわっているような気がしていた、ボルケンハーゲンは、数秒間、自分の最後の^{せりふ}台詞をきっかけに映写機が音もなく不意に停止したかのように思われた。動きも、音も、涙もない…やがてフィルムはふたたび動きはじめた。

だれかがいう：「よりもよって誕生日に！」

ヴァルター・ネドマンスキーがほとんど聞きとれないほどの小声でつけくわえた：「けたはずれの人にふさわしく」

所長が奥方にいう：「いまとなってはネド社の薬ももはや効き目がない」

親族が輪になってマリーア・ネドマンスキーを取り囲んだ。マリーアはいつもどおり落ち着いていた。ボルケンハーゲンにどことなく^{かめ}亀を思い出させる、夫人の顔は、ぴくりとも動かなかった。ヴァルター・ネドマンスキーはおのれの流行遅れの靴先に目を落としていた。ギド、ネドマンスキーの^{おい}甥は、落ち着かない目できよろきよろマルティーナ・ダームスをさがした。エッダは頭を婚約者の肩にのせていた。

最初の招待客たちが小さい輪に近づき、まずマリーア・ネドマンスキー、つづ

いて他の親族の湿っぽくなった手を握った。

「奥様、心からお悔やみ申しあげます」

「私どもみんなにとって恐ろしく寂しくなることでしょう」

「ご本人がそれほど長く苦しまずにすんだことがせめてもの慰めです」

「神さまがあなたに万事を成し遂げる力をおあたえになりますように」

「あの方はあまりにも早く私たちのもとから去ってしまわれた」

「私どもみんなにとってかけがえのない損失です」

「ネドマンスキーさん、心からご同情申し上げます」

「お気を落とさないように！」

「ほんとうに、最良の人たちはいつも真っ先に逝^いってしまわれます！」

「人生のまっただなかからもぎ取られて…」

「これからの苦しい日々のために私の事務所にお手伝いさせていただきたいのですが…？」

ボルケンハーゲンは、ネドマンスキーにきつく言い聞かせられていたとおり、細心の注意を払って、儀式をすみずみまで心にとめた。相変わらず異常に神経が高ぶり、耳鳴りはするが、胸苦しきはおさまっていた。

弔慰の儀式は終わり、来客はぐずぐずとドアの近くに立っていた。

「私たちはもう一度彼のベッドぎわにまいりましょうか」、ギドが提案した。

ボルケンハーゲンはぎょっとする。へたをすればネドマンスキーにセンセーショナルな登場の機会を失わせかねない。なにか一計を案じなければ！ はるかかなたから、あたかも如雨露^{じょうろ}からもれてくるように、陰にこもって、突如ボルケンハーゲン自身の声が聞こえてきた。「ネドマンスキーさんはまだ息のあるうちに私に話されました。感傷…ええと…大げさな別れの場面を臨終の床で演じないでほしい、と」

マリーア・ネドマンスキーは一も二もなく受け入れた。「皆様にもう少し私のそばにいてくださるよう、お願いしてもよろしいかしら。静寂と孤独がいまの私には最悪のように思われます。きょうという日がこのように終わることになったのは、とても残念です。ドライアーさんが私たちに濃いコーヒーを差し入れてくれます。どうも皆様ありがとうございます…」

フィルムはまわりつづけた。

ボルケンハーゲンは、こうしたすべてのことが現実であるとは、とても理解できなかった。このような出来事など想像もできない、小市民の健全な暮らしをして、幻想がかきたてられるとといえば、本質的にはおっばい、昇進、そしてゴールシュートぐらいしかない境遇に生まれ育ったのだから。

女性の生物学者である、シュミット＝テネファー教授が、ネドマンスキー氏はいったい何が原因で亡くなられたのか、と尋ねた。ボルケンハーゲンはふたたび自分の役割を思い出さなければならなかった。あまり詳細になりすぎる誤りは繰り返さず、苦勞して暗記したことをすべて無視し、ごく簡単に答えた：「狭心症です」

さらに詳しく死因を知りたがる者もいなかった。コーヒーがくばられ、気分がほぐれた。みんなの顔がふたたび明るくなり、はやくもときおり忍び笑いが響いた。個々のグループでネドマンスキーの生涯から数々の逸話が語られた。

「ご存じのように、私はネドマンスキーと一緒に学校に通っていました…通学路に一軒の薬局が角地にあった。戸口が二箇所あり、一つは本通りに、もう一つは裏通りに通じていました。私たちは当時十七歳ぐらいだったのでしょうか。薬屋の主人は、まったく猛犬のようで、二十代半ばになったかならぬくらいでした。さて私たちは、一方の戸口からはいり、そのまま他方の戸口からでて、おもしろがっていました—一言も断らずに。通り抜けるたびにポイントが一点あたえられた。私たちは総勢十名でした。まもなく主人は半狂乱になり、ある日ネドマンスキーをつかまえ、校長室へ引きずっていき—マックスを破滅させた…そうして人生とはままこうしたものですが、一九五一年、当の薬剤師がネドマンスキーのもとへ借財にきます。薬剤師は資金を借りて、工場を建て、軟膏^{なんこう}—ダースを生産する。さあ、ネドマンスキーはどうしたでしょう？ 同じ軟膏を製造し、ダンピング価格で売りさばき、薬剤師が一負債で首がまわらなくなって—自殺するまで待ったのです」

「ネドマンスキーが十八歳の誕生日に町じゅうに知られた娼婦^{しょうふ}をパーティーに招いたこともご存じですか—ただご両親をびっくりさせるために…？」

「彼は一度なかなか会社をやめようとしないう支配人をかかえていました。支配

人はいくらか株式も保有していたのでしょう。そこでネドマンスキーは事務所を片づけさせて、支配人に二度と仕事をあたえなかった。三週間後にその男も片がつきました」

「五年前のことですが、彼は購買部の女性係員と関係があった。女は彼の子供を生むつもりでしたが、彼は墮胎させたかった。女はこぼみ、目の前で窓から飛び降りようとした。男はただ笑って、『やってみろ』という。『それでおまえが楽になれるなら…』」

「彼がどうして金を手に入れたか、うわさを二、三耳にします…金持ちのおばさんがいました—その息子さんがロシアの捕虜収容所で死亡した、とネドマンスキーはおばさんに信じ込ませた。一九四八年のことでした。おばさんが亡くなると、全財産が彼に遺贈されました。それが当初の資金。一九五五年に実の息子さんは帰還され、いまだに考えめぐねておられます—なぜ自分の手紙が当時まったく…しかし、ここだけの話ですよ」

「もちろん！」

ボルケンハーゲンは、特別な関心もないまま、いっさいを心にとめた。もしこうしたすべてのことに一粒の真実があるとすれば、そもそもこの種の会話がかわされたこと自体が重大であった。しかも、繰り返しだれかが、「故人の悪口はいわぬものですぞ…」とか「亡くなった人のことはとやかくいわないで！」とか注意していたにもかかわらず。ネドマンスキーが不意にまたあらわれれば、この人たちはどんなに恥ずかしい思いをするだろうか！ まもなく半時間がたちがいなく、いつ何時ネドマンスキーがはいってくるかもしれなかった。ボルケンハーゲンは、突然またもや漠然とした不安を覚え、部屋のいちばん隅っこに引っ込んだ。いわば道義上リンチをくわえられそうな気配は、あまり気持のよいものではなかった。

マリーア・ネドマンスキーはひと風呂浴びてこざっぱりとし、鎮静剤を二錠服用するために、少し離れた自分の寝室へは行っていった。ネド・トランキライザーはいつも彼女にかなりすばやい効き目があった。ドアを押しあけ、電灯のスイッチを手探りでさがす。スイッチを入れると、頭上の天井に青みを帯びた閃光^{せんこう}が輝くとともに、短い鋭い音がし、思わず夫人は身をすくめた。廊下の電灯も消え、

来客の悲鳴によって、家じゅうが暗くなったことを悟った。つまり、ショートしたのだ。

マリーアは、かなり高い書架の一番上の棚板に懐中電灯があると知っていた。ドライヤーに懐中電灯をもたせて、ヒューズ箱がかかっている、地下室へいかせるために、懐中電灯を取ろうと思った。

奥のホールでマッチやライターが燃えあがっているうちに、夫人はずばやくともしたロウソクの光をたよりに、毛皮張りの床几しょうぎを壁面書架に引きずっていき、その上にあがった。

ところが、床几の脚が一本ちょうど分厚いじゅうたんの縁にかかっているのに気づかなかった。床几が少しわきにずれて、マリーア・ネドマンスキーはぐらつき、悲鳴をあげる。化粧台の鋭い角に転倒して肋骨ろっこつを折りはしないかと不安にかけられ、必死に支えをさがした。最後の土壇場で書架の細い支え柱に手がかかり、思わずしがみつく。ところが夫人は重すぎた。体重であわせくぎが壁から引き抜かれ、転落し、書架が倒れかかってきた。

悲鳴を聞きつけ、一部の客がホールからとびだし、廊下をかけてきた。マリーアの部屋に通じるドアの前で少し渋滞したが、半ば本に埋もれ、うつぶせになっているネドマンスキー夫人が見つかった。取り急ぎ夫人を助け起こし、ベッドに寝かせた。頭部に裂傷を負い、かすかにうめき声をあげていた。ドクター・ハルトマンが呼ばれたが、あらわれない。ついにだれかが叫んだ：「先生は地下室にいます！」

次の十分間ばかり、ネドマンスキー邸はかなり混乱した。

蜂はちの巣をつついたように来客が右往左往する。ヒューズ、ロウソク、ドクター・ハルトマン、マリーア・ネドマンスキーに巻くガーゼの包帯、とりわけショートの原因をさがし求めて。興奮した声の入り乱れた騒ぎが館やかたをみたした。

「夫人が頭にけがをしている…いったいあのやぶ医者はどこにいる？ ハルトマンさん！」

「電球がおかしいにちがいない—電球がショートの原因だ。さあ、電球をはずさない！」

しかし掃除婦が窓ふきに使う、脚立きやたつしか見当たらず、居合わせた男たちのなか

で一番背の高い者も電灯にとどかなかった。

「上のスイッチを切りましたか？」、ボルケンハーゲンが地下室から叫んだ。

「ええ！」

みんな興奮しながらも、判断は誤らなかつた。ボルケンハーゲンが新しいヒューズを入れると、それもすぐまたとんでしまった。よりもよって問題の回路は自動回路遮断器で安全が確保されていなかった。そこらの引き出しを全部あけてみたが、無傷のヒューズは見つからなかつた。

マリーア・ネドマンスキーは依然としてひとり静かに血を流していた。まわりに立つ人びとは、そのうちにもはや夫人に注意を払わなくなり、電灯のスイッチがどの位置で点灯または消灯を示すか、言い争っていた。もはやだれにもわからなかつた。目印もなく、おまけに別の部屋の開閉器はそれぞれ異なるものが取りつけられていた。結局、欠陥のある電球をはずすほかなかつた。

「電球をはずさないうちは、切れたヒューズに銀紙を巻きつける勇氣はありません」、とボルケンハーゲンはいった。「さもないとメインヒューズまでとび、街区一帯が暗やみになりますよ」

「ここは私たちにまかせ、あなたはそろそろネドマンスキー夫人の面倒をみてくださいな！」

ボルケンハーゲンは鞆かばんを控えの間から持ち込み、マリーア・ネドマンスキーの手当てをした。小さいが激しく出血している裂傷が左の眉に認められる以外に、見たところなんらの負傷もなさそうだった。

そうこうするうちに戸外で、波形トタン板でできた物置の壁ぎわに高さもじゅうぶんな脚立きやたつが見つかった。ドライヤーが見当たらないので、ふだんは主に頭脳労働に従事している紳士が三人がかりで、かさだかな脚立を開け放した窓から寝室へ引きずりこんだ。ロウソクの明かりでは距離と広さがつかみにくく、カーテンは引き裂かれ、香水瓶も何本か化粧台から落ち、香水がじゅうたんにこぼれた。

「ここは売春宿みたいな臭いがしますねえ」、とだれかが口走った。「おいおい、ここはまるでカオスだ！ 隣にはネドマンスキーが眠っているというのに！」

ボルケンハーゲンは、ネドマンスキーが落ち着きと冷静さを失わないように、願うばかりであった。この予期せぬ出来事がせつかくの計画を台なしにしかねな

い。あのショートから優に十五分はたっているだろう—それとも椿事^{ちんじ}はやっと数分前に起きたばかりかな。こうした状況では時間感覚が役に立たない。あえてネドマンスキーの部屋にはいり、話し合おうとはしなかった。廊下は人びとでごった返し、もしかするとさらにだれかがついてくるとか、盗み聞きするかもしれない。それに、みんながかなり大声で話していたから、ネドマンスキーはすべてを聞きとっていたにちがいない。現にそうだということは、当人がはなやかな登場を延ばしている事実からも読みとれた。仮にいま、この混乱のさなかに姿をあらわせば、登場の効果がほとんどあがらずに終わる危険があった…あるいはもう一度ネドマンスキーと打ち合わせをすればよいのだろうか。でも、どうやって？

そのとき、ボルケンハーゲンに名案が浮かんだ。ネドマンスキーのナイトテーブルに電話機を見かけたのを思い出した。間違いなく書齋から彼に電話をかけられる。あの電話は、外の玄関ホールではまったくなにも聞こえないほど、小さく鳴っていたぞ。

左手にかかげたロウソクは、ボルケンハーゲンのズボン全体にロウがしたたりおちていた。こともあろうに、一張羅の背広である。ゆらめく光を浴びながら、書齋に通じる広いドアを押しあけた。とたんに突風の出迎えをうけ、あやうくロウソクが消えそうになった。革や古い木材や葉巻の煙のにおいがし、デスクの前に…

ボルケンハーゲンは体がこわばった。

ひっかきまわしたデスクのまえに、黒いタートルネック＝セーターを着た男が立って、ふるえる手で札束を書類鞆^{かばん}に詰め込もうとしていた。

男も立ちすくみ、二人はじっと見つめあった。

バスター・キートン^{ix}、なじみの映像が不意にボルケンハーゲンの脳裏にひらめいた。顔はまるで…ポーカーフェイス。さながら西部劇にでてくるポーカープレーヤーのようだ…ボルケンハーゲンは叫ぼうとするが、ただ訳のわからないゴロゴロいう声しかでなかった。やがて、ポーカーフェイスがやせこけて弱々しいことに気づいた。

ボルケンハーゲンはロウソクを男の顔に投げつけ、とびかかっていった。だがポーカーフェイスは、電光石火の反応で右膝^{ひざ}を相手の下腹部に突きあげた。ボル

ケンハーゲンはあえぎつつ倒れた。

ポーカーフェイスはためらう。視線が窓とドアのあいだを目まぐるしく揺れた。外の庭には、^{きやたつ}脚立を寝室に押し入れた、紳士たちがまだ立っていた。それにもかかわらず、男は窓辺にむかった—あるいは意外性の効果をあてにしたのかもしれない。

だが、いまやボルケンハーゲンはふたたび敢然と起きあがっていた。ポーカーフェイスがまさに窓台にとびあがろうとした瞬間に、ボルケンハーゲンはすさまじい伸身跳びをこころみて敵の両足をつかむことができた。静かな、必死の格闘がはじまった。

やれやれ！ やっとなにかが起こる。なかなか手際がよい。あのボルケンハーゲンは、いたるところに居合わせたはずがなく、再構成している—しかし切れ目なく、なんとかうまくいっている…まあまあ、ほぼ切れ目なく。

妻は浴槽に湯を入れ、私は少し疲れた目を休めるために、ボルケンハーゲンのぞんざいにタイプした原稿からちょっと目をあげる。私の視線は、二、三日前に机のかたわらの壁にはった、ヴァン・ゴッホの複製画にはりついたまま離れない。無造作に四隅をセロファンテープではってある。この複製画は、ヘルティーで五マルクし、花盛りの桃の木を描いている。原画は一八八八年アルルで制作され、七三×五九、五センチ大で、オッテルローのクレーラー＝ミュラー美術館にかかっている…そう、私はさらに調査をすすめるために、この偉大なブラバントの画人³に数時間をさかなければならなかった。この軽やかないきいきとした桃の木は、私のルポで少なからぬ役割をはたしている。このことを読者にいつか明らかにしなければならぬだろうが、どこにもうまく収まらない…問題の事件はきっとばかげた話だ！ だが、もはや私の脳裏から離れない。

さてと…まもなく午後十時。この調子でつづけると、夜通しここでいすわることになる。それ、ボルケンハーゲンの次の章にとりかかれ！

ポーカーフェイスは逃げてしまった。

ボルケンハーゲンはたしかに侵入者から盗品を奪い返すことに成功した。盗品

のはいったバッグが、ネドマンスキーの机のそばに発見されたからだが、泥棒の逃亡はくいとめられなかった。激しい取っ組み合いのすえ、みぞおちにパンチをくらって数秒間のびていた、ボルケンハーゲンは、ポーカーフェイスが窓からとびでていく様子を、みんなと一緒にただ見送るほかなかった。

ヴァルター・ネドマンスキーがパトカーを呼び寄せていたが、二人の警官ももはや手の打ちようがなかった。刑事警察があらわれるまでには、まだしばらく時間がかかるだろう。目下さらに重大な事件を処理する必要もあったから。

切れた電球はその間に勇敢な男たちの手で取り替えられ、^{きゅうきょ}急遽隣近所から借りてきたヒューズがすべての部屋に十分な明るさを供給した。あまりにもはなやいだ照明はいずれにしても喪中の家にはふさわしくなかった。

全体がこのような事態になったことは、ボルケンハーゲンにとってまったく都合が悪かった。二人の計画では、ネドマンスキーの^{ふほう}訃報が訪問客に精神的なショックをあたえ、少なくとも全員を物思いに沈ませて、「故人」が思考の中心となる場にふさわしい雰囲気をかもすことが前提になっていた。ところが、いまやマリーア・ネドマンスキーの転落、停電、押しこみ強盗が、すっかりマックス・ネドマンスキーから気をそらせてしまった。二・三分ひとまず間をおく必要があり、そのうえで、あらためて死を近づければ、期待どおりの反応と行動方式をひきだせるのではないかとボルケンハーゲンは判断した。つまり、顔に悲しみの仮面をつけ、口に冷笑を浮かべながら決まり文句をならべ、頭のなかで、ほんとうはほっとしている自分に気づき、せいぜいここかしこで片づいていない取引や未署名の契約書などに怒りがこみあげてくるのが関の山で…およそ純粋な感情とか、温かさとか、悲しみのかけらもない。ボタンをひとつ押せば、記憶されたプログラム：うらやましくていやな親族または知人の死去に際してふさわしい態度が進行した。すなわち、未亡人やその他に対する義理、^{うっせき}鬱積した〈攻撃性〉^{xi}からおのれを解き放つための好機、他人の不幸を喜ぶ気持、出来事から距離を置く手順などが…。そのさいに、多かれ少なかれ心にやましさをともなうもの。なぜなら、純粋であるものは何ひとつないのだから一痛みも、哀れみも、涙も、心からの感謝もない。みずからの人間的な偉大さの感情または少なくとも律儀さを伝えられたものまでも、すべてが欠けていた。学校や家庭や教会が人びとに植えつけた、

いわゆる高い価値が一挙に跡形もなく消えうせていた。神と社会に対して罪を犯し—その罪悪感を抑圧していたのである。

こうした雰囲気の中にマックス・ネドマンスキーはとびこもうとしていた—恥ずかしさと驚きをまき散らし、復讐する同時に、招待客を苦しめ、からかうために。ただボルケンハーゲンはもう少し時間がほしいと思った。

客人はふたたび大食堂に顔をそろえていた。少人数のグループに分かれて寄り集まり、ここでまだなにか用があるのか疑問に思いながらも、いとまを告げて散会の口火を切る勇気がなかった。おまけに好奇心もあった。ネドマンスキーの親族が互いに好意をもっていないことは、だれもが知っていた。いつ親族がわれを忘れて、劇的な口論をしかけるだろうか？ マルティーナがネドマンスキーの愛人だったことは、ほぼ全員に知れわたっていた。いつマリーア・ネドマンスキーがマルティーナにつかみかかるだろうか？ ギドとヴァルター・ネドマンスキーがネド工場の経営をめぐるけんかをしだすだろうか？

ボルケンハーゲンはグループからグループへとぶらつき、至る所で同じようなことを耳にした。だれもが死について話している。

「…一九四五年六月に亡くなった。私たちは故人を手押し車に乗せて墓地へ運んだ。木箱の板でつくった^{ひつぎ} 柩は…」

「…気胸ももはやなんの役にも立たず、一年後に亡くなった」

「彼女は自分が多発性硬化症にかかっていることを知っていた。もはやまともに話すことができず、手はふるえ、始終めまいがしていた。そうして三月の終わりに永眠した」

「…朝、目を覚まし、なぜご主人がまだ起きていないのか不審に思った。奥さんが話しかけても、ご主人はかすかにうめくばかり。奥さんが明かりをつけると、もう事切れていた。心臓麻痺！」

「ねえ、ネドマンスキーが往生した。私たちにもいったいなにが襲ってくるか、知れたものじゃない」

そろそろご本尊があらわれるかもしれない、とボルケンハーゲンは考えた。

ヴァルター・ネドマンスキーはすでに頭のなかで死亡広告をまとめようとしていた。もしかすると今晚のうちにも文案を伝えられるかもしれない…

「うちはいったいどんな新聞をとっていますか?」、ヴァルター・ネドマンスキーが尋ねた。

マリーア・ネドマンスキーはじっくり考えた。「とにかくターゲスシュピーゲル、それからフランクフルターアルゲマイネに、ヴェルトと南ドイツ新聞—これでじゅうぶんでしょう」

「それから埋葬施設はどちら?」

「グリーンアイゼン」

「お棺を選びに、一緒にきますか?」

「ええ、さっそく明朝まいりましょう」

「ハルトマン先生はまだ死亡証明書を発行されていないのですか?」

「ええ、用紙をおもちじゃないので。通りがかりに明朝とどけてくださいます」

「葬儀はごく内輪でおこなわれる、と書きましょうか?」

「いいえ、皆様にはご随意にこさせてあげて。お越しくださるには時間がかかるし。そのうえ、主人は関心の的になることが好きでしたからねえ。あの人が好きだった、唯一のこと…」

「それから、私たちが家族としてだす、死亡広告のことですか?」

「ぜひともこう入れてほしいの：弔問お断りします」

「私がそれからマックスのいすにすわれば、会社でいったいだれを私の後任にしましょう?」

「シューマツハア—それとも? あれがいちばん有能でしょう。彼が九時まで会社で居残りをしない日はないわ」

「了解!」ヴァルターはうなずいた。「皆様にいつお帰りいただきますか?」

「話の種がつきるまで。ドライヤーになにか飲み物を運ばせましょう—ちょっとドライヤーをさがしてきてちょうだい」

ヴァルター・ネドマンスキーは回れ右をすると、ボルケンハーゲンにぶつかった。「失礼」、とヴァルターがつぶやく。

「いえ、どういたしまして…」ボルケンハーゲンはヴァルターを見つめた。玉のような汗をにじませた黄色っぽい肌に深紅色の斑点^{はんでん}が見え、眼鏡の分厚いレンズの奥に溶けて流れそうに思われる、落ち着きのない、冷たいカモメのような

目があった—魅惑的な醜い顔…おや、この男は取り乱している、とボルケンハーゲンは思った。弟のマックスがふたたび姿をあらわすとき、心臓^{まひ}麻痺を起こさねばよいが！ボルケンハーゲンは次のグループに近づいていった。

四、五人の客が著名な党人政治家の言葉に耳を傾けている。そのなかにギドとマルティーナがまじっていた。

「…たえず助言と行動でわれわれを支援してくださったが、彼の^{こうまい}高邁な目標が現実になる日を待たずして、はやばやとわれわれのもとから去らなければならなかった…」政治家はせきばらいをし、額の汗をぬぐった。「さて、死とは：昨日はまだ自慢の馬にまたがり…古い中国の^{ことわざ}諺にいうごとく：なんじが思うときはいつも後の祭り！しかし諺がなんになろう…？マックス・ネドくん、われわれは一緒になんとすばらしい時を過ごしたことか！スカートゲームを楽しんだタベ。われわれはいつも中国人のようになまって話していた—『ウェーター、赤のマティーニを三杯もってきてくれ』^{xii}—。そのとき、lを正しくrと発音した者は、一座に酒をふるまわなければならなかった。さあ、それからパリ旅行、ニーナとミシェル…ああ そうだ、輝かしい日々、それらが過ぎ去ったことを泣かずに、そうした日々があったことを笑え…」

いまや、ネドマンスキーはそろそろ出てきてもよさそうな頃合いだが、とボルケンハーゲンは考えた。いまではネドマンスキーを好きな人も見つかったことだし…最初の客が別れを告げようとしているのが見える。マックス・ネドマンスキーにとって絶好の潮時だ。おそらく寝こんでしまったのだろう。あるいは土壇場になって二の足を踏んでいるのか？あるいはこのボルケンハーゲンに、客のまえへ進み出て、ご臨席の皆様方に誤診を認めるよう説得するために、待っているだけなのかもしれない。単に重い心臓発作でした。ところが、まるで見かけは…いや…彼の心臓はふたたび打ちはじめました。まことに申し訳ございません、皆様を誤診によって…—まあ、ともあれ似たような経過をたどるだろう。さらに五百マルクもらえば、ボルケンハーゲンはそれもいとわないつもりであった。

ボルケンハーゲンは、だれにも見られない瞬間をうかがい、トイレへいくふりをして、ネドマンスキーの寝室に通じる、廊下の直角に折れている箇所へ滑りこんだ。

そこは電灯がともっていなかったが、ドアの重い青銅製の取っ手を一目で見つけられるだけの明るさはあった。食堂から弱いざわめきがもれてくる。ボルケンハーゲンはあたかもおとなたちのまえから隠れる子供になったような気分になり、手足にはむずがゆい鳥肌が立っている感じがした。ふっと思い出した：恐れることを学ぶために遠くへ出かけていった男を描く童話を読んで聞かせてもらうたびに襲われた、あのぞくぞくするような身震いと同じ感じであった…ボルケンハーゲンはドアをあけ、部屋にはいり、ふたたび錠をおろした。

あわい月の光が小さい正方形の部屋を照らしていた。右手には、ぴかぴかに磨きあげられた作りつけの戸棚が天井まで陣取り、左手にはネドマンスキーのベッド、ドアのそばにはネドマンスキーの衣服が散らかった椅子^{いす}があった。蚊が一匹ブーンと部屋を横切り、ボルケンハーゲンめがけて飛んできた。彼はせわしく手を動かして蚊を追いはらう。どこかでコオロギが一匹鳴いている。庭に面した窓はきちんとは閉まっていなかった。ナイトテーブルの引き出しが開いたままになり、ネドマンスキーのベッドの上にかかっている絵も少し斜めに傾いていた。

ネドマンスキーは顔を壁にむけ、右向きに寝ていた。ベッドは少しくしゃくしゃになっているように見える。どうやらいらいらしたらしい。停電騒ぎは事実かなり時間もくい、その間にネドマンスキーは寝込んでしまったにちがいない。

「ちょっと、ネドマンスキーさん!」、ボルケンハーゲンは声をおさえて叫んだ。「きてください、お時間です!」

返事がない。

ぐっすり寝込んでいなければよいがと思いながら、ボルケンハーゲンはネドマンスキーをゆすり起こすために、ベッドに近寄り、両手で左肩をつかんだ。少し力を入れると、まるで袋が倒れかかるように、ごろりと体がひっくり返った。

ボルケンハーゲンは悲鳴をあげた。

庭の外でだれかが明かりをつける。来客が帰りかけたからだ。外灯の反射光がうつろな両眼をかすめた。

マックス・ネドマンスキーは死んでいた。

これが、テニスコートでボルケンハーゲンから受け取った、原稿の最終章だ。要

するに、悪くない。書き出しは多少わざとらしいが、その後にわかeni生き生きとし、雰囲気もでてくる。これはたしかに肺腑^{はいふ}をえぐる話だ。事件の教訓：死をもてあそぶなかれ。表題：死者、朝露のごとし…とんでもない。ひよっとすると推理小説むきの題名かもしれない—だが、およそものになるとすれば、実録^{ルボ}だろう。いや、まったく古臭いトリックでもあるようだ：ひとりの死者と、一様にうさんくさい人物が群がる一軒の家—さて、殺人者はだれか？ おおがかりな謎^{なぞ}解き、最終ページまでサスペンス…だが、ネドマンスキーは殺された、とはたしていえるのだろうか？ さしあたり殺しを証明するものはなにもない。ネドマンスキーは完全に自然死したのかもしれない。そのようなことはときおり起こるそうだから。マックス・ネドマンスキーはもともと心臓病をわずらっていたのだし、おまけに興奮が…もつとも、マックスをどうしても好きになれない、すべての人たちのなかから、刑事警察が殺人犯を捜査しはじめでもすれば、マックスは墓のなかでまだ笑えるかもしれない…死因は？ まあ、疑う余地のないほど完ぺきに死因をつきとめられない事例は、過去にもあったという。

さらに別の可能性：ネドマンスキーは自殺した—しかも、親族たちに運がなければ、殺人！という唯一の推理しか許さない様態で。もともと重病であり、周囲の人びとに復讐したければ、悪くない考えである。問題は、ネドマンスキーの病状がどの程度であったか？ いずれにせよ、賓客の全員が殺人の疑いをかけられる…当分のあいだベルリンを離れないでください！

ええ、それからもちろん、疑う余地のない殺人であった可能性もある。この場合はもちろん招待客は無罪放免になるだろう。彼らは全員、ネドマンスキーはすでに死亡している、と信じていたのだから。だれが死者を殺すものか？

待てよ—ネドマンスキーがまだ生きていたことを知っている客が一人いた：ボルケンハーゲン。だが、彼には動機がない—逆に、依頼人が死ねば、どんな方法でボルケンハーゲンは残りの金にありつくというのか？

ふーん…まあいいや。まず先を読もう…これはどんなカードだ？ ああ—女房の、いとしい女房の書きとめたカードだ：

気をつけて：ボルケンハーゲンはあなたに一杯食わせたいだけなのよ！ ただ真

相から気をそらすために、大騒ぎを演じているのだわ。諸般の状況から判断すれば〈要求による殺人〉であったと十分に考えられるでしょう。刑法第二一六条にいう一笑いたきや笑ってちょうだい。私は調べたのよ：（一）ある者が、殺人の被害者の明示の真剣な要求によって、殺害を決意するに至ったときは、三年以上の軽懲役刑に処する。（二）酌量減輕の事由があるときは、軽懲役六月以上の刑を科する。（三）本条の罪の未遂犯は、これを罰する^{xiii}。この〈要求による殺人〉という方法でおぞましい隣人たちに復讐することは、ネドマンスキーの天才的な思いつきではなかったかしら？ あの恥知らずなボルケンハーゲンは、本人が認めている以上に、莫大な報酬を手に入れたでしょう—しかも前払いで！ 彼はいったいどれほどの危険をおかしたの？ おそらくネドマンスキーから一筆免責状をもらっていたでしょうし、たかだか三年の軽懲役ですむのよ。免責状は一もはやいうまでもないことだけど—いざという場合にしか彼は使わないでしょう。最初の大騒ぎがおさまれば、事件全体が迷宮入りすると思っているのだわ。

まあじっくり考えることね。私はボルケンハーゲンの原稿をとともきちょうめに読みました、行間までも。

追伸　ボルケンハーゲンはネドマンスキーから受け取った金額は、きわめて高額だったかもしれない—六桁^{けた}もの。とどのつまりネドマンスキーはもうお金はいらないのだし、相続人たちを毛嫌いしていた。

さあ、私にはわからないが…妻の考えたことは、少し想像がすぎる。リスクは非常に大きい—書状のことはさておき、いまどき六桁の現金を懐中にしのばせる者はいないし、その直後に不審な状況のもとで死亡した者が所有する、預金口座の相当大きな動きは…つまり、一種の砲身内早発弾になりかねない。ボルケンハーゲンは冒険家タイプで未熟なひねくれ者かもしれないが一著しく危険な局面になれば、ひらりと現実主義者に早変わりする。いや、〈要求による殺人〉はおそらく問題になるまい。

では、本文にもどろろ…おやまあ、様式破壊だ。明らかに不自然な文体上の不一致—私は有能なボルケンハーゲンを知っているつもりだが！ 現在形ねえ。現在形、いったいボルケンハーゲン氏は表現主義をどう考えているのか…まあ、見

てみよう。

ボルケンハーゲンは通りをさまよう。愛車R四は、クネーゼベック通りとウーラント通りのあいだのどこか、クーアフルステンダム^{xiv}の中央分離帯にとめてある。いったいそこまでどう運転してきたのか、もはや自分にもわからない。ともかくこの駐車場所とネドマンスキー邸は、おおざっぱに見積もって、五、六キロ離れている。

ボルケンハーゲンはぶらぶら歩き、ふらつき、足をひきずりながらクーダムを下がっていく。彼は一張羅の背広を着ている。紺色。しわくちゃでしみだらけ。ロウソクのロウばかりか、いつのまにかトマトケチャップまでついてた。ブライトロイ通りとシュリユータ通りのあいだの店でカレーソーセージを食べた。いまも覚えている。それから飲んだのだ。ペルノ酒、マルティーニ、ビール、ウイスキー。なにもかもごちゃまぜにして、しこたま飲んだ。

ネドマンスキー。ボルケンハーゲンはなんとか死者の目を閉じたあと、別れを告げた。あすの朝、通りがかりに死亡診断書をとどけます…あれでよいのだろう。ザビーネは不在。ひょっとすると彼女の父親の机から証明書をくすねられるかもしれない。だが、ザビーネがいなくなると、どうやって家にはいればいいのか？ 古いカラスは、必要なときに、いたためしがない。くそっ。

いまましい死亡診断書のことを考えておくべきだった…つまり、このような事態を念頭におき、準備段階では診断書についても情報を入手していたのだ：死後における最初の証書は、医師が死亡診断書をもって発行する。医師が死亡の時刻または原因を正確に特定することができず、確認を「おそらく」という留保つきで書きとめれば、まず刑事警察と検察庁が介入しなければならない。検察庁は、死体の返還について、あるいは法医学者による新たな検査と場合によっては刑事警察の捜査開始について最終的な決定をください。これに対して死亡診断書がいかなる疑いの余地も残さぬときは、故人の死亡が確認された地区の所轄警察署に、戸籍謄本をそえて、死亡診断書が提出されなければならない…しかし、ネドマンスキーがほんとうに死ぬだろうなんて、いったいどうしてわかる？ まるで用紙天国じゃないか！

ボルケンハーゲンはクーペ七七のなかにうずくまり、ターゲスシュピーゲルの断片を目のまえに置いている。一枚用紙をもっておれば、すべては順調に運ぶのに。だれも異常に気づくまい。だが、どうして予想できたであろう…あとから賢くなるのが人の常。

ボルケンハーゲンは四人掛のテーブルにすわっている。ここはまるで古い鉄道車両の中のように見える。標識、ランプ、窓、高級木材の化粧張り—すべてが本物か、うまく模造されている。列車がただ動きさえすれば。ここから、ベルリンから離れたい。一組の夫婦が同じテーブルについている、事務室用家具商で、ひとり女友達を連れていた。音楽が恐ろしく騒々しいが、その女友達がブリッタという名であることを、ボルケンハーゲンは聞きとっていた。短いコールテンのスカートを^{ふともも}はき、太腿をあらわに見せている。彼はブリッタにダンスの相手を申し込む。彼女はともしなやかだ。彼はめまいを感じ、耳鳴りがし、頭がくらくらし、まるで飛行椅子^{いす}に乗っているよう…女は内務省につとめる臨時の検査官嬢だ。彼はただたえず考える：ネドマンスキーが死んだ。ネドマンスキーが死んだ。ネドマンスキーが死んだ。彼はなんとか故人の目を閉じた。ブリッタは彼の右膝^{ひざ}がときおり自分の太腿^{ふともも}のあいだにはいりこむようにしてくれるが、彼にはどうでもよいことだ。おれが薄気味悪いいたずらを引き受けていなければ、ネドマンスキーはまだ生きていたろうか？ おれにいつさいの責任があったのか？

ああどうしよう、気分が悪い！「お加減が悪いときは、ネド社の薬をどうぞ！」

「なんですか？」、ブリッタは驚いている。

「ああ、失礼…」

自分の声が聞き慣れない他人の声のように思え、かん高くあまりにも明るく響き、はるか遠くから聞こえてくる。間違いなく、彼女はおれを家へ連れて帰りたいらしい。どうもご親切に。でも今日はだめ。ネドマンスキーが死んだ。ボルケンハーゲンは彼女の分も払って、バーを出る。外の風は冷たい。車が数台、たいていはタクシー。まばらな歩行者。東の空はすでにしらんでいる。ネドマンスキーが死んだ。

彼は歩く。彼は歩く。彼は歩く。ネドマンスキーは死んだ。

ネドマンスキーは死んだのか、ひとりでに、興奮して？

自殺したのか？

殺されたのか？

このボルケンハーゲンに殺人の罪がきせられるのだろうか？

届け出の義務があるのか？

死亡診断書を偽造すべきか、どこかの診療所に押し入って一枚かつさらってこようか？

赤信号、赤い点、赤い円、血のように赤い、深紅。青信号、青い点、青い円。オレンジと黄色。弱々しいネオンサイン。尾灯。とりどりの色が入り乱れて流れ、パチンとはじける、痛い。

車道を横切る。押しつぶされた鳩^{はと}が一羽ころがっている。羽、血と骨…あちこちでブレーキがきしむ。彼は前方へとびはねてゆく。

くそっ、おまえはとんでもないことに巻き込まれたぞ！

明朝、いや今朝…ネドマンスキーの屋敷で。みんなはボルケンハーゲンと死亡診断書を待っている。こない。十一時になる。いぜんとしてあらわれない。電話帳でドクター・ハルトマンをさがし、大学付属病院に電話する。それもむだ。ぼつぼつペテンを見抜く。次の電話先は：刑事警察。機構が動きだす。指名手配中…殺人容疑！そしてただいま刑事警察はあなたがたのご協力を願っています…

さあ出頭して、洗いざらい打ち明けよ！

いくな—やつらはおまえを即刻その場で勾留^{こうりゅう}するぞ。

ボルケンハーゲンは刑法を調べた。同法第一三二条 a 項：権限なしに、国内もしくは国外の公職もしくは勤務の職名、学位、称号もしくは公の栄位を使用する者は、一年以下の軽懲役および罰金またはそのいずれか一方の刑に処する。彼は本条の趣旨を知っていたのだが、ネドマンスキーはその懸念を吹き飛ばすすべを心得ていた：すべてはただの芝居じゃないか…ネドマンスキーはみずからの役を忠実に演じきった。

殺人容疑。

なぜよりもよっておれが？ 尋問、投光機、くどい質問、傲慢な刑事。ああ、あんたは情報学専攻ですか？ ひげを蓄えている人物は左翼だ、したがって、あやしい、とすでに最初から相場が決まっている。

オリーヴァ広場。ボルケンハーゲンがベンチに腰をかけている。冷え冷えとして、体がふるえる。日が昇り、ツグミが歌いはじめる。そうしてネドマンスキーは本当に死んでいる。娼婦しょうふがタクシーに乗りこむ。あれはネドマンスキーと一緒にペンションから出てきた女ではないか？ もしや。それで？ 客が一人へったが、それで彼女は貧しくなるわけではない…何台かバスが通りすぎる、まだがらがらだ。二階バスの一階客室に二、三の寝ぼけ顔が見えるだけ。書類鞆かばんをかかえた最初の男たち。

目が痛く、胸やけがする。自分が汗臭いことに気づく…つねに誤判はあった。やつらが巧みにおれの殺人を立証すれば？ ばかばかしい。ネドマンスキーは心臓麻痺まひで死んだ。老人には荷が重すぎた…寒気がする。だが、小さいあずまやに帰るのはこわい。血が出るまで、ボルケンハーゲンは右手の親指の先をかむ。〈退行〉、つまり、欲求不満フラストレーションや葛藤かつとうに基づく幼児期の行動様式への逆もどりだ、と彼は思う…不意にぐったりする。あくびをし、幻影にふける。

ボルケンハーゲンはセンターフォワードだ。ライトバック、リベロ、ゴールキーパーをかわしーシュート！シュート！ 数十万の観客がとびあがり、彼は両手をあげ、ボールはネットに突き刺さっている…クリック。テニス、センターコート。オーストラリアの選手が最初の二セットを奪った、第三セットは一四対一二、第四セットは七対五で彼が取り、いま五対三^{xy}でリード中。彼のサーブ、ゲームカウントは四〇対三〇。マッチポイント。ウィンブルドンは息をころしている。彼はラケットを高く振りあげてサーブをする。サービスエース！ ゲーム・セット、勝利！ クリック。みんなブロックにうづくまっている。用意ースタート！ 電光石火のスタート。激闘。明らかなリード。勝利。タイム九秒八一世界記録…クリック。ザビーネが広げた太腿ふとももの上にゆっくりとスカートをめくりあげていく…彼は驚いてとびあがる。

老婦人が紐ひもにつないだ手押し車を引いてかたわらを通りすぎる。婦人は、むかつく、新聞を配達している。あのような通俗紙に一行でも書くくらいなら、飢え死にするほうがましだ。だが、ふとあることを思いつき、とりこになってしまう。

おい、今回の事件でひともうけできるかもしれない！ ネタに手をくわえてルポルタージュにすれば…きっと数百マルクにはなる！ ネドマンスキー事件—

おのれの死を楽しもうとした、百万長者…

あのキーはいつもこのようなテーマに目がなかった。ひよつとすればキーはルポ全体を一行一行そのまま借用するか、あるいはただ大きな報道記事の素材として利用するだけかもしれないが—どちらでもよい。少なくとも五百マルクにはなるはずだし、それだけの金が緊急にいる。ネドマンスキーから受け取った札束とは別に。そのうえ、刑事警察に休みなく尋問されれば、警察の仕事もじかに身をもって知る機会ができる…ローベルト・ボルケンハーゲン—スキャンダラスな事件に巻き込まれる！ チャンス。またとないチャンスだ…さあ、つかめ！ 攻撃は最大の防御なり。

いずれにせよ、みずからサツに出向くほうがよい—どっちみちばかれる。ずらかるなんて問題にならない。サツであろうがどこであろうがまったく同じように、ネドマンスキー殺しを自供できる…あれがそもそも殺しであったとすれば。

要するに：「ここに犬が埋められている」^{xvi}。わかりさえしたら…なぜ犬が？ ネドマンスキーが埋められるのに。ネドマンスキーが死んだ。ネドマンスキーが死んだ。ネドマンスキーが…

頭が傾き、ボルケンハーゲンはうとうと眠りに落ちる。わずか数分間にすぎないが、驚いてとびあがると、もはや自分がどこにいるのかわからない。すっかりわれに返るまで、しばらく時間がかかる。すべては夢にすぎないのだ、とおのれに言い聞かせる。ネドマンスキーと誕生パーティー、薄気味悪い芝居と死—すべてはただ夢を見たにすぎない。まったく現実であるはずがない、幻想の産物なのだ…ところが、現実であることがふたたびわかってくる。

ボルケンハーゲンは立ちあがり、一瞬考える。殺人捜査班がカイト通りにあることを思い出し、出かけてゆく。

霧雨が降る、雨が降る、また霧雨が降る。彼はくしゃみをし、せきをする。知らない通りを抜けていく。依然として正気に返らない。スナック。強いコーヒーを飲む。道路はこみ、人びとは停留所で突進してくるバスを待っている。飛行機が町の上空をけたたましく飛び去ってゆく。彼に注意を払う者はいない。足が痛い。右足に豆をこしらえたいらしい。あごは不精ひげがのび、唇はかみ切られている。髪はぬれているにもかかわらず、ぼさぼさの感じがする。なでると、どこと

なく痛い。

ボルケンハーゲンが殺風景な廊下をさまようとき、時刻は朝の八時。門衛が指示してくれた、部屋をやっと見つける。不機嫌に奥へ通される。熱に浮かされたように彼は事件を話す、彼らは笑って取り合わない。

ほんとうです！

さあ、まずぐっすり寝て、酔いをさますのだね

ネドマンスキー夫人に電話をかけてください！

ちょっと早すぎませんか？

問題は一刻を争うかもしれません！

あんた、われわれをここでからかうつもりなら…

ボルケンハーゲンは何をいえばいいのか、もはやさっぱりわからない。警官の声がうつろな残響をともなって聞こえてくる。いまはただなんとかすぐに終わってほしいと思う。目はもはやいうことをきかない。色も輪郭もぼやける。彼はまぶたを閉じる。

ここまでがボルケンハーゲンの詩的な間奏曲。私が実際に記事を書くとなれば、彼の労作全体を一文にまとめなければならないだろう：ボルケンハーゲンは、いくらかの金銭的職業的な利益を期待して、事件当夜のうちに、刑事警察で一種の自供をするのが最善であろうという決断にいたる…彼の最善の章を没にしても、あまり腹をたてなければよいが。

さあ、この先はいったいどうなるのか？ つまり、刑事警察は急報をうけて、徐々に友人ボルケンハーゲンが酔ってもいなければ頭がおかしいのでもないことに気づく。ネドマンスキー邸に急行し、死体を発見のうえ法医学者たちに引き渡す。マリーア・ネドマンスキーの証言はボルケンハーゲンの供述と一致する。警察機構の煩雑な仕組みがまわりはじめる。

幸運にも私はサツにコネがある。主任警部マンハルトは私の古い知人だ。さっそく警部と会う約束をした。

カード番号――

七月十四日、ロマネスク様式の喫茶店で主任警部マンハルトと対談。

マンハルトは私の狙い^{ねら}が何であるかをきちんと知っていたが、ネドマンスキー事件を話題にするのをわざとためらった。その代わりに、警部はコンピューターによる指紋検出法の痕跡^{こんせき}評価の可能性と限界についてかなり長々と私に講義した。コンピューター評価の場合、作業コストは、十指の指紋採集による手作業の組み合わせ評価に比べて約三倍、個々の指紋採集による手作業の評価に比べれば約七倍少ない…などなど。マンハルトの機嫌をそこねないように、私は興味があるふりをした。

ようやく警部はボルケンハーゲンを話題にした。ボルケンハーゲンのことをまるで信用していないが、目下のところ真実を話しているという前提から出発せざるをえない。本官個人としては、ネドマンスキーとボルケンハーゲンとのあいだでかわされた薄気味悪い公序良俗に反する取り決めなど理解できないが、セックス誌にフーズム^{xvii}の売春宿で二十一歳以下の、できれば身寄りのない少女を求むと罰せられずに広告を出せる時代だから、なにがあっても不思議ではない。司法解剖の結果、マックス・ネドマンスキーは呼吸困難に陥って死亡したと判明した。われわれは窒息死という点で意見が一致した。故人の口中に枕カバーの繊維が発見され、枕カバーにネドマンスキーの唾液^{だえき}の跡が確認された。たしかに全般的状況は、だれかが枕を奪ってネドマンスキーの口に押し当てたことを暗示しているが、心臓の悪いネドマンスキーが暴行をくわえられることなく興奮のあまり自然死し、断末魔の苦しみに耐えかねて枕をかんだという可能性も決して排除できない。ベッドはいずれにせよくしゃくしゃになっており、死体の状況からはこの点に関する結論をひきだせなかった。さらに、私の質問にこたえて、マンハルトはこう説明した。心臓病の喘息患者^{ぜんそく}がみずから口をふさいで自殺することも、たしかに理論上は考えられる一さあ自分の手でプラスチックの袋を頭からかぶって自殺するケースを思い浮かべてくれ―ところがマックス・ネドマンスキーの場合、それはまず考えられないと思う。ネドマンスキーはあくまでも計画的に自己の「復活」の瞬間をめざして努力していたのだから、なぜ自殺などするだろうか？ いや、殺人と見せかけて殺人犯を捜索させることによって、ネドマンスキーはま

さに独創的な方法でおぞましい招待客らに報復できたのではないのでしょうか、と私が異を唱えると、マンハルト警部は、そのために支払わなければならない代価がネドマンスキーのような冷徹な打算家にしては間違いなく高すぎたのではないかね、とだけ述べた。警部の個人的な意見によれば、自然死も問題にならない。なぜなら、とにかく侵入者が家の中にいたのだし、ネドマンスキーのベッドのすぐ上に金庫がある。そのうえ、ナイトテーブルには数千マルクの現金がしまっていた。警察がいま必死に捜索している、問題の侵入者は、家の主人が死亡し、故人の部屋でだれにも妨げられずに仕事ができそうなことを、おそらく偶然に聞いたであろう。ベッドで出番を待っていたネドマンスキーは、侵入者と格闘するはめになり、当然ながら侵入者が力にまさり、ネドマンスキーを枕で窒息死させた、というふうを考えざるをえない。ボルケンハーゲンが指摘する、ネドマンスキーの家族や仕事仲間の対立関係にかかわりなく、いっさいの状況証拠からみて、同侵入者以外の者が殺人犯として考慮の対象になることはあるまい—およそ殺しが問題となるかぎりには。むろん、次の点でマンハルトは私の意見を正しいと認めた。侵入者が単に偽装のために押し入り強盗のようにふるまい、実はネドマンスキーをあのような絶好の瞬間に殺害する目的で、第三者に雇われて報酬を得ていたという可能性も計算に入れなければならない。でもその場合、この第三者は、ネドマンスキーとボルケンハーゲンがもくろんでいた計画をあらかじめ知っていなければならないが—いったい当の情報をどのようにして入手したというのか？ 純粋に理屈のうえでは、〈要求による殺人〉も、したがってボルケンハーゲンが犯人だとも考えられる、とマンハルトは認めたが、とてもありそうにないことだという。いずれにせよ、侵入者に全力をそそぎたい。万一侵入者自身がホシでないとしても、犯行中の者を目撃するか、あるいはネドマンスキーの断末魔の苦しみなし自殺未遂の現場に居合わせたかもしれない。いや、ネドマンスキーは自殺未遂をくわだて、ほとんど自殺に適さない試みや状況にもかかわらず、特異体質のせいでほんとうに死んでしまった—いわば死神に力を貸す結果になった可能性さえ、そうあっさりとは否定しきれない。何度も心臓発作に悩まされていたのだし、法医学研究所の医師団も、ネドマンスキーは当夜の事件がなくてももはや一年以上は生きられなかったとの結論に達している。記憶が正しければ、

極度に進行した動脈硬化、正確には冠動脈硬化症、つまり心臓の冠状血管の硬化とかいっていた。おまけに、いつもひどい呼吸困難をとまなう、狭心症がくわわっていたらしい…こうした状況のもとでは、もちろん、ネドマンスキーがなんらかの操作によって自分の死を意識的に招いたことも排除できないが、本官はほぼ疑問の余地なく、押し入り強盗が典型的な激情行動にかられてネドマンスキーを殺害したという見解に傾いている。すべてはかなり明白だからね—ネドマンスキーが強盗にとびかかり、強盗が防戦したのだよ。

マンハルトは話し合いがすすんでもこの意見を固持した。私たちはあとしばらく共通の友人や知人についてしゃべり、それから別れた。対談は十七時三十分から十八時四十五分までつづいた。マンハルトはたえず私に最新の情報を提供すると約束してくれた。

この覚え書きを私は小声で悪態をつきながらわきにどける。あのとき、マンハルトと話したあとも、相変わらずよくわからなかったが、事件にぼつぼつ興味を覚えはじめた。

妻がはいってきて、ひどく誘惑的な寝巻き姿でうろついた。私にキスをし、お休みと行って、またぞろ行われるべき務めをはたすよう、かきくどこうとする。

私はうめき声をあげる。「けしからん！ この仕事は朝までに片づけなければならん、と知っているくせに…」

妻はひきさがる。仏頂面をして。（一般に表現力が乏しいとはいえないドイツ語に、これをあらわす言葉が、なぜこんな動詞しかないのだろう？ 「仏頂面をする」(Schmollen)なんて、まったく十九世紀の遺物だ…)

そうそう、私は当時もうかるスクープをかぎつけた。必要な調査にゴーサインとともに、時間と軍資金をもらった。さしあたり成果をあげるには、ボルケンハーゲンと手を組んで仕事をするしかない、とすぐ悟った。それゆえ彼に連絡をとった、しかも電話で。ときどきグリ通りの社会学の図書室で彼をつかまえられることがわかった。それに運もよかった。このような場合にはいつもするように、そのときの会話もアダプターとテープを使って録音しておいた…ボタンを押すと、録音テープがまわりはじめる。

—自由大学です。

—社会学の図書室をお願いします。

—ちょっとお待ちください。

—社会学図書室、ラツラブ…

—おはようございます。お邪魔してすみませんが、ボルケンハーゲンさんが図書室にいるか、見ていただけないでしょうか？

—はい、いらっしゃいます。

—ちょっと電話口に呼び出していただけますか？

—どちらさまでしょう？

—キーです。

—え？

—キー。k y です。

—キーさん…もしかしてヴェトナムの方ですか？

—そのジョークはいつか以前にも一度耳にした気がします…

—これは失礼しました！ では、お呼びします。

—ありがとうございます。

（間。電話にガリガリ雑音がはいる。）

—ボルケンハーゲンです。ドクター？

—はい…相変わらず自由の身でいられようで、うれしいよ、ハルトマン医学博士殿！

—こちらこそうれしいです。原稿を読んでいただけましたか？

—読んだ。それで電話したってわけさ。

—では買ってくれるのですね？

—どちらともいえない。あれだけじゃもちろんつまらない。事件全体がどうなるか、ちょっと待つて結果をみなければならん。実はねえ、かなり多額の経費勘定を認めてもらえたのだ。調査を手伝ってくれる気はあるかい？

—すばらしい！ ええ、もちろんですよ。

—一節かそこらのご自身で書いてもらっても結構だが、私の名前で公表される

ことになる。

—そりゃ仕方ありません。

—私の名はともかく銘柄品だが、きみの名は違う。でも、やがてきみ自身が依頼をうけるようになることは請け合うよ。金銭的慰謝料についてはなんともいえないがね。

—オーケー、ドクター。いつからはじめます？

—どこから攻めるのが一番いいか、名案があるかね？

—ぼくの見るところでは殺しであり、殺人犯は侵入者じゃなく、客の一人です。

—侵入者じゃないって？ ちょっと待ってくれよ—訪問客は知らなかったのではないの、ネドマンスキーがまだ…

—もしかすると知っていた—全然わかりません。あるいはだれかが秘密をかぎつけていたかもしれません…いずれにせよ、侵入者と同じくらい疑わしい人物が少なくとも四人はいます。

—四人だけ？ それならまだなんとかなる…

—四人を皆じっくり調べてみるのがいいのではないのでしょうか。

—よろしい。では、だれからはじめよう？

—マルティーナはどうでしょう？

—結構だ。彼女はいつ仕事が終わるだろう？ 五時かな。そうだとすれば、六時には家に帰っているはず。どこで落ち合おうか？

—六時に地下鉄のノイ・ヴェスト＝エントでお待ちします、あとはあなたの車でいけるでしょうから。ぼくは一度ネド社に電話をして、彼女がどこに住んでいるか尋ねておきます。

—わかった。では今晚。

—はい。ではまた。

—じゃあね。

(ガリガリ雑音)

私はこのあとボルケンハーゲンとともにマルティーナ・ダームス—事務所と寝室で勤務するネドマンスキーの助手—の家へ出かけていった。この訪問直後に、私

はタイプライターにむかって数ページの報告書をタイプした。ざっとそれに目をとおす…

ボルケンハーゲンは約束の時刻に約束の場所で待っていた。まるでポップ歌手のように見え、娘たちが彼のほうを振り向いていた。ぶかぶかのシカ革ブーツにコールテンのズボンをはき、恐ろしく窮屈な黒いタートルネックのセーターを着て、首には中世の市長に似合ったような銅色のネックレスをつけていた。

「時間厳守は編集者の礼儀作法です」、ボルケンハーゲンは私の車に乗りながらいった。「ぼくの花に注意！」

「花…」

「ええ、花です。要するにぼくらは、目下ご主人のいない、貴婦人のお宅へうかがうのですから」

「彼女はどこに住んでいるの？」

「クネーゼベック街一六番地。豪勢な五部屋の住居—ご老体のネドマンスキーは性生活にきつと気前よくお金をかけたのでしょう。汝^{なんじ}らいたわりあえ！」ボルケンハーゲンは後方へ身をよじり、私が途中で買った夕刊を釣りあげ、大見出しにざっと目をとおした。

私はちょっと苦笑した。「ところで、きみはいまいったいどこに住んでいるの？」

「オリンピック橋裏手のあずまやに一亡くなった祖母の遺産です…ねえ、新聞にはなにも出ていませんねえ」

「きみのあずまやのこと？」

「はい、あのことも載っていません…ハルトマン博士にふんしたぼくの役のことですが。ぼくはいまだに本物とみられています。報道機関は沈黙を守っている—ネドマンスキー家はいいコネをもっているにちがいない。サツがこれまでにぼくの二役について情報をもらしたのは、五人だけです：マルティーナ、ギド、ヴァルター・ネドマンスキー、ネドマンスキー夫人、それにドライアー。この人たちはおそらく口をつぐむでしょう。この連中はこういう類の公表を好みませんから…埋葬式にでられますか？」

「ちょっとのぞいてみようかな」

「デカは犯罪捜査の戦術的理由からなにもいわない。殺人事件が解明されたとき、ようやくぼくの出番になるのでしょうね」

「法律家じゃないが、きみはきっとたいした目にあわないだろう」

「最善を期待しましょう…そこ—その角を左に曲がると、すぐでしょう」

「これはまだライブニッツ通りだよ！」

「ああそうですか、この辺りはよく知らないもので」

「なんとかなるさ」

まもなく着いたクネーゼベック通りは霧囲気がある。いつも私にちょっとパリを思い出させる。泡沫^{ほうまつ}会社乱立時代^{xviii}の古いきらびやかなファサード。その背後の大きい住まいには、多人数の家族、生活^{コミューン}共同体、俳優、教授、映画人などが暮らしている。広い歩道は一種のるつぼ：ヒッピー、ふとった汗だくの婦人、やかましい泥まみれの子供、人形みたいなマキシ娘、がっしりした労働者、ときおりポン引き、男娼^{だんしょう}、飾り立てた芸術家、いいかげんな学生、スーパーマーケットのポリ袋をさげたプチブルたち。レストランの軒先^{いす}にならぶ椅子、キイチゴ果汁入り白ビール、シュビツヴェーク^{xix}の類型。

駐車余地を見つけ、私たちはマルティーナ・ダームスが住むという建物のほうへわたっていった。ボルケンハーゲンは古い市役所のドアのように重い、練鉄製のドアを押し開けて、小さい駅舎ホールみtainな大理石張りの玄関の間に、私たちは立った。そこは涼しく、上品な香りがする。見るからに高尚な階段が上に通じ、黄色っぽい石のうえに赤いじゅうたんが敷かれ、すでにいくらか曇った巨大な鏡があり、二階には彫刻をほどこした手すりのあるバルコニーや、オーパス・グランドホテルに見られるようなエレベーターもあった。一泊六百マルクはくだるまい。

「情婦になりたいものですねえ」　ボルケンハーゲンはぼやく。「ぼくのあずまやを思えば…」

四階でM・ダームスと名前を芸術的に彫りこんだ真鍮^{しんちゅう}製の表札を見つけ、ボルケンハーゲンがブロンズのライオンを引っ張った。奥でカチャカチャ音がし、足音が聞こえた。

戸口にマルティーナがあらわれた。真っ黒に日焼けし、白いショートパンツに青い花柄のブラウスを着ていた。スリムで、背丈はちょうど私の肩までであったが、ボルケンハーゲンの言葉から想像していたほど、愛くるしくは見えなかった。

「お嬢様、おじゃまします！」、とボルケンハーゲンはいって、大げさな身ぶりで花束一七本の赤いバラを手渡し、くしゃくしゃにまるめた包装紙をこっそり私の手に握らせた。

マルティーナは^{あぜん}咄然としていたが、顔を見ると喜んでることがわかった。だれもがいまや旦那のいない^{しょうふ}娼婦ぐらいに思っている、と想像して悩んでいたらしい。「さあおはいりください」

「ありがとう」

私は紙ボール〔包装紙〕を、どうやら傘立てとして使っているらしい、大きな花瓶のなかにほうりこみ、自己紹介をした。私たちが勤めている、グラフ雑誌の名前もつげると、「それなら毎週読んでいますわ。ネドマンスキーについて知っていることはすべてお話します。もちろん謝礼なんか論外よ」

「恐れ入ります、ダームスさん…」

「どうぞおかけになって。氷とジナルコで割ったジンを飲まれますか？」

「あなたがそのカクテルをつくってくださるなら一喜んで！」

彼女は台所でごそごそたちはたらき、私たちに居間を見まわす時間ができた。ボルケンハーゲンは豪華なコーナーカウチにすわり、物知り顔でゆりうごかす。ほぼ正方形の部屋は、おおよその見当で縦横六メートルくらいあり、黄金色のじゅうたんが敷きつめられていた。壁はオレンジ色と明るい灰色に塗られ、まっすぐ並んだ白い家具のあいだに、ベルリンの芸術市から買いあさった、色鮮やかな油絵が数枚かかっている—ちよっぴりピカソ、ちよっぴりクレー、ちよっぴりミロ、ちよっぴりシュルツェふう。おとなの背丈ほどもある花瓶の形をしたランプは、台が照らしだされ、たしかに五百マルクはしたかもしれない。白く^{しっくい}漆喰で塗装された天井から、豊満な天使たちが私たちを見下ろしていた。一メートルも部屋のなかに突き出ている、ユニット式の書棚のうえにはグラス、ポケット版の本、一個の振り子式置時計と二個のステレオスピーカーが置かれていた。

マルティーナは飲み物を運んでくると、私の正面のキュウリ色をした二番目の

安楽いすにすわった。「タバコを吸われますか？」

私は断わったが、ボルケンハーゲン是一本もらい、マルティーナも取る。彼はタバコの火を貸しながら、無遠慮に相手の目をのぞきこむ。マルティーナはすぐ目をふせた。その仕草は、いままで見せていた自信のある、毅然とした、ほとんど傲慢な印象にそぐわなかった。

はてな、私は考えた。お嬢さん、自信がないの？ どの仮面が自分にいちばんよく似合うか、まだよくわかっていないのかな？ 私は尋ねた：「ご存じですね、どんな契約をボルケンハーゲン氏が…ネドマンスキーと結んでいたか？」

「ええ、刑事さんたちが話してくれました…いかにもマックスちゃんらしいわ！」

「マックスちゃん？」 私はほほえんだ。

「まあ、そんなに笑わないで！ どうなっていたか、ちゃんとよくご存じなのでしょ。私が彼の…あの方が全部お金を出していたって…」 「全部」をだきしめるような腕の動きをみせたかと思うと、気づかわしげにタバコを吸って、灰をおとした。「ところで、どうしてこういうことになったか、知りたいのね？」

「そのとおりです！」 私は彼女の組んだ太腿ふとももにみとれ、突然ネドマンスキーに共感のようなものを覚えた。我々はみんな人生を味わいつくしたいのだ。

マルティーナはタバコをもみ消し、一口飲み、グラスを手にもっていた。「じゃあ、どこからはじめましょうか…」

彼女はすてきだった。小悪魔、かわいいじゃじゃ馬娘、チャーミングなおてんば。細面で、ちょっとクリオール人^{xx}を思わせる。ブルネットの髪が長く肩に落ちかかっていた。大きいアーモンド形のエキゾチックな目は、暗褐色ないし黒色。鼻は小さい愉快的な団子になって、顔から厳しさを奪っていた。

やっとマルティーナは事務的に日常の言葉で話しだした。「両親は一九四九年、鉄道事故で命を落としました。私はちょうど三歳でした。両親のことはほとんど思い出せません。私はおばさんに育てられた—といっても血縁関係はなく、親しみをこめて『おばさん』と呼ぶ人のことでした—私の代母…エリーザベトおばさんは、施設よりも少しましでしたが、さほどよくありませんでした。おばさんの夫はスターリングラードで戦死して、おばさんはたえず鬱病うつびょうに悩まされてい

た。私が二十歳のとき、おばさんは五階のバルコニーから飛び降りました一目の前で…」 マルティーナは、私たちのまえのガラステーブルに置かれていた箱から、新しいタバコを一本つまみとった。

ボルケンハーゲンは彼女に火を貸す。「おそろしい」といった彼の声には真剣な響きがこもっていた。

「ええ、たしかに…」 不意に顔がこわばり、マルティーナは二、三歳老けた感じがした。「あのときの情景が繰り返し眼前に浮かびます。まるで映画のようです。そこに私が立ち、あそこにオバが立っている。いまオバがとぶ…映像がこの私だと信じるには、いつもしばらく時間がかかります」 マルティーナは目が細長い切り口のようになるまですぼめた。かん高いブンブンうなる耳鳴りに苦しむかのようにみえた。

「ネドマンスキーは！」、と私は声をおさえて催促した。

彼女はぎくっとした。「なんですって？」

家の上空を飛行機がとびすぎていった。明らかにかなり低空を。

「始終このような航空機の騒音！」 彼女は苦情を訴えたが、すぐ生き生きと話をつづけた。「私もいつかまた飛んでみたいわ。二年前にコペンハーゲンへいきました…あの重い物体がいったいどうして飛べるのかわからない。正体はなにかしら？ 私は時間をかけてつくづく考えました—空気…空気は生きていない、と物の本には書いてある。また酸素も水素も、それらはみな生命のない物質であると…でも私にはこう思えるの。まるで…それらはごくごく小さい生き物で、あまりにも小さいために、見分けられない。でもね、すごく強い力があって、到る所にもぐりこめる、いや、好きなところへ、どの人間にも毛穴を通して、そうなのよ…芸術家はこれを一度描くべきだわ」 マルティーナは笑い、急に顔の表情がゆるんだ。「そう、ネドマンスキーのことでしたわね…マックスちゃん、あの人も飛ぶのが好きではなかった。ヒトは両足で地上に立ってはいなくてはいけないって、いつもいっていた…どうして彼と出会ったか？ 私は英国欧州航空につとめる地上窓口のステュワーデスで、航空券を売っていた…そのころすでに哀れな女でした。アルコールにおぼれ、夜は眠らずに、酒場でとぐろを巻き、おおぜいの男と—私は落ち目になり、すでに終わりが見えていた。そんなとき、ネドマン

スキーがロンドン行きの切符を買って—それから私を食事に誘ったのです…ええ、それがきっかけでした。彼はふたたび私をまっとうな人間にしてくれた」彼女はグラスを半分飲みほした。

「彼を愛していたのですか？」

「愛していた…」彼女は肩をすぼめた。「ときにはたしかに、そう思います。あの人はときおり私に親切でした。でも、私に好意を寄せている、そのようなことはもともと一度もありません」

「彼に対して憎しみの感情もありますか？ 別れてくれないとか、あなたをすっかり意のままにしていたとかで？」

「憎しみですって？ おやまあ—いったいどちらにお住まいですか？ 月世界？ 愛、憎しみ…実生活でもお宅のグラフ雑誌の小説みたいにことが運ぶ、と本気で考えていらっしゃるのかしら？」 マルティーナはじっと天井を見あげた。

「私にはあの人が必要でした」、ゆっくりした口調で話した。「また彼は私が必要でした—それがすべてでした。愛がなくてもなんとかなるし…」話が途切れた。「ちょっと失礼！」彼女は立ちあがり、玄関へでていく。「ベルがなりましたので」、肩越しに声がした。

「くそっ！」 ボルケンハーゲンが不平をならした。「ちょうど彼女に調子がでてきたときに…」

「しっ！」、と私は制止した。

外で声が聞こえた。隣人であった。マルティーナのカープリが隣のフォルクスヴァーゲンの通路をふさいでいるらしく、車を少しバックさせるために、マルティーナは下へおりていかなければならなかった。彼女は多弁に謝罪したあと、後ろ手でドアをガチャリとしめた。

一言も示し合わせることなく、私たちは同時にとびあがった。二人にとって住まいを少し精査する好機だった。

ボルケンハーゲンが寝室にとびこみ、ナイトテーブルのなかをひっかきまわしているあいだに、私は隣室へかけこみ、書き物机—通信販売会社アンピール—の中身を調べた…たしかに—ほめられたことではない。そうだとしても、上品でいながら、大衆紙にうけるものを書いているジャーナリストに、あなたはお目にか

かったことがおありですか？

ほらね。

積みかさねた古い手紙の山から、私は八つ折り版のノートを見つけた—マルティナーの日記。ページをめくりはじめ…驚いた。

三月二十四日—私はまたもや以前よりひどく白昼夢に悩まされる。とりわけタイプを打つとき。今日はずっと、全員がマックスちゃんのように見える、おおぜいの子供らに取り巻かれている感じがした。私はずっと子供たちと遊んだ。ところがちっとも好きになれず、まったくいらいらさせられた…

四月十四日—あのピチャピチャと食べる音が頭にこびりついて離れない。マックスちゃんはい、おまえがときおり哲学教授のようにしゃべりだすと、わしはもうさっぱりわからなくなる…

五月三日—私はどこか悪いのかしら。ときおり頭の中にラジオの受信機があるみたいなのがする。そうして繰り返し心の声が聞こえるように思われ、私にこうささやきかけてくる：マックスちゃんはおまえを厄介払いしたいのだ。おまえを男どもにつけねらわせて殺そうとしている。彼はおまえをもう愛していない。おまえはいまではもう重荷でしかない。彼はおまえを片づけたい。奥さんがそのように仕向けた。おまえは先手を打たなければならない。殺されるまえに、彼を消せ。すぐやれ。おまえはあいつを憎んでいる。いつも強姦ごうかんされているのだから…そのあと、ふたたび静寂が訪れ、すべてがいつもどおりになる。どうすればいいのかわからない。私はこわい。夕方に道で見知らぬ男と出会うたびに、叫びそうになる。マックスちゃんと別れなければならない。でも、どんな方法で？ 私は…

家の鍵かぎをあける音が聞こえると、あわてて私は日記をまた手紙のあいだに押しこみ、もとの席へ全速力でかけもどった。ボルケンハーゲンはずでにすわっていた。彼は問いたげに私を見つめる。マルティナーはじっくり時間をかけ、玄関の間で話しこむ声が聞こえてきた。

「気の毒な女の子！」、と私はつぶやく、「まったく彼女はまるで…」 私は話を中断したが、彼女はまだはいつてこなかった。

「なんですって？」 ボルケンハーゲンが尋ねる。

「妄想性の精神分裂症か、それに似た症状のはじまりだね」

「おやおや—こうおっしゃりたいのですか、彼女は…」 彼は話をうちきった。

マルティーナがもどってきたが、同じ年頃の普通の娘と変わらず、正常そうにみえた。「どうにかうまくいったみたい！ 割り込み駐車のために、ただちよっぴり目測を誤っただけなの。殿方は私についてよく話しあえたかしら？」

「あなたのことを話しているのではありません」、ボルケンハーゲンは答えた。

「あなたのことを夢見ているのです！」

「あら…」 彼女は少し当惑した。「まだなにかお知りになりたいければ、ドクター…？」

心配りよりもむしろ戦術を選んで、私は尋ねた。「なぜ黒服をめされないのですか？」

無作法な口調が彼女には気にならなかったらしい。「近ごろ黒服を着る人がまだいるのかしら？ どっちみち、囲われ者には、そのような慣習にしたがう必要はありません」

「なんといっても、あなたは彼のところで秘書として働いておられた」、とボルケンハーゲンが口をはさむ。「親密な協力者として、といえます」

「ええ…」 彼女は感謝の気持ちをこめてほほえんだ。

「ネドマンスキーさんは敵がたくさんいましたか？」

「敵なら頭の髪よりも多いくらい」

「だれが殺したと思われませんか？」

「ねえ、押し入り強盗じゃないの！ それとも…」 彼女は言葉につまった。

「それとも？」

「話していいものかどうかわからないけど…」 彼女は神経質にタバコを吸い、左手でサンダルの留め金をもてあそぶ。

私たちは待った。

「ただ、警察になにもいわなかったことですから…ご存じかしら、ギ…ヴィンクラーさん、ネドマンスキーさんの甥おいに当たる人？ ギド・ヴィンクラーを？」

「知っていますとも！」 ボルケンハーゲンはうなずいた。「誕生会に出席されていましたから」

「彼はすっかり私にのぼせています。何度もラブレターをよこしました—ほんとよ！」 マルティーナは笑った、少々けたたましすぎるほど笑った。「ギドは私を救いだしたいと書いていたわ。自堕落な生活から、貞節な正妻へ。さらに行間から繰り返し読み取れたわ—彼はネドマンスキーを殺すつもりでいる、もしネドマンスキーが私を…ええ…私を自由にしなければ、と。私はなにも彼が犯人だというつもりで打ち明けたわけじゃありませんが…」

「手紙をまだおもちですか？」

「いいえ」

私たちは見つめあい、ボルケンハーゲンは肩をすくめた。

「ほかの人たちのことをどう思われますか？」、と私は尋ねた。「たとえばヴァルター・ネドマンスキーは？」

「二人は水と油でした。ヴァルターは生涯幸運に恵まれず、いつも二番手に甘んじていました。でも人殺し—とんでもない…どのくらいあのかたが相続されたか、知りたいわ！」

「じゃあドライアーは？」、ボルケンハーゲンが問う。

「ドライアー？ ドライアーとネドマンスキーのあいだには、主人と犬のような関係が支配していた。マックスが口笛を吹けば、ドライアーはいずれより、尻尾をふっていた、まあいってみれば」

「ドライアーにはなにか動機があったのでしょうかね？」 私はさらに質問した。

「考えられないわ…あの人には庭師で、執事で、万能のお手伝いさんでした…さほどよく知らないけど、本人もまあまあ満足していたと思う。人生の落伍者、実はねえ—最近ドライアーは、私に絵を一枚売りつけようとして、少し身の上話をしたの…おばあさんが亡くなられて、彼はその家を相続した。祖父は画家だった—リューネブルク荒地の日没とか、そういった作品。そのほかに、持ち運べるものはなにもかも模写していた…それらの絵もドライアーは相続したらしい。彼がきたのは、あのね、私に一枚売りつけたかったからなの…」

私たちはまだしばらくあれこれいろんなこと、とりわけネドマンスキーの特徴について語りあったが、それまでにネドマンスキーやマルティーナについて聞いていた、イメージは本質的に変わらなかった。

私たちはすでに別れをつけようと立ちあがっていたが、突然、ボルケンハーゲンズはズボンのポケットから、ケネディー硬貨のぶらさがった、金のネックレスを取り出した。「これをご存じですか？」

マルティーナは青ざめたのか、あるいは私がそう感ただけなのだろうか？

「台に書かれています：ティーナのためにマックスより」

「ええ、このネックレスは私のものです」、彼女は小声でつぶやいた。

「ぼくはこれをネドマンスキーのベッドのそばで見つけました、あの夜に…」

ボルケンハーゲンはネックレスを彼女にさしだした：「さあ どうぞ！」

マルティーナは自動機械のような動きでネックレスを受け取った。

これで私自身が書いた第一章は終わっている。ひとつの疑問がここに生じた：あのマルティーナのようにきゃしゃな人物が、そもそも肉体的にみて、ネドマンスキーのような男を枕で窒息死させられるのか？

誤解を避けるためにいえば、マルティーナ・ダームスに対する嫌疑は、故人の別の側近にむけられる嫌疑よりも重いか、根拠があったとしても、この時点ではどうい訴訟に堪えられるものではなかった（なぜならネックレスは諸般の事情から彼女が他の機会に紛失した可能性が十二分にあるのだから）。さらに正確にいえば、本来まだ容疑はまったく固まっていなかった（警察はさしあたり未知の侵入者に捜査的をしぼっていたが）。しかしながら私たち、ボルケンハーゲンズと私にとっては、どの面接者にも、彼（ないし彼女）が犯人として考慮の対象になるか、という観点から会うことが重要であった。

とにかく、調査の結果、マルティーナ・ダームスは数年間ベルリン体操連盟の女子チームに所属し、段違い平行棒で九・〇五の評点をとっていた事実が判明したことから、問題の解答、しかも肯定的な答えがでた。（ついでに記せば、マリーア・ネドマンスキーはテニスをし、さらに、平均以上のすばらしい女性泳者と認められている…）

では次。ほかにいったいなにがあるのだろうか…ドイツ工業規格用紙サイズA四判三ページに私は葬儀のあとびっしりタイプしていた…これはどけよう。人びとがおおげさに話している場合、そのあと不自然な誇張しか記録できないものだから

ら。—ここに、これはなんだ？ 百万長者、誕生日に殺される…最後のパーティー客は死神…おや！ 夜間至急便の切り抜き！ なぜこれをとっておいたのか？ なにが書いてある？

隣室で上機嫌の招待客が五十七歳の誕生日を…のあいだに、ネド工場の有名な創立者にして筆頭株主であるマックス・ネドマンスキーが、昨晚殺害された…まったく奇妙なことに、ここで早くもあらゆる別の可能性が無視されている—刑事警察から情報を入手していなければ、こうは書かなかっただろう。—さらに：犯行の有力な容疑者は、二十二時三十分ごろバーデンアレー街一二四番地の屋敷に侵入した男で、全体の混雑を利用して悠然と…私たちも知っているように、豪華な宴会のあと、ネドマンスキーは軽い心臓発作を起こした。一人の居合わせた医者が…空疎な饒舌^{じょうぜつ}…しばらくして患者をみたが、もはやネドマンスキーの死亡を確認するしかできなかった。ほかのみんなと同じように、医者も、ネドマンスキーは自然死を遂げた、とその時点では信じていた…その後まもなく…ショートによる停電…ふっつわいた混乱のさなかで、押し入り強盗が狩りだされたが、犯人は逮捕をまぬがれることができた…すべて私たちは先刻承知のこと！—翌朝、ハルトマン博士は、刑事警察へ出向き、ネドマンスキーはもしかとすると殺されたかもしれないとの疑いを表明した…そうか、彼らはこのように真相をねじ曲げたのか！ そうして相変わらず「ハルトマン博士」…犯人と思われる者は…次のような人相書き：およそ三十歳、ほぼ中背、やせ型、やせ細った顔、金髪、著しく血管の浮き出た手、めだつ喉仏^{のどぼとけ}…刑事警察が…発表している推測によれば、犯行はいわゆる「パーティー荒らし」の仕業であり、最近頻々と…いや、このような記事ならほんとうは保管の必要がなかったかもしれない。警察はここですでに本件を断定的に殺人事件とし、押し入り強盗を容疑者ときめつけていることは、なにも目新しいことではない…ああそうか。あらたに、マリーア・ネドマンスキーが犯人逮捕にかけた賞金についてふれている—一万マルク。こりゃすごい。勇敢なボルケンハーゲンが即刻このパーティー荒らしの捜索にのりだしたのも不思議じゃない—とどのつまり侵入者に面とむきあった者はあいつだけなのだ…どこだ…ああ ここに、ボルケンハーゲンの犯人追跡報告がある。

ボルケンハーゲンはポツダム通りに面した飲み屋を転々とする。木曜日、夕方六時をまわったばかり。どのテーブルもふさがっている。カウンターにももうほとんど席がない。仕事帰りの男たち、遅番で出かけようとしている男たち。そのあいだに浮浪者、失業者、暴走族、ポン引き、犯罪者、自分らの側から手数料を支払う、娼婦やどぎつい化粧をした女たち…ボルケンハーゲンはポーカーフェイスをさがす。侵入者にそのような名前をつけていた。ネドマンスキーはポーカーフェイスによって殺された、とボルケンハーゲンは信じている。

ボルケンハーゲンはカウンターの高い腰掛けにすわっている。ほとんど向きを変えられない。左側に左官。石灰、砂、コンクリートの臭いがする。右手には自動車整備工が二人。オイルの臭いがする。

[…] [原文10行、方言の羅列で訳せない]

ボルケンハーゲンは見込み違いをしていることに気づく。ポーカーフェイスの臭跡はまったくくない。これでもう三軒目の飲み屋。ポーカーフェイスの身になってみようと試みる。

「もう一杯ピルゼンビール？」

「ふむ…」

ポーカーフェイスはサツとおれを恐れているだろう。やつを確認できるのは、おれだけだ。殺人捜査班の似顔絵はまずい。ポーカーフェイスに似ていない。やつは殺人犯か、そうでないのか？ どちらでもいいや。やつは殺人犯にされるのを恐れているだろう—どっちみち。パーティーの招待客に殺人の罪をなすりつける者はいまい：大物ばかりだからな。嫌疑は依然としてやつにかかっているだろう…たとえホシじゃなかったとしても。もしかするとやつはほんとうの殺人犯を見たかもしれないし、再認することができるかもしれない…やつは殺人犯をゆすすることもできる。ゆすりのできることを教えてやらねば。それでやつがしくじると、サツは二匹のハエを一度にたたきおとすことができる…

ポーカーフェイスを見つけねば、とボルケンハーゲンは考える。この町には数百万の住民がいるからといって、ばったり出会わさないとかがぎらない。探さねばならない。あいつをつかまえるチャンスは非常に大きいわけではないが一さがさぬかぎり、決してつかまらない！

勘定をすませ、ボルケンハーゲンは通りにでる。一台のバスがけたたましく通りすぎる。スポーツパレスの前でとまる。十代や二十代の若者が渦を巻いて降りてくる。汗がふきでそうなミニスカート。バスのなかでどこかのぼかな抜け作が歌をうたい、あとであの少女らのだれかと寝るのだろう。流行歌手であればなあ。よし、おれがもし流行歌手なら…

あそこ—あれは…ポーカーフェイスだ！

ボルケンハーゲンはスリムな男を追っかける。白いヘランカのセーターに紺のズボン。サングラスをかけて…いま追いついた。横一線に並び、ボルケンハーゲンは左側に流し目をくれる…

くそっ。

ボルケンハーゲンはショーウインドーのまえで立ちどまり、男がのぞいていることに気づく。静かに息を吸って！ ガラス越しに見る。カラーテレビがここにあり、そして…

ちょっと待てよ！

この灰色の背広を着た男なら一少なくとも三回は見たことがあるぞ。ずっとこの辺りをこそこそうろついている…まるでエーリヒ・オレンハウアー^{xxi}みたいだ…オレンハウアーは玄関に消える。

ポーカーフェイスが友達の一部にボルケンハーゲンのあとを追わせているのだろうか？ そうかもしれん。あいつらもばかじゃないから。

ボルケンハーゲンはキオスクでカレーソーセージを食べるが、オレンハウアーは消えたままだ。

「失礼、ちょっと火を貸してくれますか？」

ボルケンハーゲンは驚いてふりむく。やせた男が後ろに立っている、年格好は三十ぐらい。ひげをそっておらず、なんとなく物騒な感じ。陰険な褐色の目。

「ちょっと待ってください」ボルケンハーゲンは上着の左ポケットを探しまわる。両手がかすかにふるえている。マッチは見つからない。「残念ですが…」

やせた男は立ち去る。

ボルケンハーゲンは額の汗をふく。それから最後の小さい一切れのカレーソーセージを突き刺し、ゆっくりとかむ。いつまでもガムのように。

しばらくしてボルケンハーゲンは青白赤のプラカードを見つける：独仏民族祭。ポーカーフェイスはジェットコースターに乗ったり、恋人のために赤いバラを射止めたりするのが好きだろうか？　　いうまでもない—彼ならしそうだ…それ急げ！

ボルケンハーゲンはR四に乗りこみ、クルト・シューマッハア・ダムへとぼす。テーゲル飛行場の高みに派手な大観覧車がくすんだバラ色の空にそびえる。ゴンドラがまわっている。駐車場を見つけ、入場券を買い、雑踏のなかへとびこむ。ジェットコースターに乗り、赤いバラを射止めるが、ザビーネがいなければ、お祭り騒ぎもひどく退屈だ。飛行いすやゴーカートにも乗る。ひとりの少女に出くわし、二言三言はなす。彼女はたしかにその気があるようだが、せいぜい十五歳ぐらい。彼は娘を釈放する。さがしているのは妖精じゃなく、ポーカーフェイスだ。革張りのクッションをどんとたたくと、針はサルを指して動かなくなる。まわりに群がる人たちは笑うが、ボルケンハーゲンはいっしょに笑わない。女の子でも連れていたらなあ…マルティーナ！　マルティーナでもかまわないじゃないか。最寄りの電話ボックスへ駆けこみ、彼女に電話をする。話し中。電話帳をめくり、もう一度ためしてみる。今度はだれもでない。なんとなくもの悲しくなる。もしかするとマルティーナが好きになったのかな。まさかそこまでは！　あの女はもう清らかな時をつくらない…火遊びはよせ。

呼び売り商人があまりにうるさいので、ボルケンハーゲンは富み籤^{くじ}を二枚買う。縫いぐるみの熊^{くま}が当たり、三歳の女の子に熊を贈ると、母親のおおげさな返礼三部合唱。ボルケンハーゲンはさらに先へ進み、入口のそばを通りすぎながら、通りを見やる。おい—あの向こうに…あれは、エーリヒ・オレンハウアーだ、灰色の背広…いや、違う。

ボルケンハーゲンはテューリングンのローストソーセージを食べる。ここへくるのは、愚にもつかない思いつきだった！　ポーカーフェイスがここで何をするというのか？　　きっとあいつはとっくに寝ているさ。それとも、ちょうどどこかに忍びこんでいるところだ—やつにまだ勇気があれば。

どうしよう？　ボルケンハーゲンはぶらぶらと化け物コースターのほうへ歩む。大きな混雑はなかった。近頃でも人びとはこのように戦慄^{せんりつ}を求めている。彼

は明るい緑色の車をさっとつかみ、体をむりやり押しこむ。いちど推理小説を読んだが、たしか化け物コースターのなかに死人が転がっていた。死刑執行人の右後ろでといった題名で、のちにテレビドラマにもなった…ぴしゃっ！ 革のドアが後ろで音を立てて閉まる。細縄が顔に軽くふれ、されこうべの目が赤く光る。前方にけたたましい叫び声。大鎌おおがまをもつ骸骨がいこつの姿をした死神。棺のふたが開く。緑のワニが手にかぶりつく。ボルケンハーゲンは笑うが…笑い声がのどにつかえて出てこない。男がひとり敏捷びんしょうな身のこなしで舞台装置を身軽に跳んでゆく…
ポーカーフェイスだ！

男がこちらにむかってくる、近づいてくる…ボルケンハーゲンは悲鳴をあげ、車から飛び降り、レールにつまずき、倒れ、その場に横たわる…むんずとわしづかみにされる。ののしり。ボルケンハーゲンは外につまみだされる。

あえぐ。汗が額にたまっている。やっとのことでほっと一息つく。あれはポーカーフェイスではなく、見せ物師だった。どこかに故障があったのだ…ボルケンハーゲンはゴーロワーズ^{xxii}に火をつける。やれやれ、気分がよくなった！

要するにポーカーフェイスがこわいのだ。それも当たり前のこと。ポーカーフェイスはほんとうにボルケンハーゲンを世間から抹殺するつもりでいるかもしれない。ボルケンハーゲンは、なにしろ彼にとって危険な存在になりかねない、唯一の人物なのだから…もっとも一とボルケンハーゲンは自分に言い聞かせる一逆もまた真なりで、ポーカーフェイスだってこちらを見つけるのはむずかしいだろう。

ボルケンハーゲンは民族祭にうんざりし、遊園地を出てふたたび自分のR四に乗りこむ。日は暮れ、まもなく暗くなる。ライトをつけて、ゆっくり町にむかってゆっくり進む。と不意に発見する…

こんなはずはない！

いやいや、バックミラーは人を欺かない：オレンハウアーが黒っぽいベンツに乗って追っかけてくる。かたわらにもう一人別の男が乗っている。ではポーカーフェイスはやはり…？ ボルケンハーゲンは突然不安になる。

ヘッカーダム沿いの信号が、ぱっと黄に変わり、ぱっと赤に変わる…それでもボルケンハーゲンはアクセルを踏みこむ。あちこちでブレーキがきしむ。無事通

り抜けると、ベンツはもう見えない。ボルケンハーゲンはなおもぶっとばす—英霊になるより、むしろ腰抜けで生きていたい。

彼は町のアウトバーンに沿って走り、メッセダムの出口から出る。汗をかき、目先がちらちらする。おのれを罵倒し、やわな神経に愚痴をこぼす。とろがまた何かを思いつく：あやうく墜落をまぬがれたなら、すぐ次の飛行機に乗りこめ、さもないと、こわくて二度と飛べなくなる…では逃げ！

ボルケンハーゲンはブライプトロイ通りのストリップ・バーへ入っていく。少し前にペルシアとドイツの楽団が競演したことがあり、ここには見るべきものがある。ポーカーフェイスはここで散財していないか？ ボルケンハーゲンはこのようなバーに来るのははじめてだが、グラフ雑誌社が経費を払ってくれるはずだ。

ウイスキーを注文する。同じテーブルに三人のビジネスマンがすわり、聞くともなしにフランクフルト出身とわかる。ネドマンスキーの名前がもれてきて、ボルケンハーゲンはぎくりとする。三人はネドマンスキーを知っていたにちがいない。

明かりが消え、小さい舞台がスポットライトの円錐光線をあびる。悩ましいエロチックな音楽。グラマーな金髪女がミニスカートとプルオーバーにブーツをはいて登場し、例によって体をよじりながら脱ぎはじめる。身にまとったものが少なくなるにつれ、ますます暗くなる。やがてファンファーレが奏でられ—かなり明るくなると、そのすぐあと真っ暗になる。

まばらな拍手。薄暗いランプがふたたびともると、ドアが勢いよく開き、ボーイが一組の男女を案内してくる…ボルケンハーゲンは身がすくむ。

ギドとティーナ。

ボルケンハーゲンは二人に見られないように向きを変える。あの豚野郎！と思う。あのいかついばか野郎に女の子を横取りされた。ネドマンスキーのじいさんが地下に眠るか眠らぬうちに、もう後釜あとがまにすわっている…三人のビジネスマンが立ち去る。プログラムは進行する—二人のもはや若々しいとはいえぬ女性がレスビアンを演じる。ギドとティーナはシャンパンを飲んでいる。

二人の娘がボルケンハーゲンのテーブルにすわる。ともに二十代半ば、少なくとも店の照明で見るとは。二人とも人目をひく身づくろいをしている：長い

黒まつげに、刺激的なアイシャドー、胸にはおそらくシリコーンを注入しているだろう。肌にぴったり張りついた衣装をつけている。赤毛の娘は獣のように見える—こわくなるほどだ。黒髪の娘は感じがいい、ちょっと看護師さんのよう…おい、おれはこの女を知っているのでは？—だが、どこで見かけたか思いつかない。

新たな出し物：一組のカップルが性行為を演じる。アクロバットもどきの体位が楽しませてくれるが、ボルケンハーゲンが黒髪の娘に気をそらされている。ザビーネに少し似たところがある…いったいどこで出会ったのだろうか？

舞台では演者がハアハアあえぐ。赤毛は客を物色する。見栄えのしない男が赤毛のテーブルにすわる。男は見るからに陰気な顔つきをしている。女房に逃げられでもしたのかな。

不意に思いついた：ネドマンスキーとペンションからでてきた娘だ！ 二人が階段をおりてくるのがいまも目に浮かぶ。シュリユータ通り、すぐ隣だ。それからネドマンスキーはタクシーに乗った…黒髪の娘は役にたつだろう。

「ここはすごくにぎやかだね」　ボルケンハーゲンは娘に話しかける。

彼女はほほえむ。

「なにか違ったものを見ようか？」

彼女はうなずく。

彼は娘の飲んだジンフィーズも支払い、いっしょにバーをでる。彼ははにかみ、当惑し、緊張している。すぐ次の角でぐずぐず立ちどまる。

「どうかしたの？」　彼女が尋ねる。

「ぼくは別にその…」

彼女の顔がくもる。

「ただ、あなたに見覚えがあるのです！」

「それで？」

「マックス・ネドマンスキーをご存知でしたね…？」

「ええ、それで？」

「助けてもらえないかと思って」

「サツなの？」

「いいえ、ぼくは…ぼくは医者、ネドマンスキーを…ドクター・ハルトマンで

す。ぼくは殺人犯を見ました。それで侵入者をさがしているのです、つまり…」

「あっそう。わかったわ…いらっしやい！」

彼女のアパートは遠くない。もはや必要としない、ペンションの上階にあった。彼女の名はローズマリー、ロージという。かつては秘書をしていたが、いまではしこたま稼いでいる。

「色情症の女にとってこれほどよい仕事はまったく考えられないわ」、ロージは笑う。

ボルケンハーゲンは彼女に共感を覚える。いっしょに部屋にはいる。すべてがとてもおしゃれ—まるで映画のよう。彼は感動して取り乱す。

「三年たてば洋装店を開きます。そのときは奥さんや娘さんを私の店へよこしてちょうだい。家族みんなに稼がせてもらうわ」ロージが発するこうおん喉音の笑い声に、ボルケンハーゲンはうっとりする。

彼は極度に緊張している。「残念ながら、ぼくにそんなゆとりができるころには、残念ながら、あなたはもうおばあちゃんですよ」、と笑う

「ほんとはそんなに待つ必要もないくせに！」

「ありがとう！」

彼女は台所から二本ビールをとってきて、東洋風のクッションに脚を組んですわり、ぼんやり彼のほうを見やってから、ネドマンスキーのことを話しだす。ボルケンハーゲンは注意深く耳を傾ける。

「あの人はよく私の家にきました、少なくとも毎週一回は。女秘書がいましたが、その方はどうやらマックスを憎んでいたらしく、さすがの彼もおもしろくなかったようです。私にはいつもなかなかやさしかった。私が実の娘だ、といつも思いこもうとしていた—そのように想像しなければ、彼はまるでだめでした…性的倒錯というのかしら？ でもね、私は彼がほんとうに好きでした。とにかく、彼があんなふうになんて死ぬことになるなんて、やりきれないわ…」彼女はとめどなく話しつつける。「…でも、だれが彼を殺したか、私にもわからないのよ！」

ボルケンハーゲンはポーカーフェイスの人相風体をできるかぎり克明に話し、仲間知っている者がいないか、一度あちこち問い合わせしてほしいと頼む。

「いいわ、やってみる」彼女はたんす箆笥からミンクのストールをひっぱりだして

くる。「ネドがくれたの。いわば特別賞与として…家族に贈り物をするよりも楽しかったのよ。はっきりいえます—あその家はいつもどこかおかしかった！」
彼女はいくらか夢中になって話す。「とりわけ兄さんとは折り合いが悪かった。彼は兄を奴隷のように扱っていたが、兄もそれを変えようとはしなかった。一度…」

呼び鈴がなる。彼女は身をこわばらせ、少し青ざめる。「木曜の晩！ どうしよう—保険会社のデブのミールケだわ…さあ急いで！」 彼女はボルケンハーゲンを隣室へ押しこむ。「ここで待って、彼が…まで、私たちが…まで…それからそっと出て行って、い—い？ でもそっと！ でないと—じゃあ、一度問い合わせみる。きっと！」 彼女は消える。

部屋はせまく、フローアワックスの臭いがする。ボルケンハーゲンは安楽いすにつまづくが、明かりをつける勇気がない。左手の壁ぎわに、ほのかに輝く長方形を見つける。水槽だ。さらによく眺めると、長方形の水槽をとおして隣の部屋がのぞけることに気づく。ははあ、向こうに鏡がある！ ロージの客のなかに、観淫者もいるわけだ。まあ勝手にするさ。

ミールケは歓迎のウイスキーをぐいっとあおり、仕事にとりかかる。まずロージを毛皮張りの寝いすにすわらせる。次にブラウスをはだけ、真っ黒に日焼けした胸を愛撫する。女がキスをする。汗が男のしみだらけの頭皮に浮かぶ。

ボルケンハーゲンはミールケの性生活に興味はない。状況をこっけいに思うと同時にやりきれない感じになる。特にやりきれない気持ちに襲われる。

そっとノブをまわしてあけ、玄関の間へでる。ミールケがあえぎ、低くうめく声が、閉めたドア越しに聞こえてくる。足音をしのばせてボルケンハーゲンは戸口へむかう—ありがたいことに、ロージは電気をつけっぱなしにしていた…彼は階段の吹き抜けにでる。

ゆっくり下におりていく。路上には雨がふっている。細かい霧雨。またもやあることを思いつく。ボルケンハーゲンはポケットをひっかきまわし、古いレシートを見つけて、昼間に連絡がとれる、電話番号をしるし、かわいそうなロージ！ と書きそえる。それからレシートをロージの郵便受けに入れる。

車はライブニッツ通りとヴィーラント通りとのあいだの大きい駐車場にとめ

である。遠くない。頭をたれてボルケンハーゲン^{ひとけ}は人気のない通りを歩く。車が何台かかたわらをかすめて通りすぎる。すれ違う人びとに目もくれない。くたびれた。今日はあまりにも多くのことがあった。あとはただ眠りたい。だれがネドマンスキーの死に責任があるかなど、おれの知ったことか。

ボルケンハーゲンは広い駐車場を横切る。自分のR四のまえに、団体旅行のバスがいま四台とまっている。ごくわずかな回り道を避けて、二台のバスのあいだへ無理やり体を押し入れて通り抜ける。

そこに車がある。左のワイパーの後ろに、白い紙切れがはさまっている。宣伝ビラか？

背後の人影に気づくのが遅すぎた。なおもわきへとびのこうとするが、もう間に合わない。頸動脈^{けい}に一撃…

もうだめだ。

私はあくびをし、原稿をわきにどける。この節のあとであくびをするのは、失礼かもしれない—ボルケンハーゲンは本節をスリリングにしようと大いに骨を折っていた。しかし、もうすぐ真夜中…再度あくびをして、まだ読み通さねばならぬ、書類の山をしぶしぶ眺めた。ほんとうはあっさり匙^{さじ}を投げるべきだろう—これらを裁断機でこなごなにして、四ページがでてくるようにはできっこない…いったいそこにまだなにが散らかっているのか？ ここに一ほら数枚、私が女房に口述してタイプさせたものがある。

私は編集部にすわってボルケンハーゲンの原稿を、それもテニスコートで本人から手渡された第一部をぱらぱらめくり、ときおり一節を拾い読みしていた。あなたと似た状況にある富豪が登場する、小説を読んだことがあります。主人公はありあまるお金をもちながら、相続人ともくされる人たちはみんな彼が好きじゃなかった。そこで富豪はどうしたか？ 彼は倒れ、死んだふりをして、親類縁者の語る言葉に耳をすますのです…もちろん、結果はハッピー・エンドになります。主人公がいつもさんざん殴ってきた、お手伝いさんが彼を愛しているから…これがぼくにある考えを思いつかせた。

さほど思案することもなく、私はゲリ通りの社会学図書室につないでもらい、ボルケンハーゲン氏の消息を尋ねた。

「残念ですが、今日はこちらにみえておりません」

「そうですか…どうも弱りましたなあ。どこに連絡すればいいか、もしかしてご存じありませんか？」

「申し訳ありません」

ふむ…まあ、ボルケンハーゲンがいなくてもなんとかなるかもしれない。私は旧友のウーリに電話をした。彼は大卒の図書館員で、書籍をメートル単位で、しかもいろんなものを濫読している。ジャクリン・スーザンやハロルド・ロビンズにさえもひるまない。だれかがそれを小ばかにすれば、文芸社会学に興味があるのでね、と彼はうそぶく。

「もしもし、ウーリ、元気かい？」

「キーか？ おや、きみもまだ生きているのか…」

元気かーうんーそっちはーうんーこっちも、と型どおりの無駄話のあと：

「おい、ウーリ、ちょっときみの助けがいる」

「さっさといえよ！」

「本をさがしているのだが、題名も作者もわからなくて…」 私は内容を話した。「三文小説かなにかだ。きみたちのところでだれか手伝ってもらえそうな者はいないか？」

「一度うちの掃除婦に聞いてみよう…せめて出版社でもわからないのか？ 発行年は？ ポケット版かそれとも装丁本か？」

「皆目わからん。なんとかならんかねえ」

「ずいぶんうれしいことをいってくれるじゃないか…まあよかろう。折り返し電話するよ」

私はそのまますわって待った。私の思考過程はしごく単純だった：問題の本をなぜボルケンハーゲンだけが読んでいたというのか？ 潜在的殺人者らのなかにも本を手にしていた者がいるかもしれないではないか？ それどころかネドマンスキーの本棚にあったのでは！ 殺人犯が、もし本の内容を知っていたとすれば一現場でなにが演じられているかを、当然あの夜のうちに感づいたと思われ

る：だれもが以前に見たこともない医者、喧伝された誕生会、怪奇なギャグに目がない冷笑家のネドマンスキー、突然の心臓発作—犯人はきっとピンときたにちがいない。完全殺人をおかす、またとないチャンスだ！ 犯人と医者を除き、すべての招待客は、ネドマンスキーが自然死をとげた、と固く信じて疑わなかったのだから。さらに、医者は本物の医師で、買収されていた、と犯人は想定するだろう—その医者は、もしあとで殺人に気づいても、きっと口をつぐむはずだと考える。なぜなら医者にとってまさに生活基盤全体が危機にさらされるわけだから。間違いなく、医者は「誤診」に対して高額の報酬をネドマンスキーと取り決めており、それが知れわたると、一巻の終わりだった…ゆえに：本の内容を知っていた者は、ネドマンスキーの狂言を見破ることができ、完全殺人をおかす、現実のチャンスがあった。

これは、私が当時納得していた、推理であった。たしかに、侵入者もあやしかった。だが、潜在的犯行動機をもつ、あれほど多くの列席者を考慮すれば、あの善良な主任警部マンハルトは、あまりにも単線を突っ走りすぎる感じがした。いずれにせよ、書籍の問題が新しい見通しを開いた。

午後ウーリが電話をかけてきた。「きみの幸運にあやかりたいよ」

「いったいなにがわかったの？」

「一日じゅう電話したが、空振り！ 同僚はだれも娯楽書を知らなかった。少しも不思議なことではない！ そこで貸出口へでかけ、年のいった二・三人のおばさんに尋ねてみた…」彼は間を置いて、気をもたせた。「わが同胞の中年女性はみんなそろって問題の本を知らなかった。おそらく少し流行遅れになっているにちがいない。もうあきらめかけていた矢先に、ふと、知り合いの女性がドイツ大衆小説について博士論文を書いていることを思い出した。するとどうだ—彼女はちゃんと知っていた：相続人選ぴとかいうもので、それを書いたのは、パウ・リッターとかいう人だ」

「きみは天才だ！ 夜の祈りにきみをくわえるとしよう！」

「現金のほうがありがたいがね」

「実利主義者だなあ…コニャック一本で手を打たないか？」

「コニャックはいいねえ。貨幣価値の目減りだけを考えても」

「ねえ、夜の祈りだって安定した通貨だぜ…」

私たちはまだしばらくあれこればか話をして、ようやく受話器を置く。

うまくいったぞ、不思議なくらい。さあ、あとは本を読んでいた人たちを見つけだせばよい。ただ、言うは易く行なうは難し。

侵入者がネドマンスキーを殺したのでなければ、殺人犯として考慮の対象になるのは、たぶん次の六名だけだ：ギド・ヴィンクラー、マルティーナ・ダームス、マリーア・ネドマンスキー、ヴァルター・ネドマンスキー、ディーター・ドライアー、ローベルト・ボルケンハーゲン。ボルケンハーゲンが本を読んでいたことは、確定しているが、問題にならない。ボルケンハーゲンは事実上排除された—第一に、彼が犯人だとすれば、本のことにはふれなかつただろう。第二に、彼はあとでネドマンスキーから受け取ることになっていた、相当な金額をもらいそこねただろう…ちょっと待てよ—もしボルケンハーゲンが全額を事前にもらっていたら？ 彼が単に主張しただけだとすれば…？ いわばアリバイとして？ いや、本を話題にしたのは、ボルケンハーゲンだということは、動かしようのない事実だ。

ちょっと待てよ…

もちろん、これもトリックかもしれない—論理上は！ 仮にトリックだとすれば、私はいましがた罠^{わな}にかかったわけだ：ボルケンハーゲンが本について話すのは、本人が殺人犯なら、決して本のごことは口にしなかつただろう、とだれもが考えるように誘導するため…

いや。複雑すぎる。計略はまさにボルケンハーゲンらしいが、もう一つのこと：殺人がまるで似合わない。万一ボルケンハーゲンが悪事に走るようなことがあるにしても、黒幕として…

私は規則にしたがうよう自戒した。このような屁理屈をこねまわしては仕事はかどらない。

では、ヴィンクラー、ダームス、マリーア・ネドマンスキー、ヴァルター・ネドマンスキー、ドライアー…もしかするとみんなの本棚や暖炉やごみ箱をひっかけまわせというのか？ いやそれどころか、すべての貸出文庫のカードボックスを精査せよだと？

まず、みんなの本棚に関心をよせるのが、もっとも賢明だろう。私はマリーア・ネドマンスキーからはじめる決心をした。本人だけではなく、犯行現場を知る機会にもなるのだから。そこで私は車に乗りこみ、バーデンアレーへでかけていった。

呼び鈴を鳴らし、しばらく待つと、愛らしい侍女に仕込まれた、黒髪の乙女が扉をあけてくれた。私は自己紹介し、ネドマンスキー夫人にお目にかかりたいとつけた。

「残念ですが、ドクター、ネドマンスキー夫人はまだ町に…でもネドマンスキー様がおみえです。お取り次ぎいたしましょうか？」

お願いします、と私は答えた。

ヴァルター・ネドマンスキーのもとへ通された。私がぼそぼそ挨拶すると、彼は手をさしだしてきた。氷のように冷たい手であった。

「そうですか、調査をしておられるわけですね…ふむ…それで私にも聞きたいと。ふむ…」

「滅相もない、『問いただす』だなんて—そうですねえ、二・三情報がほしいのですが。あなたのためにもなるかと思えます、もしも報道ができるだけ…」私は言葉をきった。頭上の階でなにかがドスンと鈍い音を立てて床に落ちたからだ。

ヴァルター・ネドマンスキーは天井を見あげた。「ああ、あれはドライヤーですよ。私どもの一まあ、執事ですがね。ちょうど引越すところでして一家を相続したようです」 どうやら化粧漆喰の文様が彼をうっとりさせるらしかった。

私は軽く咳払いをした。

「あ そうそう…ちょっと失礼させてもらわなければなりません、ドクター。どうも偶然の成り行きで、ちょうど半時間後にネド工場の残りの株主たちと、どうしても変更できない、きわめて重要な協議をする約束があるものですから。でも明日ちょっと拙宅へお越しただければ、好都合なのですが。午後五時以降にお待ちしております」

このまますぐ印刷にまわせるように人が話すのを聞いたことはめったにない。「ご親切におそれいます」、と私はいって、ヴァルターがさしだす、住所も印刷した名刺を受け取り、それから腰をあげた。

彼も同じく立ちあがったが—「ああ、それからもう一つ…」といったまま一、二秒間、目を閉じてからつづけた。「あなたはジャーナリストでしたねえ…つまり、話のわからないジャーナリストはいないと思ひまして…一万—一万マルク現金でさしあげます—調査を中止していただけるなら」

「あなたが私に…なんと！」

「明日お会いしましょう。よくお考えください」 彼はドアをあけ、廊下に消えた。

私は麻酔をかけられたようにつたっていた。まさか、そんなはずがあるものか！

まるで回転望遠鏡をのぞいているように、あの愛らしい侍女が玄関の間を横切り、青いジーンズに白のプルオーバーをラフに着た、若い男がひとり階段をおりてくるのが見えた。穏やかな顔、有名な洗剤コマーシャルのモデルに生き写しの童顔。

「やあ、イーナ！」、若者が娘に声をかける。

「あら、デーデー。全部荷造りは終わったの？」

「ううん。あとは車に運ぶだけ…ねえ、ちょっとしゃれた家がぼくのものになった—なあ、近いうちに一度パーティーを開くが、くる？」

「もちろん、いくわ」

「きみの部屋に絵はいらない？ 古い、ばかでかい絵をわんさと相続した。一度がらくたを全部見てみないか」

「そうするわ」

若者はつまりディーター・ドライアー、ネドマンスキーの運転手、庭師、執事兼使い走りであった。こうして徐々に私は、いままでボルケンハーゲンの報告でしか知らなかった人たち全員と出会うことができた。

「ネドマンスキー夫人はいまにも帰ってこられるのではないかしら」、イーナが戸口で私を見つけていった。

「文庫で待たせてもらえますか？」

「どうぞ…」

なんとオーク材の板張りの大きな部屋に案内してくれた—「伝統」に基づいて

つくれば、このようなものはいまではもうすきま風のはいる古い城かテレビのスポット＝コマーシャルに存在するにすぎない、といつも考えていた。私はいわば古い都市貴族家の息吹を感じた。彫刻をほどこした陳列棚には、金文字を型押しした背革装：ゲーテ、シラー、シェークスピア、ハイネ、レーナウ、ドストエフスキー、トルストイ、フローベル、バルザック、モーパッサンがたてつづけに並べられている。室内装飾家の文学的趣味には文句のつけようがなかった。図書同好会発行の市民必読の書物もあった：*Vom Winde verweht, Die Caine war ihr Schicksal, Doktor Schiwago, Wem die Stunde schlägt, Desirée, Die Deutschstunde, Don Camillo und Peppone*。まあおおむね全部そろっていた—ただパウル・リッターの相続人選びだけがなかった。二列目、ゲーテとハイネの後ろにもなく、そこにはネドマンスキーがどうやらポルノとみなしていたらしい本が並んでいた。ヘンリー・ミラーとキン・ピング・メーが最高の悪徳書だった。

ボルケンハーゲンによれば奥方の寝室にあったという書架へ、どうすればいいのだろうか、とちょうど思案しているとき、低い猫なで声がした。

「^{わいせつほん}猥褻本に興味がおありですか？」

私は驚いてふりむいた。

マリーア・ネドマンスキーは、見た目には値が張るとはわからない、洗練された地味なスーツをきていた。装身具はほとんど身につけていない。本物であるだけに小さい、数連の真珠と、あたかも武器携帯許可証が必要なようにみえる、印章付き指輪—それだけだった。全体の印象は、少し男っぽい、非常にセンスがある感じ。女性の先祖が少なくとも三世代にわたってジュネーブ湖畔の全寮制学校にいたか—それとも、とびきり高級な婦人服飾専門店で売り子として働いていた女性なら、このような服装をしているだろう。マリーア・ネドマンスキーの顔がすっぱり厚化粧の下に隠れていた事実からみて、売り子だろうと推測した。

(のちに、私の勘が当たっていることがわかった—とびきり高級な婦人服飾専門店という点を除いて。実は百貨店だった。)

私は「あ 失礼！」とあって、『北回帰線』^{xxiii}を『親和力』^{xxiv}の奥へ押しこんだ。顔が赤くならなくてほっとした。「こんにちは、奥さん、私はドクター…」
彼女は制止の合図をした。「あなたがどなたで、なんのご用か、存じています」

冷たい灰色の目が私を上から下へじろじろ眺めまわした。首つりの背広を着ているのを見破られたことがわかった。洗いたてのソックスをはき、靴底に穴がいていなければ胸をなでおろすような視線であった。私はどのような烙印らくいんを押されたかを感じとった：学究肌の無産階級。

「どんな情報でもさしあげます」、奥方はおもねるような甘い声でいった。「どうぞおかけください—お茶がすぐきます」

私は黒い革張りの安楽いすに身を沈めた。お茶がくる。磁器はみごとなものだった。お茶もすばらしい。ウイスキーならもっとよかったろうが。

「あなたはこの家にはいる、最初のジャーナリストです」、マリーア・ネドマンスキーはお茶をほんのひと口飲んで話した。「個人的な意味でいうのではないけれど、お宅の職業はなにか—まあ、危険なところがありませんか？ いつも批判ばかりで—それもたいていは単なるねたまからくる批判。いつも金持を悪者に仕立てあげるだけ。職場をつくり、社会が生活に必要なものをこしらえていることに感謝するどころか、ただ中傷ばかり…」

好きにしゃべらせておいた。この女性は実際にこれほどばかだったのか？ このタイプの連中はこのような状況ではたいてい報道陣と仲良くしようとするもの—概して、ヴァルター・ネドマンスキーがこころみたほど、単刀直入な方法ではないとしても…しばらくして、彼女はようやく本題にはいった。

「私がマックスと最初に出会った場所は、一九五二年ハーフェル汽船の船上でした。私たちのテニスクラブが月夜の航海を催したのです。彼は私をダンスに誘った。最初の夫と別れたあと、私は二度と結婚をしないと心に誓っていましたが、その決意をまもなく忘れ去るように、マックスは心にくぼった。彼はきびしかった—きびしい、目標に向かって邁進まいしんする人でした。なにかがほしければ、実際にまたそれを手に入れました」

「女性に関して、彼はちよくちよく『なにかがほしくなった』そうですね…」

「知っています、知っています！ 並みはずれた人を並みの尺度でどうして測れますか？ もちろん、あの人にはほかの女も必要でしたが、それで私の愛情にひびがはいることはなかった。私たち二人はいつも苦楽をともにしてきた…」

私はもうまるで聞いていなかった。夫人の筋骨たくましい両腕を眺めていた。

力はじゅうぶん…だが、夫人は転倒し、軽い怪我^{けが}をして寝たままだった。それでもやはり一ひきつづく混乱のなかで犯行におよぶ時間はじゅうぶんあつただろう、少なくとも理論上は。しかし、もう一つ別の可能性もあり、このほうがはるかに重大だ。つまり、夫人はもしかすると共犯者に犯行の機会をこしらえるために、わざとショートさせたのではないか？ だが、だれに？ たとえどうであれ：どこから夫人は一すなわち殺人にかかわりがあったとすれば—ネドマンスキーがまだ生きていたことを知ったのか？ 例の本を知っていたのか？ それとも、夫とボルケンハーゲンとの会話を盗み聞きしたのか？

「ご主人を殺したのは、だれだと思われますか？」 よどみない話がやっと尽きたとき、私は尋ねた。

「むろん、あの侵入者でしょう！」

「招待客のなかにご主人の敵はいなかったのですか？」

「敵おおくして、来賓おおし」

「でも、それほど敵意が強い人はいない…」

「とんでもない！ 人を殺すには、まず動機がなければならぬ！」

「たしかに…ギドはマルティーナがほしかった—それでネドマンスキーの死に関心があった。ヴァルターは会社がほしかった—それでネドマンスキーの死に関心があった。マルティーナはネドマンスキーを悪の化身と思っていた—それで彼の死に関心があった。ドライアーはネドマンスキーにまどわされて不安定な生活を送るはめに陥ったと考えていた—それで彼の死に関心があった…さしあたりはこれでじゅうぶんでしょうか？」

「いろんなことをどこからお知りになったの？」 夫人は冷ややかに尋ねた。

「私には情報を提供してくれる人がおおぜいいます。ひょっとすると犯人は侵入者でなかったかもしれない、という考えにそろそろなじんでいただきたいのですが」

「侵入者が殺したのです！ いまのような発言は許しません！ あと一言いえば、ここ…ここから立ち去っていただきます！」

ははあ—この女はずぶとい神経をしているな…「感情的にならないでください！ ただちょっと、理屈のうえでは列席者のだれもが殺人をおかした可能性が

あることを、少しご理解いただきただけです。あなただって！ でも、いま力をお貸しくださるなら、私たちはあなたの嫌疑を場合によってはまもなく^{ふっしょく}払拭できるかもしれません」

「どうすれば？」 夫人はふたたび自制心を取りもどした。

「犯人はおそらくご主人の芝居を見破っていた…」 私の考えを話し、本のことを話題にした。「ボルケンハーゲンは本から思いついたのです。だから容疑者のだれかが同じようにそれを読んでいたら…」

「いったいなんという本なの？」

「パウル・リッター作 相続人選び」

夫人はとびあがり、私をじっと見つめた。「まあ—それなら家にあるわ！」

「じゃあ、どこか別の部屋にあるのですね」、と私はいった。「ここにはありません。いま調べたところですから」

「いいえ、ここにあります—ちょっと待って！」 夫人は右のドア近くの陳列棚に近づき、ガラス戸を引きあげ、人差し指で幾冊か本の背をなでた。「ここに…ない。おかしいわ。ここにあるはずなのに…」 夫人は首をふった。「待ってください…」 夫人は引き出しのなかをかきまわす。「貸し出しているのだわ。幸い私は、なにをだれに貸したか、そのつど書きとめてある。そうでないと書物は決して返してもらえません。ここは半ば貸出文庫なの。見てちょうだい：チャタレー夫人—アネリーゼ。はるかな南の国—ウシ。小夜啼鳥^{サヨナキドリ}を邪魔する者—ヴァルター。教師は地獄に落ちろ—イルマ。そしてここ、相続人選び—ほら！ ギドが借りだしているわ」

「なんですって、ギド・ヴィンクラー？ 彼は院外反体制派にくわわっていますよ。左翼、インテリを自認しているのでは…」

「あの人がいるんなものを読むのに、私も驚いていたわ」

「もしかすると市民社会をあばくとか、そのようなことのために資料を集めているのかもしれませんがね…どこにヴィンクラーさんはお住まいですか？」

「ヴィルマースドルフのプリンツレゲンテン通り。家屋番号は知りませんが、建物の下にガソリンスタンドがあるわ」

私は別れをつげた—ここにはどうやら何ひとつ得るものはなさそうだ。すでに

戸口に立ちながら、私はもう一度振り返り、どうもテレビの推理映画みたいになるので、少々てれくさかったが、やっとそのとき疑問が浮かんだ。「あなたはあの本をお読みになったことがおありですか？」

厚化粧に隠れてわかりにくかったが、夫人はほほえんだように思う。

「いいえ、一度も」

複雑な気持で私は車寄せをおりて道路にでた。たしかに調査はかなりはかどり、いわば明るい希望がもてたが、マリーア・ネドマンスキーのことを考えると相変わらず寒けがした。子供のころ灰かぶり姫の継母を心に思い描くたびに、いつもまさにこんなふうだった…

ネド家の半旗がかかげられていた。丸薬帝国の喪中。練鉄製の門をくぐり、裏の隅にとめてある、自分の車のほうへ渡っていった。なんと静かな通り！ 私はゆっくりと時間をかけた。

すでに車のキーを手にし、ボンネットをまわって、機械的な動作で鍵をあけようとしたとき、私ははっとした。畜生一右の前輪タイヤ！ パンクだ。もうどうしようもない。

毒づきながらヘーア通りへおりてゆき、電話ボックスから義兄弟に電話した。今晚じゅうに車をなんとかしておく、と約束してくれた。予定表がびっしりつまり、私はジャッキとかかわりあう時間がなかった。

そのあと私はタクシーを拾おうとしたが、この時刻一午後六時直前—にはむだな企てだった。無線タクシーの回線はふさがっており、近くの待合所もすっかり出払っていた。タクシー運転手をののしりながら、テーオドーア・ホイス広場へ駆けおりて、四番の路線バスを待った。二階バスの上階で乗車後に五十プフェニヒ支払い、ベルリンをゆられて半周し、ブンデスアレーとバーデン通りの交差点付近で、^{くんじょう}燻蒸消毒されて激しくゆさぶられたあげく、車掌にゆり起こされた。

「はい、降りてください…さあ、起きて！ プリンツレゲンテン通りへいきたかったのでしょう—進行方向にむかって次の横道。そら！」

あくびをしながら、私は急な階段をはい降り、路上にとびでた。ほう、これはなんという暑さだ！ ベルリン全体が大きな蒸し風呂になっている。一杯ひっかきたい気分だが、酒場にはいる気はしなかった。ギドならきつとなにか飲み物を

もっているだろう。

私はブンデスアレーを横切り、蒸気のたちのぼる自動車専用道のトンネルをちらりと見おろし、貯蓄銀行管理部の広い車寄せのかたわらを通りすぎて一分もすれば、めざす通りにでた。苦もなく、マリーア・ネドマンスキーに教わったガソリンスタンドが見つかる。

ギド・ヴィンクラー…黄土色の塗装をしたアパートの下で名前を見つけた。部屋は四階にちがいない。すでに呼び鈴を鳴らそうとしていたとき、一階の住まいから中年の婦人が黒いプードルを連れてでてきたため、私は階段吹き抜けへ追いやられた。灰色に塗った壁からひんやりした心地よい感触が伝わってくる。「当方物乞い・物売り禁止」の張り札を読み、エレベーターのほうへまわった。

四階は湿っぽい、すえたような臭いがした。管理人のおばさんが階段を掃除して少々日にちがたちすぎているらしい。典型的な新築廊下が目を楽しませてくれた：左手に青塗りのドア、中央に青塗りのドア、右手にも青塗りのドア。ヴィンターフェルト、シュタインボック、ヴィンクラー—右側がつまりギドの住まいだ。下では子供たちが騒ぎ、頭上ではだれかがモーツァルトを弾いていた。

白いベルの押しボタンに指を置きかけて、私はドアが細めに開いていることに気づいた。トウモロコシのように黄色い廊下のじゅうたんがかなりはっきりと見えた。ノックしようとしたが、内心の衝動をおさえた。奥から、戸棚の扉がパタンと閉まるような、うつろな音が響いてきた。

好奇心が強くなければ、私の職業はつとまらず、結局は無遠慮な者だけが運をつかむのだ。そっと私はドアをもう少し広く押しあけた。赤いサイザル繊維の細長いじゅうたん、浅黒い玄関ホールの帽子掛け、模造石油ランプ。ほかにはなにもない。鏡がちっぽけな台所をのぞけるようにかかっていた。レンジにやかんがかかり、まだ湯気をたてている。ギドは急いでごみバケツを下へ運んでいっただけなのか？ ふむ…強いすきま風だ。窓があいているにちがいない。私がここに立っていることに、なぜギドは気づかないのか？ おかしい…

私はドアをすっかり内側へ押しやった。ドアはよく油がさされていた。

またしてもアメリカのテレビ推理映画に迷いこんだ気分になり、自分がばかみたいに思えた。

右側に大きな部屋、ドアが開いていた。用心深く私は一歩一歩前進した。どこかでハエの羽音。路上には明るい笑い声。隣でだれかがシャワーを浴びていた。私は息をとめ、もはや隅をまわって部屋のなかをのぞく勇気がない。

「^{わな}畏か？ ばからしい！ 私は気をとりなおした。

部屋の真ん中に男が横たわっていた。大きい、丸太のような男。あおむけに倒れ、後頭部から血が金褐色のじゅうたんににじみでていた。

ギドだ！

私が読んでいた資料によれば、ギドとしか考えられなかった…背後で軽い咳^{せき}。くそっ！ 私はさっと振りむいた。

そこにボルケンハーゲンが立っていた。ピストルを手にして。

おやまあ—これで終わり？ もっと先へつづくはずだが。すべては私が記録したものなのに…ああどうしよう！ 残りはまだタイプしていなかった。私の原稿はどこだ？ 緑色の速記用メモ用紙を使った覚えがある…

ふう、なんて暑さだ！ 何時かな…二時十五分。しまった。少なくともこりゃ四時になるぞ。まあ いいや、明日十一時に編集部に行くとなれば、まだじゅうぶん間にあう。ちょっと冷蔵庫にまだコーラがあるか見てこよう！

まだ三本はいつている、四本目は目の前にある。それで一速記用メモ用紙はどこだ？ やれやれ、ときおり紙がもう見えなくなるぞ。世界じゅうの紙を全部灰にしてしまえたらなあ。世界はどのように見えるだろう、もしすべての紙が…これだ！

違う。メモ用紙じゃなく、ファイルだ。いったいこりゃなんだ？ ギド・ヴィンクラー…？ ああそうか。グレーザァが調べたものだ。新入りの見習いが。

ああ、ギド・ヴィンクラー氏のデータを入れた検索カード。グレーザァ、私の新しい見習いが収集したものだ。

ギド・ヴィンクラー。一九四四年八月二四日、ベルリン近郊のナウエンに生まれる。中等教育修了後、工業商人として見習修業。一九七〇年以降ヴンダー合資会社仕入係。結婚・婚約の経験なし。一か月の総収入 約一五〇〇マルク。院外反

体制派グループに出入りするが、外見は小市民的。心臓弁膜症のため現実はほとんど思いどおりにならず、欲求不満。狭い空間や乗り物をこわがる。実家は健全。父親 郵便局主任検査官、母親 洋裁師。ギド 期待はずれの息子と自覚。

不透明なネドマンスキーとの関係。ときどきネドマンスキーに小遣いをもらいながら、贈り主に悪魔の烙印らくいんを押しつづけ、ネド工場で働くことをこぼむ。企業祭のとき、ほろ酔い機嫌でひとりの同僚にこう語った—西ドイツの社会環境は、すべての企業家を銃殺にすれば、ただその場合に限って有効に変えられる。つねに他人を当てにせず、自分自身がなんらかの手を打つべきである。だれかがいつかは口火を切らなければならない。民衆にはのろしが必要だ。どこではじめなければならないか、きっとわかるだろう。一別の情報提供者たちの発言も、ヴィンクラーの一匹狼性と無政府主義への傾向を裏づける。

外見について：ヴィンクラーは背が高くどっしりしているが、決してヘビー級ボクサーのような体つきではなく、面長な顔（「馬面」）に似合わず、むしろぶよぶよした印象をあたえる。声は響きわたり、少し引きずる感じ。非常に青白い顔色。短く刈りあげた「役人ふうヘアスタイル」、暗褐色の頭髪、右分け。古風な、少々じじくさい服装。

友達はなく、知人も少ない。院外反体制派グループ内だけでなく、同僚にも、さほど緊密なつながりはない。いたるところでアウトサイダーである。両親との接触さえほとんどない。

綿密な仕事、グレーザァは努力した。だが、これでいまどうしろというのか！ 速記用メモ用紙が必要だ、ここに…へえ、こんなことが。まったく一番上に置いてあった。探してもなかなかわからないはずだ！

それで…なに、私はたしかもっと明確に書いたのに、まあなんとかなるだろう。

私たちはにらみあった。ボルケンハーゲンは銃をおろす。

「こんなところでいったいなにをしておる？」 私は吐き捨てるようにいった。

「いまはじめて人を殺したところです、ご覧になったでしょう！」

「ばかな！」

「部屋の真ん中に横たわる死者がまぎれもない真実を語っておる」、とボルケンハーゲンは私の口調をまねて答えた。

「ほんとうに死んでいるのか？」

「ぜんぜん知りません…」

私たちはヴィンクラーのそばにしゃがみこんだ。私はヴィンクラーの手をとる。脈は強く、規則正しく打っていた。私は電話をとり、パトカーと救急車に急報した。

それからボルケンハーゲンに説明をしてもらった。「ティーナのことで、ヴィンクラーと話をしたかった。いわば男と男の話し合いです。もちろん本人からさりげなく聞きだしたかった—ヴィンクラーはマックス・ネドマンスキーを好きじゃなかったという噂^{うわさ}が、そうこうするうちに広まっていたものですから…だからぼくはここにきて、ベルを鳴らすと—なんの応答もない！ ぼくはノックする—やはり応答がない！ 戸がきっちり閉まってないのを見て、名前を呼ぶ—応答なし！ そうです、そこでぼくは、あなたもなされたことをしました。つまり、勝手にこのことあがりこんだ。すると、彼がそこに横たわっていた…ぼくはすぐ家のなかを見まわしましたが、もうだれもいなかった。それから、あなたがこられた」

「そうすると、その銃は？」

「ただの催涙ガス拳銃^{けんじゅう}です。昨夜この善良なギドと同じような目にあつたので、きょう買いました。実は自分の車に乗り込もうとしたとき、一発、空手チョップをくらって—もうおしまい！ 意識不明。そのあとポケットに紙切れを見つけ、見れば、こう書いてあった。これ以上かぎまわると、貴様はおしまいだ！ 命は惜しいですからね」

「もう警察には届けたの？」

「もちろんです！ 警察を抜きにして、ぼくがまだなにかするとお思いですか？ 警察では、あれは謎^{なぞ}の侵入者の仕業だった、と考えています」

「こりゃ驚いた、部屋じゅうがひっかきまわされているぞ。棚も引き出しも—全部開いている！」

「ぼくじゃないですよ、そうお考えなら…ほら、彼は意識をとりもどした」

私たちはギドを助け起こし、安楽いすにすわらせ、清潔なハンカチを傷口にあて、ダブルのコニャックを口に流しこむ。いぜんとして多少もうろうとしていたが、ギドは身にふりかかったことを、言葉につまりながらも話した。

「…後ろから、やつはおれを後ろから殴り倒した。おれは…あいたっ！ 耳鳴りがするようだ…ちえっ、頭が痛い！」　ギドはうめいた。「おれは買い出しにいかうとして…階段で…階段で思いついた、金をもってくるのを忘れたと思いついた。それで部屋に取って返す…ああ、痛い！ 医者は—いつ…すぐくるの？　ああ…おれは部屋にもどる、金を…ドアがきちんと閉まっていなかった…それでやつがこのこはいりこんだにちがいない…」　突然ギドは目をむいた。「さあ、いってくれ…」　ギドは眉をひそめる。「いったいどうやってここにはいつてきたのか？」　さらに私に向かって：「あんたはいったいだれです？」

私は名のり、二人ともお宅を訪ねようとして、ドアがあいていることに気づいたのだと答え、「私たちはネドマンスキー事件について二・三情報が必要です」とつけくわえた。私は急いでいた—警察が先にここへ来れば、自分らの立場がどうなるか、私たちには察しがついた。

ギドはまるで聞いていなかった。「ちょっと見てくれ—おれの財布はまだそこにあるか？」と尋ねた。

「どこだ？」

「デスクのうえ…」

「すわったままで！　いや、ここにはない」

「くそっ、いまいまいしい！」

「あなたの…ええと、おばさんから本を借りましたねえ—つまり、ネドマンスキーの文庫から…」

「ときおり、ええ…どうして？」

「相続人選びも？」

「ええと—なんですか？　ああ　そうか。それならその後ろの赤い本棚にある。なぜ？」

「もう読まれましたか？」　私はすばやく聞いた。

「いいえ。なぜそれをこのあいだ持ち帰ったかさえわからない—たぶん気分転

換かな。なにか変わったものを読みたくなった…なぜ尋ねるのです？」

「ネドマンスキーの殺人者はその本を知っていたにちがいないから」

「わからん。どうしてだ？」

「死者を殺すために、寝室へ忍びこむ者はいないからねえ」

「どうも雲をつかむようで…いったいその本になにが書いてあるの？」

私は説明しながら、ギドを鋭く観察し、反応を待った。けれども、なんの手ごたえもなかった。というよりはむしろ担架をかついだ二人の消防士をつれて、二人の警官がやってきた。彼らは本人の抗議に耳も貸さず、ギドを担架に固定して、階段を運びおりにいった。おそらく救急処置のために最寄りの病院まで。

階級の高い警官が手帳を取りだし、質問をはじめた：名前—住所—生年月日…それから：

「あなた方はいっしょにこの家へこられたのですか？」

「はい」、とボルケンハーゲンが即答した。

私は相槌^{あいづち}をうった。ボルケンハーゲンが釈明しているあいだに、私は何気ない素振りで、ギドがついきましたが話していた、赤い本棚までぶらついていった。書物が一メートルばかり並んでいる。ちょっと頭を斜めに傾けて、本の背をひとわり見渡した。アドルノ、マルクス、マルクーゼ、バクーニン—パウル・リッターの相続人^{あついで}選びとは奇妙な隣合わせだ。ただうっかり借りたにすぎない、といったギドの言葉を信じたくなった。だが、ギドがこれを借りたことも明らかな事実…

その本は消えていた。

すばらしい章の結び。しかし私にはいっさい章の結びなどいらぬ。そもそも章ではなく、どうすれば全資料を四ページにまとめられるか、一種のひらめきが必要なのだ！ どうしよう？ 先を読んで明朝…いや、今朝、簡潔な要約をつくること。私はやります、と多少とも約束したのだから。信用を落とすより、要約をしよう。

いったいどこへつづくのか…ここ：私がボルケンハーゲンとマンハルトと話し合ったあと要点だけをしるした、一連の場面は。

事務所。古い建物。高い。薄暗い。かび臭い。安物の家具。カイザー時代の書類立て。デスクに二人の男。刑事主任係長ヘルマン（三十八歳）と刑事係長ベートゥゲ（三十歳）。金曜午前。二人は毒づいている。

「なんていい天気だ」

「このいやな家畜小屋にくすぶっていなきゃならんとは！」

「きみは昨晚もっとよく注意すべきじゃなかったのか！」

「ああ、くそくらえ…！ ばかが突然急ブレーキをかけることに、本官は責任がない。典型的な追突事故。どうしようもない」

「それでボルケンハーゲンは雲を霞かすみと逃げてしまった…」

「野郎なんかくたばっちまえ！」

クルト・シューマツハア・ダムでの衝突。ボルケンハーゲンがルメルプラッツからやってきた。刑事らは入口で待ち伏せ、片時もボルケンハーゲンから目を離そうとしなかった。おとりだ。もしかするとだれかが彼に近づくのでは？ あるいは野心があれば、ボルケンハーゲン自身が探偵のまねごとをはじめるとはなにか。いずれにせよ、彼を尾行するのは名案だ。それが…ただ、ついていなかった！ だれにも予想できなかった。

ドアがあく。二人は顔をあげる。

ボルケンハーゲンだ！

ボルケンハーゲンはヘルマンを見て驚く。目が信じられない。「うわー、オレンハウアー！」

ヘルマンはあっけにとられる。

ボルケンハーゲンは笑う。「ご自分がオレンハウアーに似ているって、まだ一度も気づいたことはありませんか？ ついでいるかもしれませんよ—だれかがオレンハウアーに関する映画をとることになって、あなたが主役にばってき抜擢されるとか。題名は—『ハロー、オリー』…昨日はどうも追跡していただきまして」

「どうぞおかけください、ボルケンハーゲンさん」 軽い不信感。インテリ。デモ参加者。同僚を悩ましてくれたな？ 石を投げただろう、え？

「どうも…」 ボルケンハーゲンは腰をかけ、二人を子細に観察する。中級公

務員、大衆紙のビルト購読者、レムケ視聴者、ヘルタ訪問者。「ええと、あなたがたはぼくの味方かもしれません。でも、ぼくの助力者ではありません！」

「どうして？」 ^{いんうつ} 陰鬱な二つの顔。

「昨夜一時ごろぼくはライブニッツ通りとヴィーラント通りのあいだの駐車場で殴り倒された、それも背後から、知らない男に。一時意識がもうろうとしたあと、ひとの助けを借りずに、帰路につくことができました」 てきぱき話した。

不審。不信。かみ殺した怒り。「無線パトロールカーを呼びましたか？」

「いいえ、なんのために？」 ポケットから紙切れを引っ張り出す。正確な活字体で書かれた宛名。これ以上かぎまわれれば、貴様はもうおしまいだ！ 「どうぞ！ぼくのポケットに押しこまれていたものです」

ヘルマンは物見高い。すぐにとびつく。「おい、こいつはおもしろいや！」

ベートウゲは礼をのべ、ボルケンハーゲンのいうことをメモする。二十分経過。問いつめたあと、ボルケンハーゲンに感謝。ほんとうはなかなかいいやつだ。

ヘルマン：「もう独断ではなにもしない、と私たちに約束してくれますね？ え、てしてまずい結果になりかねないことがおわかりでしょう」

ボルケンハーゲンは考え方を切り替える。やはり哀れなやつらだ。どうにもならない。「ええもちろんです、なんといいましたか…ええと…警部さん。あなたがたは必ずやってくれますね…ひょっとするとこの紙切れがお役にたつかもれません」

うなづく。はればれとした顔。ヘルマンはボルケンハーゲンをドアまで送る。ボルケンハーゲンが出ていく。彼について寸評：まあ、五分五分だな。だれもかれも一律に扱ってはいかん。

ヘルマンは朝食をとる。ベートウゲも。サッカー談議。それから書類調べ。

連続犯が ^{ちょうりょう} 跳梁中。昨年十七軒の屋敷に強盗がはいった。占有者もしくは所有者：名士や実業家。高級住宅街：グルーネヴァルト、ダーレムおよびフローナウ。盗品：装飾、金銭、小切手帳、毛皮のコート。見積損害総額：七万五千マルク。報道界での犯人の呼称：「パーティー荒らし」。手口：邸宅で平均三十名の客を集めて祝い事やパーティーがおこなわれているあいだに、犯人は地下室または部屋の窓から侵入する。典型的な（そしてこれまでのところ最後の）事件：マック

ス・ネドマンスキー誕生祝賀会。刑事主任係長ヘルマンが探りだしたこと：押し入り強盗に襲われた屋敷はすべて同一の高級食品会社によって納入されている：グルメ、一ベルリン一九、ライヒ街一九二、オーナー：ヴァルター・バッハマン。犯人は同社の従業員であるか、同社の従業員から内密の情報を入手したに相違ない。特に問題となる人物：ジークルト・シュルツ、三十一歳、一ベルリン四四、ヴェーザー街二一に居住、商品運搬車運転手。カーリン・アープル、二十二歳、一ベルリン三一、ベルリン街一二、女性秘書。ペーター・オーピツ、二十九歳、一ベルリン二八、ハイデンハイム街一四、受注係員。

問題の三名の人物はひそかに監視されたが、満足のいく成果はあがらず、疑いも晴れなかった。書体見本が提出され、ボルケンハーゲンがポケットに見つけたと主張する、メモと比較：一致せず。ただし、筆跡鑑定家は週明けまで使えない。刑事係長ベートウゲはグルメ従業員の友達に問い合わせ、十三名が書類に記載されている：ハンス＝ディーター・ハッセ、ルーディ・シュースタア、ギュンター・ブライバルト、マルティン・アダミツ、ペーター・ザブレフスキー、ペーター・シャイネルト、マンフレート・ラーベ、ハンス＝ユルゲン・ハンケ、ゲルト・チェルヴィンスキー、インゴルフ・パペルト、ライナー・マルヴィツ、ヴォルフガング・ローデ、ヨルグ・ラグゼ。だれにも十分な容疑事実なし。

使いの者。英国欧州航空、エールフランスとパン＝アメリカン航空の乗客名簿をもって来る。殺人のあった翌朝以降。十三名のだれかの名前が名簿にあるか？二人はさがす。単調な仕事。疲労。目の前がちかちかする。

「ない」

「くそったれ！」

さまざまな推理ができる：一、犯人はこれらの人物のなかにいない。二、犯人は相変わらずベルリンにいる。三、犯人は鉄道かバスか車でベルリンを出た。四、犯人は偽造の旅券を使った。

途方に暮れた様子。ヘルマンはタバコに火をつける。討論：家に帰るか？ チーフに電話するか？

ノックの音。ボルケンハーゲン。

「おや、なにか忘れ物？」

「いえ、いえ！」ボルケンハーゲンは勝手にすわりこむ。タバコ？ どうも。火？ 恐縮です！

「じゃあ…？」

「ええと、言い残したことがあります…」

「なんですってボルケンハーゲンさん！ そりゃいけません…」

「ああ、まったく悪気があってのことじゃない。よく注意して聞いてください。あのネドマンスキーには愛人がいた…」

制止の合図を送る。「それならわれわれだって知っていますよ！ 古い話だ。ゲームスでしょ」

「いいえ—ご存じゃない！ ほかにもまだ。いやまあ—愛人というより—まあ、予約関係とでもいうのでしょうか？ 女性はそれを本業にしている。ロージとかいうひとで、どうしたとか、彼女は彼が好きだった…」

「だれを？」 きょとんとしている。

「ネドマンスキーですよ。ぼくはひょんなことから隠れた事情をかぎつけました。一度ロージをよく説得してみると、例のいわゆる『パーティー荒らし』について、少しあちこち尋ねてみると約束してくれた。さあ、いいですか—たったいま電話したところ、ロージは小耳にはさんでいた：『パーティー荒らし』には奇妙な癖があるそうです。『パーティー荒らし』は飼い犬のシェパードを犯行現場へ連れてゆき、車のなかで待たせておく。いわばお守りとして。いつもではないが、ときどき、仕事にあまり自信がないときに…そら、ちょっとした情報でしょう？」

「ふむ…」 かなり長い反応過程。そのあと大わらわ。ベートゥゲは官庁の電話帳をめくる。税務署、畜犬税官署。担当官の名前を読み聞かせる。するとヘルマンが担当官に次々と電話をかけ、容疑者リストの名前を読みあげる。手間のかかる照合。むやみに時間がかかる。結果：ライナー・マルヴィツとマンフレート・ラーベがシェパードを飼っている。ほらみろ！ マルヴィツはクロイツベルクのヴァルデマル街七三、ラーベはノイケルンのゾッネンアレー—四四に住んでいる。

ヘルマンは立ちあがる。ボルケンハーゲンにむかって：「すぐ同行してくれると、とてもありがたい。われわれは住民登録所に出向き、旅券用写真を念入りに

見よう。あんたは男に見覚えがあるはずだから」

ボルケンハーゲンは喜ぶ。食いついて離れなければ、なにか得られる。これこそ猛烈記者だ。

三人は車までおりていき、出発する。相当ひどい交通渋滞。マリアンネ広場沿いの管区まで十五分かかる。役人たちは非常に愛想がよい。ボルケンハーゲンにマルヴィツの写真を見せる。

ボルケンハーゲンは首をふる。「見たことがない！」

失望。さらに、ノイケルンの船舶航行運河を越えていく。左側に塀。ずっと運河に沿って。話題は、サッカー、ミニかマキシカ、ウッド・ユルゲンス。

ノイケルン。ゾンネンアレー・エッケ・ヴィルドウンブルフ街。暗褐色のレンガ造りの建物、ヴィルヘルム時代。警察管区二一五。駐車場へ乗り入れ、降りる。自己紹介。先ほどと同じ手続き。

ボルケンハーゲンは一枚の旅券用写真をじっと見つめる。電撃：ポーカーフェイスだ！

「この男です！」

喜び。ベートウゲがボルケンハーゲンの肩をたたく。

ヘルマン：「じゃあマンフレート・ラーベだ。さっそく彼をじっくり取り調べよう。ボルケンハーゲンさん、ほんとうにご苦労さん」　そういつてボルケンハーゲンを帰そうとする。

ボルケンハーゲンは抗議する。ラーベをどうするかを見たい。

「そりゃだめだ！　ラーベはおそらく武装している。われわれはあんたを危険にさらすわけにはいかない！」

ボルケンハーゲンは任務完了、帰ってよし。憤慨するが、いかんともしがたい。

ヘルマンとベートウゲは別れをつける。ラーベは警察署から石を投げればとどくほどの距離に住んでいるが、それでも刑事たちは車までおりていく。

隊員輸送車が出口を封鎖している。しばらく待たなければならない。

「ラーベはいまごろ家にいるだろうか？」

「きっといる。あいつがほんとうに七万五千マルクをせしめていたら、絶対にもう働く必要はないのだから」

出口があく。ヴィルドウンブルフ通り。バス停。数人の少女。すてきな太腿。^{ふともも} ゆっくりとかたわらを通りすぎる。いま非番であればなあ。信号が赤に変わる。新たな待ち時間。ゾッネンアレーへ曲がる。広い遊歩道、四列の並木。ベートウゲが家屋番号を調べる。一四四。ここだ！ ヘルマンは駐車余地を見つける。二人は降りる。古いファサードを見あげ、建物に踏みこむ。天井の高いホール。床磨きのワックスと魚フライの臭いがする。今日は金曜日、ははん。ベートウゲは明かりをつける。ヘルマンは呼び鈴盤を見て住まいの位置を確認する。ラーベ？ ああ、この上だ。小庭つきの部屋、四階、右側。さほど豪華ではない。^{そうめい} 聡明な頭脳の持ち主か、余計な注目をあつめない。上で犬がほえる。

なるほど！

それから刑事らはラーベの玄関ドアの前に立つ。ベートウゲがベルを鳴らす。一回。二回。中でガタガタ音がする。足音。鎖がはずされ、ドアがあく。ラーベが見える。その背後に犬、耳を伏せている。

ラーベに関する二人の第一印象：体つきはせいぜい中背、筋骨たくましく、一グラムの贅肉^{ぜいにく}もない。ウエルター級。顔はやせ型で角ばり、彫りが深く、結核にかかったような感じ。金髪、額に巻き毛がたれている。たくましい手。

ラーベはちょうど眠っていたにちがいない。まぶしそうにまばたきをする。

「いったい何事です？」

「ラーベさん？」

「ええ…？」

ヘルマンはさっと身分証明^{バツシ}記章を取りだす。「刑事警察だ」

いまやすべてが急展開する。ラーベ家のヒューズがとぶ。ラーベがわきへとびのく。「ベシー—かかれ！」 ベシーがヘルマンにとびかかる。右前腕にかみつく。ヘルマンは悲鳴をあげる。ベートウゲは機敏にふるまう。すでにピストルを手にして、ラーベの行く手をさえぎる。ヘルマンはベシーをぐるぐる振りまわす。と、犬がベートウゲに激しくぶつかり、両足を払う。ベートウゲはよろめき、階段の手すりにぶつかって、体を支えようとする。ラーベは電光石火の反応をみせ、チャンスを利用する。ベートウゲの下腹部を踏んづけて飛び越え、階段をかけおろる。ベシーはヘルマンを離さない。ヘルマンは出血する。ベートウゲが勇

気を奮って立ちあがる。いまや怒りにかられてわれを失い、犬の横腹をけとばす。ヘルマンを助けよう、ヘルマンを助けなければならん。ヘルマンがラーベよりも大事だ。いまいましい野良犬め！ ヘルマンは後方へ身を投げる。「撃て！」 ベートゥゲが犬の体に二発うちこむ。ベシーはたおれる。

ラーベは庭を走りぬけ、通りにでた。息をきらしている。目があちこち動く。もの狂おしい目つき。額に汗。ワインレッドのヘランカ製プルオーバーに汗がにじむ。愛車のカデットは通りの向こう側にある。くそっ！ 激しい車の流れ、わたれない。徒歩では逃げたくない。銃声が聞こえた。ベシーは死んだ。そう思うと全身の力がぬける。悲嘆。精も根も尽きた。すべてがむなしい。自首すべきか？ できそこないの人生…一車の流れに切れ目！ 彼は走りだす。

「待て—とまれ！ ラーベ、ばかなまねはよせ！」 ベートゥゲは差をつめ、すぐ後ろにせまる。

あと車まで十メートル。ラーベはキーを手にはしている。だが、ドアをあけるには時間がかかりすぎるだろう。もはやチャンスはない…と思ったとき、ボルケンハーゲンの姿が目にはいる。

ボルケンハーゲンが玄関に立っている。歩いてこちらへやってきた。おれの家にごようとして、たったいま家屋番号を聞いたのだ。

ラーベは、小型のベレッタをズボンのポケットからとりだし、ボルケンハーゲンをはっとさせるや、いきなり銃身を背中につきつける。

ベートゥゲは即座に事情を察知して立ちどまる。無言。通行人らは跳びすきり、玄関や店に逃げこむ。

ラーベは車にたどりつく。赤のカデット。車道にでて、ドアをあける。ボルケンハーゲンは助手席によじ登る。

ベートゥゲは車の番号を頭にたたきこみ、最寄りの店にかけこむ—文房具、子供のおもちゃ、がらくた。電話はどこだ？ 本部に通報する。追跡がはじまり、ヘルマンは病院に運ばれる。

ラーベは猛スピードで通りをすつとばしていく。もはや失うものはない。頭脳ははたらかず、夢遊病者がハンドルを握っている。

ボルケンハーゲンは夢中だ。こわい。こわいから、いわば夢中になっている。

とてつもない体験。講義室なぞくそくらえ！ 車はゾッネンアレーをくだって暴走する。陶酔。倍加した生命感。無線パトカーが突進してくる。ヴァイクスル通りから一台、パニール通りからもう一台。眼前にヘルマン広場。ラーベはどうするだろう？ 突進するだろうか？ 陶酔がさめる。実行すれば…奴はすべてがどうでもよいような顔つきをしている。

ラーベはハンドルのうえに身をかがめていた。けいれんする口もと。額に汗。逃げ場を失った野獣。「おれじゃなかった！」、突然ラーベが叫ぶ。「おれはじいさんになにもしなかった！」

「じゃあ車をとめろ！」

「気はたしかだぞ！ 豚野郎どもに人殺しの罪を押しつけられるためにか？ おれは殺人者を見た—この目で見たのだ！ だが、いったいだれがおれを信じるか？ どいつもこいつもおれのいうことなぞ信じやしない！」 ラーベはヘルマン広場をさっと走りぬける。あちこちでブレーキがきしむ。どこかで車のボディーとボディーがすさまじい音を立ててぶつかる。「金持連中は結束しているのだ。そしておれたちのようなものが責任をとればよい。連中はだれ一人として豚箱にはいない—そのために、おれらがいる…」 憎しみ。ゆがんだ顔。嘲笑：「だっがな、おれはやつらに思い知らせてやった！ 連中の金庫をからにしてやった、助平野郎どもの！」 間。「それでいま、やつらはおれのしりを引っ捕らえようと…」

無線パトカーは追跡をひかえる。ボルケンハーゲンに危険にはさらしたくなかった。活発な無線連絡。タクシーの運転手たちがいっしょに疾走する。

ラーベはハーゼンハイデを矢のようにくだってゆく。カールシュタット、ノイエ・ヴェルト、バルハウス・レーズィ。眼前にズュートシュテルン。垂直にそびえ立つ教会の塔。

ボルケンハーゲンは目をつむる。すべては夢にすぎない。ぼくは酔っ払って寝ているのだ…勇気をふるって叫ぶ。「ばかなまねはよせ—とまれ！ もう逃げられない」

「だまれ！ 貴様がいらぬお節介をやいたばかりに…貴様はデカにまずおれの手がかりをあたえた！ おかげでいっしょにいまや絶体絶命のピンチに立って

いる！」 いい気味だといわぬばかり。

「無意味だよ、おい！ 逃げおおせやしない！」

「次の木までつつこむぞ！」 かん高い笑い声。

ボルケンハーゲンはふるえあがる。不安。死の恐怖。まったく唐突に。ラーベはどんなことでもしかねない。

「おれを生け捕りにはさせん！ テーゲルで二十年間ムシヨ暮らしーまっぴらだ！ そうはさせん！」 ラーベはあえぐ。

カーブ。ボルケンハーゲンはドアに押しつけられる。このまま転がり出るか？ 自殺行為だ。ラーベは百キロだしている。どうする？ 話せ！「きみがいまくたばれば、ほんとうの殺人犯は永久につかまらないぞ！」

「それがどうした？」 ラーベはしかし動揺していた。思案し、決断する。「冗談じゃない—おれを信用する者などいやしない。おやじは三年ほどくらい込んでいたし、お袋にもマエがあった。やつらはおれを信用しない、おい！ ちょっと新聞をのぞいてみろ—いまじゃおれはもう立派な殺人犯だ！」

「法廷でぼくがきみを助けるよ…」

「なんとでもほざけ」

「誓うよ！」

「貴様の誓いなんか屁とも思わん！」

グナイゼナウ通り。長い、広い。中央に遊歩道。地下鉄入口。二台の無線パトカーがすぐ後ろをつけてくる。

ラーベはほとんど泣き声になる。「おれは彼を殺してない！ おれは部屋にいた、たしかに。彼はそこで眠っていると思った。おれがナイトテーブルに近づこうとすると、彼は驚いてとびあがる。おれはカーテンのかげに…彼はおれに気づかなかった、間違いない。おれは彼になにもしなかつた！ だれがそこに寝ているのかさえ、まるで知らなかつた。ネドマンスキーのネの字も知らなかつた！ ただ待っていようと思った、…まで、くそいまいましい！」

二台の無線パトカーが前方から、斜めにつっこんでくる。ラーベはハンドルを右に切る。思いきり横滑りし、歩道にのりあげて暴走し、またもや—ブルルーン！ 一車道にまいもどる。

ボルケンハーゲンはふるえる。この男は確かに本気でしているが…ラーベにチャンスはない—おれにもチャンスはない。

ラーベは題目をとる：「おれははてめえらにつかまらない。目の黒いうちは…」

町なみで急カーブ。ヨルク通り。ヨルク・フォン・ヴァルテンブルク^{xxv}。タウロッゲン…ばかげた連想。ボルケンハーゲンは顔をゆがめる。これが臨終なのか？ なぜこともあろうにここで、なぜよりによっていま？ いやだ！ いやだ！ ボルケンハーゲンは祈る。

スタッコ塗装のファサード。ボルケンハーゲンは壁をすかして見る。人びとはコーヒーを飲んでいる。テレビを見ている。歓談したり、愛しあったり。それなのに、ぼくは死ぬのか。そこのばか者のために！ わきおこる憎しみ。えい、ままよ、ボルケンハーゲンはラーベにとびかかろうとする…だが、座席にうずくまったまま体が動かない。

都市高速鉄道の地下道。半ダースの橋が通りにかかっている。黄色い硬質レンガ張りの壁。一種の峡谷。丸い古風な柱、鋳鉄製の円柱。

ラーベは一つ目の円柱にねらいを定める。ハンドルを右に切り、アクセルをいっぱい踏みこむ。

変だぞ—ほんとうはかなり読みやすい。それにもかかわらず、これはただ要点をメモしようとしたもの。あとで推敲するつもりだった、断片的メモにすぎない。しかし、なんのために推敲するのか？ ただでさえ私はびっしり書きこまれた書類をすでに数キロもかかえこんでいる…

もうそろそろ三時だ。終わりにしようか？ チーフに特集連載記事を組むよう説得すべきか？ いや、チーフは決して話にのるまい。それに、これはまぎれもない小説だ。まあ、見てみよう。制約のなかでこそ達人はおのれの本領を発揮するもの…話の先はどこだ？ 一番いいのは…そうだ。ヴァルター・ネドマンスキ一家訪問に関する私の報告書だ。

ラーベがボルケンハーゲンを乗せてベルリンを疾走して三時間たらずあとに、私

はヴァルター・ネドマンスキー邸へでかけた。その時点ではまだ都心の劇的な出来事についてなにも知らなかった。

ネド工場の新米社長は、弟の死からわずか数日間でまだ身分相応な宿を手に入れることができず、テーゲルから車で十分ほど離れた、漁師ふうの一戸建て住宅に、以前と同様、きわめて愚直に住んでいた。私は郊外のことをそれほどよく知らないために、家を見つけるまで、しばらくうろうろ探さなければならなかった。

ヴァルター・ネドマンスキーの二階建ての家屋は、見栄えのしない隣家から、ただ二本の巨大なシラカバにはさまれて、いっそう目立たない感じがすることで、区別がつくにすぎなかった。垣根のふちでベニバナインゲンマメがしおれていた。呼び鈴を鳴らすと、フェルトのスリッパをひっかけ、無精ひげを生やした少額年金生活者がドアをあけてくれたとしても、私はもう別に驚かなかっただろう。

ヴァルター・ネドマンスキーはひげをそり、靴をはいていた。私はちっぽけな玄関の間へ案内された。苔^{モスグリーン}緑色のじゅうたんは十五ワットの電球の光を吸収していた。差し出されたハンガーは、荒削りの木製で、テストルプが洗淨消毒—62 03 81とのラベルがはられていた。私はレインコートをかけ、彼のあとについて居間にはいった。

「どうぞおかけください」、彼はクールな微笑を浮かべていう。「あちらの窓ぎわにある革張りの安楽いすがお気にめすかもしれません…なにかお飲物はいかがでしょう？」

「はい、いただきます」

「私は一きੱとご存知でしょうが—相変わらず昔かたぎの古い薬剤師です。実習を修了いたしました、辺境のエーバースヴァルデで、私たちの仲間は良質のワインを蒸留するすべをまずまずみごとに習得しました。よろしければ、自家調合の健胃薬草酒をお出しいたします」

「それなら私にもぜひください」

ヴァルター・ネドマンスキーが瓶とグラスを取りにいったあいだに、私は客間を検証する時間が少しできた。壁にはまったく壁紙がなく、みすぼらしく灰色になった接着剤の塗料しか認められない。すりきれたビーダーマイヤー様式^{xxvi}のソファーの上方に、おそらくヴォルプスヴェーデ^{xxvii}と思われる、暗い湿原の風景

画がかかっている。左手の壁のまえには黒っぽく着色された本棚：ベルネ^{xxviii}、マキアベリ^{xxix}、フリーデル、シュペングラー^{xxx}、サルトル^{xxxi}、オルテガ・イ・ガセー^{xxxii}、シュチェンスニー、ニーチェ^{xxxiii}—だがボードレー^{xxxiv}、ベン^{xxxv}、エズラ・パウンド^{xxxvi}も。かたわらに、薬理学と薬学の専門誌や、すばらしい彫り物入りの乳棒^{にゅうぼう}と真鍮^{しんちゆう}製の美しい古い乳鉢^{にゅうばち}がある。すりきれたタブリーズじゅうたん、黄ばんだ錦織^{にしきおり}のカーテン、ずっしりとした暗赤色の絹製傘つきフロアスタンド—これらは、ヴァルター・ネドマンスキーが磨きあげたカラフをもって部屋にもどるまでに、私がうけた最後の印象であった。

「ちょっと遅れてすみません」 ヴァルターは、私たちのあいだにあった、ぐらぐらしているチェス盤のうえに二つグラスを置きながらいう。「一人暮らしには当然のことながら完全主義などありません」 彼は大儀そうに近くのソファ^{じま}に腰をおろし、格子縞のハンカチで分厚いレンズのニッケル眼鏡をふきはじめた。

いつも眼鏡をかけている人が不意に眼鏡をはずすと、その顔に驚かされるように、私はびっくりした。無骨な醜い顔。魅力がないというより、むしろおかしい。型どおりに私は頭にメモを入力しはじめた：頭は胴と比べてはるかに大きすぎる。たくましく際立った下顎^{したあご}、かくばった額^{きば}、牙のような前歯のある大きな口、不格好な鼻、大きすぎる耳。典型的な馬面。

ヴァルター・ネドマンスキーは私をじろじろ見た。「なにをを考えておられるか、よく承知しています。皆様が考えることです。学校ではいつも私はみんなにとってチビの蚊でした。さらに補足させていただけるなら、私は奇形で、猫背で、左手は少しだらりとたれさがり、右足は少しえび足です…これですべてでしょうか？ 乾杯！」

当惑して私はグラスをにらむが、結局グラスをとりあげ、健胃薬草酒を一気にあおった。肝油の味がした。なにか慰めを、なにかやさしい言葉をかけなければとあせるが、なにも思いつかなかった。

ヴァルター・ネドマンスキーはほほえむ。「ヘルダー^{xxxvii}を引用なさい：神意の送るものには、堪えなさい。堪えぬく人には、月桂冠がさずけられる—あるいはマックス・ダウテンダイ^{xxxviii}：運命はつねにわれわれにとって最善のことを知っている…五十年のうちにこのようないくつかのことに気づきます」

私は寒気がした。

「失礼！」 彼は黒い背広の袖口からちよつと石灰粉をたたきおとした。「それに昨日の申し出に対してもお許しください。あなたを買収するつもりはありませんでした。もうこれ以上ほこりが巻きあがるのを防ぎたかっただけです…だから昨日いったことはお忘れください—さあ、どんな情報にもご協力します」

「どうもありがとう…」 私は上着のポケットからメモ帳を取り出す時、うっかり空の封筒もつかみ、それが紙バトのようにネドマンスキーの足元にとんだ。

「おお！」 彼は封筒を拾いあげ、私のあて名の上側に一枚の多彩な切手—おそらく色あざやかな敷物のうえに錫製の食器—を発見し、判読した。「ドイツ連邦共和国。ロシア・ソビエト絵画の作品…」

「ドレーズデンのいところからもらいました」、と私。

「きれいな切手…いただいてよろしいでしょうか？」

「どうぞ—もちろんです！」

「私はつまり絵画をモチーフにした切手を収集しています。おわかりいただきたいのですが…」 ヴァルターは切手、絵画、画家について語りはじめた。芸術全般にわたって話した。すべてのこと—弟の殺人事件も、私の訪問目的も—いっさいを忘れたかのようであった。造詣が深く、いつものように、そのまますぐ印刷にまわせるように話した。

私が数年前に偉大な美術品模造者たちに関する本を出版したと話すと、評価の定まらないベルリンっ子でヴァン・ゴッホの贋作者オットー・ヴァッカーについて私たちは活発な論争にのめりこんでいった。ヴァルター・ネドマンスキーは驚いたことに、ヴァッカーの紹介したヴァン・ゴッホの絵は本物だという意見であり、そのさいにマイアー＝グレーフェとオランダの専門家ブレマーを引き合いにだしたのに反して、私は繰り返シアムステルダムの美術と贋作の専門家ヴァン・ダンツィッヒを引用した：ヴァン・ゴッホの伝記を知る者なら、これほど偽造するのにうってつけな芸術家はほかにないことを知っている。なぜならヴァン・ゴッホは数多くの場所で描き、絵をどこかに放置したり、友人たちにあたえたりしたからである。要するに、私たちは意見を一致させることはできなかったが、この論争で二人は一挙にうちとけた。

「ついでに絵といえば…」 ヴァルター・ネドマンスキーはまだなにかを思いついた。「バーデンアレーの屋敷は、マックスが戦争の終わりごろに購入するまで、有名な美術収集家のものだったことをご存知でしたか？」

「いいえ—私がどこから知ったというのです？」

「エルンスト・シールバウム教授—ことにヒンズー教の造形美術品の解釈で有名な」

「おもしろい…」

「でも、いまはきっとマックス・ネドマンスキー事件について資料を収集したいのでしょう…」 ヴァルターは乳鉢^{にゅうぼち}へ手をのぼし、そのなかにあるタバコの灰をつぶしだした。

「ご自身のことや弟さんとの関係についてなにかお聞かせいただければ、ありがたいのですが」

彼はゆっくりとうなずいた。「いいですよ…私は一九一二年一〇月二十四日東プリーグニッツのプリッツヴァルクに生まれました。父はそのクーアフルステンダム薬局の所有者でした。第一次世界大戦当初に父はベルリンへ移り、そこで小さい製薬工場を開き、やけど用鉛軟膏^{なまりなんこう}、点眼剤、せきどめシロップなどを製造しました。出だしは格別好調とはいかず、私たちは数年間ありふれた長屋の裏庭に住んでいた。母が死に、一年足らずで父は再婚した—がっしりした、果敢な、支配欲の強い女性と。彼女はあらゆる病的なもの、醜いもの、奇形などに対して神経病者のような反感をいただいた…これから先のことはあなたにも想像がつくでしょう。マックス、健全な強い子供が誕生した。それ以来、私の役割は明確に限定されました。私は弟の召使で、スケープゴートでなければならなかった。弟につかえ、弟の攻撃をうけとめなければならぬ。私はただ夢を見るすべを学んだおかげで、生きながらえたのでしょう—」 彼は沈黙した。

「それはつらかったにちがいありません」、私はつぶやいた。

ヴァルターは二杯目の健胃薬草酒をそそぎ、ぐっと飲みくだした。銀製の缶からチェスの駒を次々と取りだし、盤面にならべながら、話をつづけた：「私はチビの蚊、弟の宮廷道化師になった。弟が私をからかう冗談は、仲間全員を楽しませた。私が戸棚から本を取りだすと、その瞬間に彼はぜがひでも同じ本が読みた

くなる—そして私の手から本をたたきおとした。弟の権利は強者の権利でした。彼の母親はそれをただあまりにも自然なことだとしか思わなかった。私たちの父親はインフレと経済危機にたっぷり苦しめられていた。そう…」

「それで一度も弟さんから逃れられなかったのですか？」

「憎悪や侮辱も依然として完全な孤独よりもましだ…少なくとも自分にそう言い聞かせていた。ひょっとするとそれは弱さにすぎなかつただけかもしれない—とにかく一部は。いずれにせよ私も社会的存在です。私に縛られ、私が縛られている、ある人間が必要ですよ—たとえ相手がマックス・ネドマンスキーのような人間であっても。私はマックスを力のかぎり憎んでいた。何度も殺したいと思ったが、彼を必要としていたのです。私は薬剤師になりました。それでのちに、マックスの工場で私を働かせるように、彼を強制することができた。あれは私を雇わざるをえなかったのです。ほかにだれが私を雇ったでしょう、この私を…？」

ヴァルターは額から汗をぬぐうために話を中断した。

「そうだとしても弟さんの死はチャンスですね」 私は挑発してみた。

彼は弱々しくほほえむ。「いつもすべては遅れてやってくる…バイエル^{xxxix}とかヘキスト^{xl}と競争しろとでもおっしゃるのですか？」

「いいえ、でもあなたはいまや権力をじゅうぶんに駆使できます。あなたも—とても無情な言葉で表現させていただきますと—いまや多くの人びとにとって魅力的になられました。女性にとっても…」

「もしかすれば…そのために私がマックスを殺害した、とお考えですか？」

「そのようなことは申ししていません」

「でも考えた」

「あなたのご意見では、いったいだれが犯人でしょう？」

ヴァルター・ネドマンスキーは一瞬考えた。「私はだれにも罪を負わせたくない—」

「もしかしてギド—あの無政府主義者？」

肩をすくめる。

「それとも押し込み強盗？」

「たしかにそのほうがありそうなこと」 彼はますます口数が少なくなった。

呼び鈴がなる。彼はうめきながらたちあがり、玄関の間にでていく。ドアをあけたとき、どうやらわりあい若い男の冷静な声が聞こえてきた。

「こんにちは、私の名前はベートウゲ、刑事係長のベートウゲです。ヴァルター・ネドマンスキーさんですね？」

「はい、どんなご用でしょう？」

「あなたに逮捕状がでています。ご同行願えますか？」

ここで私の記憶録は終わっている。もちろん、あのとき私はひどく驚いた。ヴァルター・ネドマンスキーが連行されていくと、すぐマンハルト主任警部に電話するために、最寄りの電話ボックスにかけこんだ。だが不運にも、警部はまだ帰っていなかった。夕方遅くにやっと連絡がついた。このマンハルトとの通話にはなかなか興味深い録音テープがある。

おれはやつをしょっぴかせ、死体をさがさせた。おお、あの男がこれほどあけっぴろげに徘徊はいかいするとは、なんと危険なことか！それにもかかわらず、われわれはきびしい掟おきてにしたがってやつを扱うことが許されない。判断でなく、目で選ぶ、いかれた大衆に、やつは人気があるのだ…

いまましい、これはハムレットじゃないか！ どうしてハムレットが通話にまぎれこむのか…おそらく女房がまたもやダビングするために、レコードを女友達から借りたのだろう…まったく泣きたくなるよ！

—…まだなにも聞いていない？

—ボルゲンハーゲンから？ いいえ。

ストップ！ テープがとまる。

ありがたい—妻はまだ手遅れにならないうちに気づいたぞ！

—…まだなにも聞いていない？

—ボルゲンハーゲンから？ いいえ。

—マックス・ネドマンスキーが関係を結んでいた、ある売春婦からボルケンハーゲンは耳寄りな情報を得ていた。私の二人の同僚—刑事主任係長ヘルマンと刑

事係長ベートゥゲーがその後ボルケンハーゲンの助けを借りて押し込み強盗を確認した：マンフレート・ラーベとかいう男だ。

—おめでとう！

—いや逮捕時に、容疑者はうちの刑事らを打ち負かし、自分の車でまんまと逃げてしまった…

—また神技ですね！ いったい次の昇進はいつあるのです？

—…そのとき男はボルケンハーゲンを人質にとって逃げたのだ。

—なんですか？

—ホシは武器を手にしてボルケンハーゲンを無理やり車にのせた。それから二人の乗る車はやみくもにぶっとばしていった。

—それで？ なにか起きたのですか？

—都市高速鉄道の地下道ヨルク通りを知っているね？

—もちろん、知っています。

—そこにたくさん支柱がある。その一本を選び、ラーベは自殺をはかった…

—なんてこった！ 二人は死んだ？

—いや、いや。ただ打撲傷と擦過傷だけ。めちゃくちゃに運がいい、二人とも。

—そういえるでしょうね！

—ラーベはうまく初志を貫徹できなかった。最後の瞬間に勇気がうせ、ブレーキを踏んでしまった。ただわりあい軽い衝突…

—それでラーベはなんといっていますか？

—われわれ、ベートゥゲと私が、ラーベをずっと尋問した。侵入は認めているが、殺人のほうは実にきっぱりと否認している。もちろんラーベは不安をいだき、その言い分を信じる者はいない。

—あんた方はしかしラーベを信用したのですよね？

—どうして？

—ほら、部下がさっきヴァルター・ネドマンスキーを逮捕したじゃないですか。

—うん、そのとおり。ラーベはヴァルターにかなり重くのしかかる不利な証言をしている。その結果、われわれは拘留状をとることができたほどだ。

—こりゃたまげた！

—屋敷の室外でショートのと大混乱がはじまったとき、ラーベはカーテンのかげに隠れていた、という。大混乱のさなかには、だれかとぶつかる危険が大きすぎるように思われたので、逃げようとしなかった。庭にも、ランプやはしごをさがして、人びとがいたそう。

—ラーベはいったいマックス・ネドマンスキーに、あの…ええと：「死人」に気づいていたのですか？

—そう…つまり、男がひとりベッドに横たわり、ときどき動いていた、という。ネドマンスキーがまだ生きていたことは誓ってよい、と主張している。

—それは、ボルケンハーゲンが私たちに話したことと、きわめて正確に一致しますねえ。

—そのとおり！不意にそのあと、ラーベによれば、小さい、いくらか障害のある男が部屋にはいってきて、ナイトテーブルでなにやらごそごそした。ラーベは男をしっかり見たという—したがってラーベは、ね、そうだろう？ 顔も…

—たしかにそうかもしれない。ついに一件落着ですか。

—そのとおり…とにかくラーベは対決でヴァルター・ネドマンスキーを即座に同定することができた。

—ふむ…薬剤師さんには旗色が悪そうですね？

—そう思いたいねえ。というのもわれわれはヴァルター・ネドマンスキーの指紋をナイトテーブルにも金庫にも検出したのだ。

—いやごりっば、ごりっば！ヴァルターが弟の首をしめるのを、ラーベは見たのですか？

—いや、見なかった。でも聞いていた。

—ええ…？

—ヴァルターがナイトテーブルの引き出しをひっかきまわしているときに、ラーベはすばやく隣の浴室へするりとはいりこんだという。浴室でやがて騒ぎを聞きつけた—押し殺した叫び声などを。その機会を利用して、次に書斎へ逃げこみ、そこでボルケンハーゲンを打ちのめすことになった。

—これまたボルケンハーゲンの供述と一致する。

—そのとおり。

—ヴァルター・ネドマンスキーは決闘を認めているのですか？

—そうだ。

—えっ、なんですって…

—ヴァルター・ネドマンスキーがいうには、弟の寝室へ行って、弟の遺言状をさがし、場合によってはそれを破棄しようと思ったらしい。

—いったいなぜ？

—なかなか複雑なことだ。

—さあ、話して！

—それはまあ…われわれはマックス・ネドマンスキーの遺言状をそうこうするうちに発見した。ナイトテーブルの引き出しじゃなく、金庫のなかにあった。

—なるほど。それで？

—マックス・ネドマンスキーは遺言状で法定相続人を相続順位から除外して、遺産をドイツ赤十字に贈るようにしていた。

—まさか！

—さあさあ…マリーア・ネドマンスキーとヴァルター・ネドマンスキーはしたがってまったく字義どおり相続権を奪われた。遺言状での理由づけは、「兩人は私に対してつねに拒絶的な、敵意にみちた態度をとった」とある。

—否定しがたいことです！

—そう。それにヴァルター・ネドマンスキーは、遺言状をいまいったような主旨で作成しようとしていた、弟の魂胆を知っていた—このことはヴァルター自身もそうこうするうちに認めた。マックスはもくろみをいたるところでふれまわって、ヴァルターをわざといらだたせていた。証人はたくさんいる。マックスは、夜中にベッドで—眠れないとき—当の遺言状をよく書いているということもひけらかしていた。これがなにを意味するか、もちろんヴァルターにはよくわかっていた。

—私には、正直に言って、いまひとつ腑に落ちないところがある。

—ごくわかりやすくいえば、ヴァルターは、どんな犠牲を払っても、遺言状を破棄しようとして全力をつくすほかなかった。だいたい遺言状さえ見つかっていなければ、法定相続が開始されたわけだからね。

—ああそうか、なるほど！

—法定相続人はつねに被相続人の近親者ならびに配偶者です。ヴァルターは第二順位の法定相続人で、マリーアは第一順位の法定相続人であったはずだ。したがって、マリーアは遺産の四分之三、ヴァルターは四分の一を相続しただろう。また、貨幣と物件の価値にして約二千万マルクが遺産として残された。

—悪くない！

—したがってマリーア・ネドマンスキーに千五百万マルク、ヴァルターに五百万マルク。

—ところがマックスは財産をドイツ赤十字に遺贈していた…

—そのとおり！　そこでいまや次のような状況が生まれる：マリーアは遺留分権利者として、通常取得することができたであろう相続分の二分の一を取得するが、ヴァルター・ネドマンスキーは一銭ももらえない。なぜなら遺留分を有する者は、もっぱら被相続人の直系卑属—したがって被相続人の子供や子供の子供—、配偶者および両親である。したがってヴァルター・ネドマンスキーは、まさに作成された遺言状を破棄することに、すべての関心があったにちがいない。彼にとって問題は、五百万かゼロか！を意味していた。

—ヴァルターは遺言状をさがしていたことを認めたのですね？

—うん、そうだよ！　ヴァルターは、マックスが死んだものと固く信じていた、といっている。ナイトテーブルの引き出しをひっかきまわしても、そこになにも見つからなかったので、弟のベッドの上方にある金庫をあけようとした。マックスは死んだように横たわっていたそうだよ。

—そのあと「死者」がよみがえった、そうですね？

—そうだ。「死者」が急に声をふりしぼって笑いだした。ヴァルターは死ぬほど驚き、本人がいうには、足をすべらせて、弟の体のう上に倒れこんだ。正確にいうと、ベッドサイドマットがヴァルターの足下ですべってとんでしまった…マックスは自分をつかんで放そうとしなかったが、やっこのことでまた立ちあがり、部屋から走りだした…もちろん、ヴァルターはこの出来事についていっさいだれにも話していない。

—当然、私も話さないでしょうね、彼の立場なら。

—そうそう、ベートウゲにヴァルターはこうもいった—自分がマックスを枕で窒息させようとしたのではなく、逆に…

—ああ、正当防衛だといいたいのでしょう？

—そうらしい。

—ただ、ヴァルターにひとりの人間を枕で窒息死させるだけの力がじゅうぶんあるかどうか疑わしい。要するに、彼の左手は完全には…えーと、機能しない。

—われわれが彼の主治医に尋ねたところ、それほど悪いわけではまったくない。ちょっとそんなふりをしているそうだよ。

—おもしろい…

—明朝われわれは尋問をつづける。自白がとれれば、すぐ知らせるよ。

—了解。心から感謝し

ここで録音が途切れる。別れの挨拶^{あいさつ}を私はもう録音しなかった。だがテープには、まだ二つ目の通話がおさめられていた。私が受話器を置くやいなや、ボルケンハーゲンが電話をかけてきた。

はい…？

—ドクターですか？

—おい、ボルケンハーゲン！ いやまあ、とてつもないことをしでかすじゃないか！ たったいま聞いたよ—サツからのホットニュース。

—すばらしいネタでしょ？ 死のわきをすれすれに通りすぎた。それでさっそく祝いをせずにはいられなかった。ぼくらは…ええと…ぼくはシャンパンを飲んでかなりご機嫌です。あなたも…

—ぼくら？ 「ぼくら」ってだれだ？

—ぼくら？

—そう、ぼくら！

—ああそうか…いやあ、ぼくの自我とぼくの良心…

—きみはもっと機転のきく答えをしていたが！

—ロージも今日の午後同じようなことをいっていた。

—そのまたロージとはいったいだれだ？

—女…いやあ、口にするのも恥ずかしい。とりわけ、ロージもいとしいマックス・ネドマンスキーに身売りしていた…まあ、これは本題と関係のないこと。いずれにせよ彼女はぼくに決定的な情報をくれた。つまり、ラーベの件で。

—なるほど。それで彼女とでかけたのだね？

—ぼくの私生活にいったいどんな関係がおありか、ちょっと教えてくださいか？ そんなことよりも、殺人捜査班でどんなニュースがあるのか、聞かせてください。

—ラーベの証言に基づいて、ヴァルター・ネドマンスキーは逮捕されたのだよ。

—そうですか、なんてこった—いったいどうしてサツはヴァルターのことを思いついたのですか？

—いいかね！ つまりラーベが主張している

停止ボタン。マンハルトが私についきましたが話してくれたことをもう一度聞く必要はない。テープをちょっと二・三メートル先送りしよう…

—本当をいうと、ヴァルター・ネドマンスキーが犯人だとは想像しなかった。誕生パーティーで知り合ったときの様子からすれば…ちなみに、ヴァルターがああギド・ヴィンクラーを打ちのめしたということも想像できない。

—私もできない…長いことヴァルターと話したが、そのときに聞いたことも、イメージにそぐわない。弟のマックスは—まあ、いってみれば、ヴァルターの人生に意味をあたえた、力であった。この人生の弁証法だけは心得ていなければならぬ。

—名言だ—それをぼくらの…いや、あなたの記事にとりあげてください。これからどうしましょう？

—提案がありますか？

—なんだかんだいっても、ぼくらにはまだ二・三の候補がいますね？ あなたはギド・ヴィンクラーをとっちめてくれませんか。ぼくは一度あのドライアーの家を探れますが—いいですか？

—了解。情報を知らせてほしい、すみやかに

ここでテープは終わっている。運がよかった—ちょうど足りた。その反面…つまり、損失をよく考えてみると、とても有益なものとはいえない。ほかにまだなにがある？ ああそうか…あくび。おやおや、私は眠い！

やかんで湯をわかしてコーヒーをつくろう—どうせもう眠らない—そのあいだに次の報告を読もう：ボルケンハーゲンの第一回ドライアー一家訪問に関する回想録。これは—ちょっと待てよ…そう：これはふたたび三人称で書かれているが、ボルケンハーゲンは射精的文体期をどうやら乗り越えたいらしい。

ボルケンハーゲンはワインレッドのR四に乗ってドライアー一家にむかった。物入れに住所を書いたメモ用紙があった：ヴァルデュルナー・ヴェーク八十三。午後五時少しまえで、通勤ラッシュが頂点に達していたので、かなりの時間がかかった。

ようやくあいている街区のまえでとまった。ひと目で福祉住宅建設とわかる。退屈して縁石にうづくまる、ブロンドの子供たちが、彼に目をみはった。中年の婦人が如雨露^{じょうろ}と熊手を荷台に固定し、ゆっくりと墓地へ自転車を走らせていった。がっしりした青年が熱心にフォルクスワーゲンを洗っていた。

三階に、黒いプラスチック箔^{はく}のなかに白く名前を刻んだ、ドライアーの表札がとりつけられていた。ボルケンハーゲンは呼び鈴のボタンをおす。奥でかん高い音がした。それから引きずる足音、青い目がガラスののぞき穴にあらわれた。ボルケンハーゲンは一步さがる。これはインタビュアーの仕事から心得たマナーだ：こちらがすっかり先方の視野にはいるように、いつもドアからあとずさりすること。

「どなたですか？」

「ボルケンハーゲンといいます…」

「ああ、グラフ雑誌の？ 承知しています。あなたがこられることを、すでに息子から聞いております」 チェーンが押しもどされ、ドアがあげられた。

エリーザベト・ドライアー、やせた白髪の婦人は、ボルケンハーゲンを客間へ

案内し、到着したばかりの通信販売会社の家具に客の目を見張らせた。居間用の
箆笥^{たんす}、幅二メートル八〇、紫檀材^{したん}張り、天然つや消し仕上げ、中央部の左側に背
面が鏡になっているむき出しの仕切り…テレビがついていた。ドライヤー夫人は
スイッチを切る。『よく聞けよ』のうえに二編の女性向き大衆小説：モーニカは
幸せを勝ちとるとエーファ＝マリーア、沈黙を破れ。幼いセキセイインコは、間
抜けと呼びかけると、鳥かごのなかで騒ぎたてた。床磨き用ワックスのにおいが
した。ボルケンハーゲンがブランデーをすすめられた。ディーターのことを尋ね
ると、夫人は急にまくしたてはじめた。

「ディーターレ—わたしらはあの子をいつもディーターレと呼んでいるの—
ええ、あの子はりっぱに成長したわ。ネドマンスキーさんのところで暮らした時
期はせがれのためになった、おわかりですか？ 洗練されたふるまいや、礼儀作
法を身につけました。いまでは人がどうふるまうかをわきまえていますでしょ？
以前はあの子に手を焼きましたよ。夫はもう五十五歳で亡くなりましてねえ。労
働災害というのか、落下してくる鉄製の梁^{はり}にあたって死にしまった、とてもかわ
いそうな人です。私はまったく一人で自立し、親子二人がどうにか暮らしてい
かなければならなかった、おわかりですか？ あちこちで、掃除婦をしました—け
っして甘い話ではなかった、といえます。他人のごみくずを片づけるのは、だれ
もができることではない。だれだって誇りがありますからねえ、おわかりです
か？」

「もちろんわかりますとも」

「でももう最悪の事態は切り抜けました。ディーターレがネド工場で来月一日
から働きはじめます、倉庫で—ネドマンスキーさんの兄さんがせがれのために尽
力してくれました。ディーターレが有能であれば、部長にまで出世することがで
きます。これはチャンスです、おわかりでしょ？ 来月まであの子はまだ自分の
小さい家ですることがありますから。私の義母が彼に家を遺贈したのです。ヴィ
テナウ、テッセノ通り一〇二番地。そちらでディーターレはいまあちこち塗装し
ています。あの子にすべてひとりで家を小さい王国にさせてやりたい、おわかり
でしょう？」

「ええ、ええ、わかりますとも…」

「いやはや、どれもこれもたいそう骨が折れる仕事です！ かわいそうな子！ 年寄りほどんなガラクタも後生大事にとっておくものですから、ね。それにアトリエときたら！ というのも、義父は画家でしたので、ね。絵を模写したり修復したりしていた、おわかりですか？ いくつかの美術館よりも多くの古いこけおどしの大作がアトリエをかこむように置いてある。ディーターレはいま、どのような絵があるのか、大きなリストを作成中ですが、できしだい、わたしらはがらくたを全部売るつもりです、わかりますか？ ごそっと大金がはいってくるでしょう。ねえ、いつか幸運の女神も正しい人を選びだすにちがいありませんし…あれは玄関のドアでした一聞こえました？ きっとディーターレでしょう…」

その後まもなくボルケンハーゲンはディーターレとテーブルについた。ドライアー夫人はそっとひきさがった。

ドライアーはジーンズをはき、白いタートルネック＝セーターを着ていた。無精ひげがあまり似合わない、丸い、ばら色の童顔をしていた。額はぐっと前に突き出て、まるでこぶのように見えた。結核性の赤らんだ頬ほおを除き、顔はきわだって青白かった。黒みがかかった金髪がだらしなくたれさがり、頭をモップのように見せている。二十一歳にしてはぶくぶくふとりすぎている。ドライアーはロート＝ヘンドレに火をつけ、苦しそうに激しくせきこみ、うめきながら両腕で安楽いすから体をつっぱって立ちあがった。「ちょっとビールをもってきましょう」

そのあと二人は向かい合わせにすわった。ドライアーは飲み、なにもしゃべらない。ボルケンハーゲンはどう切り出せばいいのか、よくわからなかった。無言の息子はどうやら話し好きの母親よりもさらにやっかいだ。唐突に用件を切り出すな、とボルケンハーゲンは自戒し、結局こういった。

「ねえ、お母さんの話によると、最悪の事態は切り抜けたそうだね」

「そう…うちじゃまもなく金庫がうなりだす」

ボルケンハーゲンはタバコに火をつける。「おじいさんの絵だよね？」

「いったいどこから知ったの？」

「これもお母さんから」

「おふくろはどうにも黙っておれないたちで…かなりすばらしい模写もいくつかある。ゴーガン^{xli}、カンディンスキー^{xlii}、ルノアール^{xliii}、ドガ^{xliv}、セザン

ヌ^{xlv}などなど。興味ありますか？」

「ちょっと見せて…」

「さあ急いで一すべて一級品の模写で、どれも飛ぶように売れます。いろんなタイプの絵がこのようなもののうえに並んでいる」

「まだネドで働くつもりですか？」

「もちろん」

「大金でいったいなにをするの？」

ドライアーは笑った。「…まずちょっとレコードを買うね…」　ドライアーは手に入れたい、ありとあらゆるレコードを数えあげ、個々の演奏者の長所と短所を詳細に論評しはじめた。いまやもう無口どころか、見当はずれなことをしゃべりまくった。そのあいだにビールをまた取ってきて、さらにときおりブランデーもついだ。

ボルケンハーゲンはますます退屈してきた。有意味な情報はここではどうやら期待できそうにない。酔いがまわってきたのを感じはじめ、あくびをかみ殺した。ドライアーはもう一杯ブランデーをついでくれた。

そのときに起こった。

ことによると、それはアルコールと関係があったのかもしれない—というよりもむしろ、アルコールのにおいのせいなのかもしれない。ボルケンハーゲンの脳裏に奇妙な記憶過程が再生された。重要な登場の最終細目をつめるために、マックス・ネドマンスキーとその書斎で対座している、自分の姿が不意に浮かんだ。二人とも浴びるほど飲んでいたが、^{めいてい}酩酊状態にはあとわずかに一・二杯たりなかった。互いにできるだけしらふをよそおうと苦心していた。だが、やがてボルケンハーゲンはもはやほとんど姿勢を正していられなくなり、頭がテーブルの^{こういた}甲板に沈んでしまった…そしてよりによっていま、ディーター・ドライアーと話しているさなかに、ボルケンハーゲンは、あのあとに起こったことを思い出すような気がした；ネドマンスキーは電話機のところにゆき、かなり長い番号のダイヤルをまわして、だれかと話していた—すなわち、話していたというよりもまわらぬ舌で片言をしゃべっていた。

ボルケンハーゲンはもはやドライアーを気にとめなかった。ネドマンスキーが

しゃべっていたことが、突然とても重要に感じられた。空のチューブから最後の滴をしぼりだすように、いわば記憶をしぼってみた。ドライヤーの話は遠方のせせらぎにすぎなかった：「ええ、ネドマンスキーのもとでそりやもういいアルバイトでした…」

あのとき—あのときだった！

マックス・ネドマンスキーがあのと時話していた文章…それをボルケンハーゲンはふたたび聞く思いがした、ひどく大声で、全文を。ボルケンハーゲンは安堵感に心をみたされ、目を閉じた。

「どうかした…？」　ドライヤーは心配して相手を見つめた。

「いや、いや—ちょっと胃^{けいれん}痙攣を起こしただけ…もうおさまった」　ボルケンハーゲンはうきうきした気分になり、いまにもとび跳ねはねたかった。くそっ、こりゃネドマンスキー事件の打開策になるかもしれない！　ドクターは目を見張るのではないだろうか。

「いったいなぜこちらに来られたのです—デカがネドマンスキーの変わり者の兄をばくった、いまになって？」

「おやおや、ドライヤーさん—ぼくは要するにあらゆる事実を収集する代価として報酬をもらっているわけで、ね？　そのうえヴァルター・ネドマンスキーは、ぼくの知るかぎり、まだ自白はしていない」

「しかしヴァルターが殺人者だ—それは絶対確実です！　彼がボスと言いつ争っていたとき、一度その目を見るべきでしたね。憎悪ですよ、ぎらぎらした憎悪の目…一度なんか、ネド薬一回分の仕込みがおしゃかになったおかげで、ヴァルターは大目玉をくった—原料は、ひっくり返してすっかり捨てることができたが、なんらかの手違いで配量に誤りがあった…デブのマックスが出ていくと、兄貴はこぶしを握りしめていった、『豚野郎、そのうちいつかおまえを殺してやる！』って」

「警察にもそのことを話しましたか？」

「もちろん。あのベートウゲに」

「じゃあそれは結構です」　ボルケンハーゲンはなにかメモ用紙に走り書きした。

「ほかにまだ質問は？」　ドライヤーは時計を見る。「会う約束があるので—」

ドライアーは財布をとりだし、わずかな紙幣をかぞえた。「この事件は映画化される、とお考えですか？」

「ひょっとすると。殺人者がだれであるか、それしただいね」

ドライアーは驚く。「おれの考えでは、ヴァルター・ネドマンスキー…」

ボルケンハーゲンはほほえんだ。「みんなそう思っている—ぼく以外は」

ここまでがボルケンハーゲンの記録。ほかにはほとんどなにもでてこなかった、ドライアーとの対話中に、はからずもボルケンハーゲンはあることを思いついた…ちなみに、読者に対するこの秘密めかした言動は少々安っぽい感じがする。折をみて彼に一度いわなければならない。ともかく、その後まもなく明らかになったことは、事件が実際にかなり重大な…ほら、今度は私がちょうど同じように書きはじめています！ それじゃ、むしろ順番にしたがって：ボルケンハーゲンだけが探しあてたのではなく、私ももしかすると有力な手がかりを発見していた。

ふたたび私はプリンツレグンテン通りのギド・ヴィンクラーの玄関口に立って、呼び鈴のボタンを押すのをためらった。家のなかでちょっとしたことが起きていたのだ—聞きのがしようがない。

「出ていくわ—もうたくさん！」

「どうか、ミス・ダームス…！」

「あんたのやきもちがばかばかしくて話にならないわ！ 私たちは二度いっしょにでかけた—するともう何度もいっしょに寝たみたいにいるのね！」

「ティーナ…」

「あんたはどの女にもきらわれるわ。いつも政治のおしゃべりばかり、それから嫉妬^{しつと}」

「白状しろ、昨日あのボルケンハーゲンとフォレ・プレには行って…」

「もちろんそうしたわ！ それがあんたになんの関係があるの？」

「たくさんある！ 知っているはずだ、どんなに…どんなに…おれが…ために、あらゆることをしてきたか…それはとてもむずかしかった…やっとなんたはこのおれのうちにきた、そして…」

「私のコートをちょうだい！」

「ティーナ、頼むよ！ おれは…こんなにすばらしい夕べ…そして…」

「あんたはただそこにすわって、私にバクシュキンとかについて話すだけじゃない…」

「バクーニン^{xlvi}だ！」

「私にかまないで。こっちにはどうでもいいことなの、どれほどその男が…」

「ティーナ、おれはともかくよその男らと違っている。すぐどの女とでも寝たくはない—お互いに違ったかかわりかたもできるのだから…ちくしょう—おれのことを理解してくれ！」

「私らはとにかく馬があわないのよ」

「でもネドマンスキーとはあっていたのだろ？」

「それは私の問題だわ！」

「ごめん、ティーナ。あんたをただ助けたいだけだ。なにに苦しめられたか、知っているのだ」

「つまらないことを知っているのね！」

「あんたがおれをまともに相手にしないのは、おれがアルファロメオも、水泳プールも、カルダンの背広ももっていないから。そうだよ。あんたにとっておれは無能な頭のおかしな野郎さ—どうだね？」

「でもねえギド！ 私たちは知りあってもうずいぶん長いことになるわ…あんたはまずもって女の子と親しくなるすべを学ばなければ…」

「手ほどきはいらさないよ！」

「ただあんたのためを思っていることよ」

「いや、ティーナ、おれは…」

などなど。

次の何分間はもうほとんど新たな情報をもたらさないだろうと確信すると、私は呼び鈴をならした。すぐに口論はとだえた。ギドがドアをあけてくれ、二人はなにもなかったふりをする。二つのかわいいカップに冷めた紅茶がはいっていた。

「殿方のじゃまをしたくないので…」マルティーナは撤退の機会に利用した。

「いらっしゃっても私にはけっしてじゃまになりませんが」、と私は保証した。

口先だけではなく、その瞬間はほんとうにそう思った。彼女は粗いリンネルの赤いラズベリー色をしたミニドレスに、かわいい透かし編みの白いパンティーストッキングを身につけていた。もしも私が靴下工場のオーナーだったなら、彼女の両足をすべての自社製品にはりつけたことだろう。マルティーナは私たちがはじめて出会ったときよりも、はるかに落ち着き、ずっとやわらかく、格段に健康そうにみえた。けれども、私は靴下の工場主でない悲しさから、相応の申し出をすることもならず、彼女は別れをつげた。

そのあと私はギドと二人きりで独身男のアパートにすわり、最初の質問をした：「教えてくれ、ギド、きみのような男が相続人選びのような本をいっただうして読むことになるのか？」

「ああ…」ギドはどうやらマルティーナのために戸棚から引っ張りだしていたらしい、ワインレッドのネクタイをゆるめた。灰色のフランネルの背広も気に入らない様子だった。「おわかりですか—正直に言えば—無政府主義思想に精通するほど、ますます無意識に健全な世界、すなわち大衆小説の世界にあこがれるものです。一度 GANGHOFFER の村の使徒を手にとってみてください。そこには…彼は教会のそばを通るとき、手で塀にふれた。ふれることによって^{はら}祓い清められた塀の石からなにかが、善良で神聖なものが、あたかも自分にむかってあふれでてくるにちがいないかのように。開け放たれた教会の門前で彼は十字をきった…など。やはりそれなりのことはあるのです—違いますか？」

「ちょっといっておきたいが、私は原則として文学に反対ではない。そこでは作家がいぜんとして、だれにもわかる言葉で前から後ろへと叙述し、おまけに、消息通らに鼻で笑われたり、くそみそにけちをつけられたりすることもなく、あえて情動にはしることも許されている。それがよりによって GANGHOFFER でなければならぬのかどうか…」

ギドはまったく耳を傾けていなかった。「…ところが同時に、それが暴露しているのは、ブルジョア全体の意識：不正、貪欲、貧困は社会体制のせいではなく、個人の邪悪な心である…そんなばかげたことはない！」

私はほほえんだ。「天と地には、おまえたちの机上の知識が夢みるよりも、多くのことがある、ホレイシオ」

「そのつまらないハムレットとどうぞまあ仲良く！ ブルジョア劇場、道德施設—操作のうえにまた操作！　もしぼくの思惑どおりにいけば、すでに劇場は全部閉館になっていたかもしれない。ぼくは三年ほどもうどこにもは行ったことがない。ミンクのストールをまとったパン屋の太ったおかみさん、黒い晴れ着をきた上級行政官殿…」　徐々にギドは勢いづく。「社会施設として旧式な劇場はもっぱら、直接生産者たちの民衆を抑圧することを助け、民衆が一ほら！—『自発的に』少数の搾取階級に服従するために寄与する目的を担っている。この少数階級を追いはらってはじめて…一般価値の粉碎…いいですか、われわれは…」

うんぬん。

「…そしてマックス・ネドマンスキーはもう気の毒ではない。あのような豚野郎はみんな同じ目にあわなければなるまい！」　ギドは苦しそうに息をした。

「ネドマンスキーの死は、いわば—ねえ、シグナルのようなものかもしれない、ということですか？」

「いや…」　彼ははっとする。顔つきが変わりはじめた。ぐっと飲みこみ、のどぼとけが上下に踊った。「おれに殺人の罪をなすりつけようとしているのでしょうか、ね？　衰退し腐敗した体制にはスケープゴートが必要なのですよ、ねえ？」

「青年、そうあわてないで！　私はただ…」

「おれからみればヴァルター・ネドマンスキーが殺人犯だ！」　彼はこぶしでテーブルをたたいた。

「そう—ほんとうですか？　ヴァルター・ネドマンスキーはあんたを殴り倒したそうですね？」

「なぜそうではないの？　ただ彼が障害者だから？　おれはあいつがすでに箱をいくつももちあげるのを見た。それらの下敷きになればあんたものびてしまったでしょう…また新聞にも、彼にはアリバイがない、とあるじゃないですか—おれが打ちのめされたとき、彼はヴァイトマンズルストの自宅にひとりでいたと主張している」

「いったん『なぜそうではないの？』と尋ねるからには、どうして彼は家にいなかったというのか、その根拠は？」

「なぜいたと？」　ギドは一口さめた紅茶をぐっと飲む。「彼ら、ネドマンズ

キー兄弟は、憎みあっていた。このことは、事情に明るい、みんなが裏づけてくれるだろう。ヴァルターはまったくごく自然に思いつく下手人さ」

「それはまったくなんの意味もない。逆に、互いの敵意がそれほど一般に知られていたということは、だれかがそれを利用した可能性が考えられるだろう」

「理論上はひょっとするとね…ドクター、あんたは要するに状況をおれほどよく知らないのだ」

「じゃあ、二人の対立はいつかこうした悲劇的な結末になるだろう、と見通せたというのだね？」

「それはまあ一見通す…いまではそういえる、たしかに。あとからみれば。だがおれだって結局は予言者じゃない。ただ確信しているだけさ—いま、事件が起こったあと、おれは確信している…」 ギドは顔をゆがめ、手を胃に押しあてた。

「胃炎です！ ちょっと失礼…」 彼はあわただしく部屋をでていった。

私は足の筋肉をほぐすためにたちあがり、書架のまえで立ちどまった。レーニン三巻本が目につく。第一巻をひっぱりだした。ディーツ出版社、ベルリン一九七〇年… 私はぱらぱらめくりはじめる。そのとき一枚の絵葉書が落ちて、ギドの寝いすの下に舞い落ちた。絵葉書を釣りあげるために、ベッドサイドマットのうえにひざまずく…やっとのことで指先がとどいた…絵葉書とともにオレンジ色の観劇券があらわれた。シラー劇、階上席右側、第三列、座席番号十六。右側が引きはがされた、約一年前の券。

ギドはもう三年ほど劇場にっていない、とさきほど話したばかり…おかしい。

券はしおりとして利用されていたのか、中央で折れ曲がっていた。これはひょっとするとパウル・リッターの相続人選び—あの消えた本—にはさまれていたが、ギドがうちのめされたときに、ころがり落ちたのだろうか？ まったくこじつけのようだが、ありえないことではなかった。

私は観劇券を財布にしのばせた。

まもなく三時半。

郵便検査官のように、きまった窓口取扱い時間があればよいのだが！ ところが、夜をむだにつぶしてしまい、あすチーフがいう：ドクター、こりゃどうしよ

うもない—あまりにも長すぎる…いったいこれはいかなるメモ用紙だ？ 妻の手書きかな？ ああ、これに妻はまたもや後世のために疑念を書き残している…

ねえ、この人たちはみんなあなたをこけにしようとしている、と思うわ。私の意見では、すべてがマックス・ネドマンスキーに対するおおがかりな陰謀であり、みんながグルになっている。私がこのような問題に勘が働くことは知っているでしょ。ボルケンハーゲンはあの不可解なマリーア・ネドマンスキーをもう以前から知っている、と私は百パーセント確信している。彼は去年テニスのコーチとして収入を得ていなかったかしら？ ひょっとするとマリーアは彼にレッスンをうけていたのでは？ あなたは一度それを確かめるといいわ！ ボルケンハーゲンはたくさんのお金を使っていることに、あなたももう気づいていたの？ 彼がいま一族郎党からお金をもらっていたら？ だって、彼らはみんなマックス・ネドマンスキーが忽然と消えたことを喜んでいて、そのことはみんなにとって救済なのだから。どうなの？ マックスはまだ死にたくなかったので、みんなはボルケンハーゲンに例の喜劇をまるごと巧みに推し進めることを委任したのよ。運命を正せ！ いまやみんなは互いに罪を負わせ、それですべてが相殺され、残りをラーベに押しつけている。ひょっとするとまた万事がヴァルターの不利になるように進展するかもしれない。—ぜひ一度よく考えてみてちょうだい！

さあね…ことによると緑色をした小さい火星人たち^{xlvi}だったかもしれん！

さて、これはまたいったいなんだ？—実は一ひとつの…失礼：いわゆる英国欧州航空の嘔吐用紙袋だ。私の判読しにくい文字でびっしりなぐり書きしてある。高度二千八百メートルでのささやかな作文練習で、ベルリンへむかう空中回廊でいつか数週間前に一度補足したが、まったく事件の印象に基づいてつくられたのではなく、したがってかなり—まあ、わざとらしい。そうだなあ、完ペきを期すためにみてるか。

シーツ、少しきたない。そのうえにいくつかのしみ：赤ワイン、口紅、灰。平らな寝いすのうえにシーツ。シーツのうえに一本のタバコ、まだ長さ七センチ、そ

の二、三センチはフィルターになっている。ほかの何百万本と同じ、ごくありきたりなタバコ。そのタバコが燃えている。朝三時のこと。外で鳥たちが目をさました。窓は大きく開いている。微風がカーテンをはためかせ、眠っている男の顔をなで、タバコの赤い円錐形えんすいの火をぱっとかがやせる。小さい部屋は暑くて息がつまりそう。ぼろぼろに朽ちた木材は全部、からからに乾き、虫に食われている。木製の壁、木製の天井、木製の床。木の床に赤ワインの空瓶一本。燃えているタバコから二〇センチのところの日焼けした手。若い手。だらりとたれている。シーツの焼けこげた箇所はますます大きくなる。クイックモーションでとる、花のよう。タバコがまるでスタンプのように食いこんでいる内側で、花は黒いが、そのうちに走り抜け、ますます明るくなりながら、さまざまな褐色の陰影が完全に外側で青白い黄緑色にまで達する。灰色のタバコの灰はぼろぼろ落ちて、褐色の花のうえに消えうせる。青灰色の煙がひろがる。一陣の突風。花の中央でシーツがまるくふくらみ、小さな折り目ができる。この折り目の下で空気が平らなクッションにはまりこんでいる。そこでひろがる真っ赤な火がリラ色のシーツに穴をあける。小さなクレーターができる。その縁ふちに織物は微光を発しながらしだいに消えていくとともに、黒い輪を前へ前へと押しやり、さらに異常増殖をかさね、古いマットレスの青金色のカバーに波及する。数十年前にだれかがマットレスに馬の毛をつめていた。明るい、鼻をつくような濃煙がたちのぼる…ベッドの男はいっさいなにも気づいていない。

ローベルト・ボルケンハーゲンはいつものようにぐっすり寝こんでいた。赤ワインで酔っぱらえば、少しも不思議なことではない。

ふむ…こんなことはどうだってよい。ちょうどこちらへひらひら飛んでくる、次の新聞の切抜きと同様、このなかにとどめておこう。朝、私が朝食のテーブルで読んだとき、食べ物のがのどを通らなかつた、ターガスシュピーゲルの記事：

警部さん、わたしがやりました！

ネドマンスキー殺人事件のセンセーショナルな転回

異母兄が自白する

有名な医薬製造業者マックス・ネドマンスキーのなぞめいた殺害事件は解明された。マックス・ネドマンスキーの異母兄にあたる、薬剤師ヴァルター・ネドマンスキー（六十一歳）は、夕刻遅くなって全面的に自供した。供述によれば、殺害の晩、犠牲者の寝室にしのみこみ、そこで同人の遺言状をさがし、破棄しようとした。伝えられていたとおり、マックス・ネドマンスキーはそのまえに心臓発作でたおれ、医者に絶対安静を指示されていた。ヴァルター・ネドマンスキーは、異母弟が問題の遺言状を金庫からとるのを妨害しようとしたため、枕を用いて同人を窒息死させたと認めた。動機は明白である：これまでに発見された遺言状が示すところによれば、ヴァルター・ネドマンスキーは相続から除斥されることになっていた。現行の相続法にしたがえば、彼には遺留分さえ認められなかったであろう。ただし、異母弟の死後に遺言状が見つかっていなければ、貨幣と物件の価値、合計約五百万マルクが彼に割り当てられたであろう。

土曜日の人騒がせな追跡のあと、ヨルク通りで逮捕された臨時雇いのマンフレート・ラーベは、もともと殺人の嫌疑がかけられていたが、刑事警察の見解では、もはやその犯行についてはまったく考慮の対象にならない。ただし、ラーベはバーデンアレーの家宅侵入のかどでひきつづき拘留される。

ああ神様、そう…私はこれを読んだとき、どんな気分だったか、いまも覚えている。ヴァルター・ネドマンスキーの思いがけない拘留を相変わらず私の友人マンハルトのあやまちだと思っていたから、肝をつぶした。ヴァルターがほんとうに遺言状をさがしていたとしても—それはまだなんの証拠にもならない。なぜなら少なくともラーベが同じようにネドマンスキーの寝室であちこちかきまわしてさがしていたのだから。さあ、それがこの自白…ヴァルターは—繊細で、おそらく躁鬱病そううつでもあるので—堪えがたい刑事らの尋問からついに安らぎを得るために、偽りの自白をしたのだろうか？ 法廷では刑事の面前でおこなった自白が過大に評価されないことが確かにときたまある。本人が自白を取り消すこともいぜんとして可能だ。彼ならそれができた…それとも、あらゆる戦術や一時的な考量から離れて、しごく淡々とあきらめてしまったのか？ 自分の運命に身をまかせ、

自分を一生懸命に、苦しめ、抑圧してきた、世間に屈服したのだろうか？ それもありうることだった…無実の罪で有罪判決を受けることによって、おそらく生涯ずっと追求してきた、内面の偉大さを自分自身の前で獲得したいのだろうか？ このタイプにはあらゆることが考えられる…あるいはただ陶酔を存分に味わうために、殺人をほんとうにおかし、強大な（原始型の）〈苦しめる人〉を手ずから抹殺した、と真剣に思いこもうとしているのだろうか？ そうだとすれば、ヴァルターはことによると犯人なのかもしれない…

私はボルケンハーゲンと心に浮かんださまざまな可能性を比較考量するために、なんども図書館に電話して連絡をとろうとしたが、こちらにはいません、と毎回いわれた。いくらか苦労して電話口に呼びだせた、主任警部のマンハルトは、私が新聞で知ったことを確認した。本官にはもはや疑いの余地がない—ヴァルター・ネドマンスキーが犯人であり、ラーベの証言と発見された指紋が自白を全面的に裏づけたという。私はそれらすべてにもかかわらず警部の意見にまったくくみしないことを一瞬もほのめかさず、ギドの家で見つけた観劇券の所有者をつきとめるために、大騒ぎをしないで出発した。私のメモからもうかがえるように、それはいやに簡単だった。

わが容疑者たちのだれが一月三日の夕方に芝居見物に誘われたのか？ 私がギドの寝いすの下に見つけた、オレンジ色の入場券が眼前にあった。

枚挙にいとまがない他の券とも変わらない一枚の観劇券。ベルリン六一番地のシュタンゲで印刷されている。有効期限の切れた券は補償せず。いや、右側の半券がなくなっているのだから、どうやら有効期限は切れていなかったらしい。だれがまさしくこの券を使って一月三日夕刻にシラー劇を見るために入場したのか、いやはや、どのように探りだせばよいのやら？

私はあてもなくあれこれ考えた。どこにもとっかかりがない。ストレスでいらしてきてきた。怒りにとらえられる。カードボックスを机から払いのけた。そのボックスがばかみたいにこちらをじっと見つめていたのだ。

部屋のあちこちに散らばったカードを拾い集めるうちに、いくらか怒りがおさまった。私はウイスキーを一杯飲んだが、オレンジ色の観劇券は沈黙をまもって

いた。マンハルトのところへ行って、頭脳の軽業師たちに考えをまかせるほうがよくないだろうか？

いや、とんでもない。

まだ自分でできる。これから六十分ほど面会謝絶にしてくれ、と女性秘書に言って、私は観劇券を眼前の事務機のうえに置き、肘をつき、額を両手のなかのせて、券を見つめた。五分がすぎ、十分がすぎた。

とそのとき、やっとわかった！

つまり、観劇券は左側の半券に上から下にはしる約五ミリ幅の線条があり、この線条は、紙に規則正しく並べられた凹凸でできている—いわば洗濯板のような刻印といえるかもしれない。したがって、当券はベルリンの自由民衆舞台^{xlviii}によって発売されたものだと推論できる！ 私は平手で額をうった。以前に一度自分自身が会員だったので、もっと早く思いつくこともできたはずなのに！ ベルリンでは、私の知るかぎり、次のような手続きが義務づけられていた：自由民衆舞台の正会員は年に十回の公演にでかけなければならない。そのさい上演の劇場と期日は、定期的に送付されてくる報告書の帯封^{おびふう}に記載してそのつど知らされた。さらに、上演のしばらく前に当該受領所—たいていはタバコ店—をおとずれ、そこで会費納入のうえ割り当てられた公演の招待券を受け取らなければならなかった。この招待券を使って、会員は次に劇場のロビーに置かれているいくつかの回転式抽選器から自分の観劇券ないし二・三枚のつながっている観劇券を引くことができ、したがって第一列からほぼ最終列までの座席を手に入れるチャンスがあった。さて、こうした福引方式を公平に運用するために、観劇券は中央部がぎゅっとはさまれ、特殊なペンチを使って端がつなぎ合わされていた—印刷面はもちろん内側にしてある。自由民衆舞台の職員は、会員が引くたびに、そのあと観劇券をふたたびばらばらにした。

こうして、事務机にあるオレンジ色の観劇券は、自由民衆舞台の在庫品に由来するものと確信することができた。

あとはずいぶん簡単であった。私は券をもち、大きい一箱の高級チョコレート菓子を買って、自由民衆舞台の管理室へ車ででかけていった。甘いものにつられて穏やかな気分になったのか、かわいい女性の係員は、しかるべき調査をしてほ

しいといった願いを受け入れてくれる。氏名：ヴァルター・ネドマンスキー、ローベルト・ボルケンハーゲン、ディーター・ドライアー、ギド・ヴィンクラー、マリーア・ネドマンスキー、マックス・ネドマンスキー、ならびにそれぞれの住所を書いたメモ用紙を彼女に手渡した。

「この人たちのだれかが一月三日夕方のシラー劇の規定公演に割り当てられていたかどうか、すぐに一度お調べいただけないでしょうか？」

「しばらく時間がかかるでしょうね」、彼女はさほど気乗りがしないようにいった。「まあいいでしょう…」 プラリーネ^{xlix}に視線をはしらせて：「別にかまわないわ」 彼女はそうやってすでにカードボックスのほうへ歩きかけたが、再度とまった。「でも、観劇券を贈る人たちも多いですよ」、と注意を喚起した。

「でもお嬢さん—私は、そのリストに書いてある名前があなたの索引カードにも記載されているかどうか、知りたいだけなのです」

「この人たちはそれでもプレゼントされた券で劇場にはいったかもしれませんか—あるいは会員から買い取った券で…」

私はうめいた。「もちろん！ 拾った可能性もあります。自分で印刷する人はいないでしょうから！」

「ただ申し上げたいのは…」

「…成功する見込みが薄いってこと—承知しています！」

「わたしたちの家では両親が会員ですが、二人はいつも私に婚約者といかせます」

「私は婚約者がうらやましい、とどうか彼氏にお伝えください」

彼女は顔を赤らめて仕事にとりかかった。

四時をまわった…ふう！ さあすぐつづけよう：ボルケンハーゲンが記述した、最後の数枚。

丸窓を通過して赤っぽくかすかに光る。鼻をつくような煙が小さい船室に侵入する。通路を炎がかけめぐる。船が火の玉だ。彼は丸窓をひきあげる。やれやれ—空気だ！ ふたたび息ができる。眼下に救いの水。頭と左肩をせまい透き間に無理や

り押しこむ—やがて身動きがとれなくなる。死の不安にかられていかにあがこうと、脱出できない。煙でいまにも窒息死しそうになる。炎がなめてくる。彼は叫びに叫ぶ…

マルティーナが彼におおいかぶさり、起こして、キスをした。「いいわね、ローベルト—もう大丈夫よ！ あんたはわたしの家にいるの—ここは燃えてないわ」

「ありがとう、ティーニ、ありがとう…マルティーナの浮浪者収容施設ならきつとがまんでできる」 ボルケンハーゲンはいくつを、ふたたびせきこまずにはいられなかった、それから：「きみはいったいどこからきたの？」

「かまわなければ、昼休みにさせてもらおうわ」

「なんだって—もうそんなになるの？」

「ちょうど一時よ！」

「ひえー、じゃあぼくは五時間眠っていたのか！」

「そうよ。さあ、さっさと浴室にはいりなさい！」 彼女は彼をひっぱりあげ、シャワーの下へ押しやった。

やがて生暖かい湯が体をはしると、ボルケンハーゲンはもう一度あの最後の数時間を体験した。オリンピック橋のたもとで炎上するあずま屋。朝三時。隣人が戸外へひっぱりだしてくれたとき、もう半ば窒息死していた。親切なヴァルデマル、かすかな水疱すいほうのある年配の男であった。だれかが消防を呼ぶ。やっと消防隊が到着すると、もはやあずま屋はあまり残っていない。それでも消防隊長はまだ出火原因をつきとめることができる：火のついたタバコ。大きな疑問：自分が火のついたタバコを手にしたまま眠りこんだのか、それとも、だれかが火のついたタバコを外からベッドに投げこんだのか？ 親切なヴァルデマルは、三時少し前にあやしげな物音を聞いた、と主張する。刑事警察が捜査する—いったいなにを捜査するつもりか？ ボルケンハーゲンはそのあとさっさとティーナの家へ乗りつけた。彼女はちょうど事務所にいこうとしていたところで、彼にすぐ自分のベッドをゆずった。

いまティーナが尋ねる：「もうそろそろ終わった？ 私はすぐまた事務所へいかなければならないの」

ボルケンハーゲンは浴室からでた。生きかえったような気がした。部屋にはいると、肌にぴったり張りついた、透かし編みのショートパンツと、白いブラジャーをしたティーナが見えた。

「ちょっと待って—いま着替えているところ…」

ボルケンハーゲンは状況を存分に利用しようとしたが、ティーナはまったくとりあわなかった。

「やめて！ もう一度事務所へいかなければならないといったでしょ…いまでは、二人のネドマンスキーがもういないもので、みんなが私のところへ駆けつけてくるのよ」

ボルケンハーゲンはティーナをはなし、ベッドにすわった。「まあいいよ—なんのканのいっても、ネドマンスキーの破産強姦犯にはなりたくない！」

「聞き分けのよいこと…^{エッセン}食べものは冷蔵庫にあるわ…」

「エッセンはノルトライン＝ヴェストファーレン州にあると思うが？」

「…ビールも—ねえ、今日はどうやら機知にとんだ日のようね？ まあ、どうでもいいけど。私はまたでかけないといけない。運転手が待っている。じゃあ、またあとで！」 彼女は戸口から走りだした。

ボルケンハーゲンは窓辺に歩みより、黒い会社のメルツェーデス＝ベンツに乗って彼女が走り去る様子を眺めた。ため息をつきながら服をきて、さっと一口食べたあと、刑事警察に電話をかけた。しかし、まだなにもわかっていなかった—試験室での分析がまだ完了していないとのこと。次に、有力な指導者と連絡をとろうとするが、グラフ雑誌編集部の女性秘書は、ドクターは不在ですとしか断言できなかった。

新たなせきの発作におそわれた—はじめに考えたよりも、ボルケンハーゲンは大量の煙を吸っていたのだろう—。ハンカチをズボンのポケットから取りだすと、小さな白いメモ用紙が床に舞い落ちた。紙片を拾いあげ、^{かなくぎ}金釘流の字で自分の書いた文章を発見した：…あなたは専門家だ、シューマンさん、絵の件は大きな話になるかもしれない…これはおそらく昨夜眠りこむ直前になぐり書きしたもの
にちがいない。さほど正確にはもう思いだせないが—あの赤ワイン！—あれがまさに存在した唯一の可能性だったのかもしれない。背広を身につけたままベッド

にはいったおかげで、背広とメモが救われた。ティーナは風をとおすためにバルコニーにかなりかけておいてくれたが、生地は相変わらず^{きじ}焼け焦げた寝具の不快感な臭いがした。だが、ほかに方策がなかった一彼のがらくたは一切合財焼失してしまったのだから。洗濯物、書物、ラジオ—泣きたいくらいだ。疎遠になっている父の軍門にくだる屈服の旅しか自分には残されていなかった。

ボルケンハーゲンはこちらの考えをうまく押しつけ、もっと手近なこと、マックス・ネドマンスキーに集中した。ドライアーの家で突然ふたたび思い出した、例の場面を意識に呼びよせた。はじめは不鮮明でぼやけていたが、いまやまたも事細かにすぐ目の前に見える。人びとはあれこれ話し、ボルケンハーゲンを不審がらせるほど、ひどく粗末なブランデーをがぶがぶ飲んでいる。それというのもネドマンスキー家ではもう少し高級なものが出されると期待していたから。ネドマンスキーがもったいぶった、かなりあいまいな独白をはじめ。ボルケンハーゲンは退屈して、立ちあがり、子音にてこずりながら、許しをこい、トイレに行く。自分がふらついていることに気づく。戸外で長いあいだ頭を冷たい噴水にあて、気分が少しよくなる。みんなが食べていた部屋へもどり、ネドマンスキーの書斎のそばを通りかかる。ドアがきっちりしまっていない。ネドマンスキーは電話をかけているが、少しろれつがまわらず、ボルケンハーゲンはやっと一文だけ聞きとれた：あなたは専門家だ、シューマンさん、絵の件は大きな話になるかもしれないよ…ボルケンハーゲンは立ち聞きしたい衝動に逆らう—ネドマンスキーの闇商売あるいはそれに近いものにお前はまたどんな関係があるのか？ ボルケンハーゲンは安楽いすにすわって、ネドマンスキーを待ち、ネドマンスキーもまもなくもどってくる。明らかに、ボルケンハーゲの記憶が正しければ、少し感情を害して…

うん、そうだったにちがいない。

ボルケンハーゲンは思わずうなずいた。昨日ドライアーの家でこの挿話のような出来事の記憶がまたもや不意に浮かんだ—もしかすると、いろんな絵が話題になり、二人が似た粗末なブランデーをしたたか飲んだことから、それが連想の引き金になったのかもしれない。

たとえどうであれ、ドライアーはさまざまな絵をもっていたし、ネドマンスキ

一と関係があった。ネドマンスキーは真夜中にシューマン氏という男と絵のことで電話をしていた…ここになんらかのつながりがあったのかな？

ボルケンハーゲンはためらった。全体がほとんどありそうにもないように思える。だが、可能な手がかりを度外視する余裕などあるだろうか？ ためしてみる価値はあることだと思った。ティーナの白い電話機にあゆみより、マリーア・ネドマンスキーに電話をかけた。

「はい、もしもし…？」　ねこなで声。マリーア自身が電話にでた。

「お邪魔してすみません、奥さん。こちらはローベルト・ボルケンハーゲンです」

「なにごとですか、ドクター・ハルトマンさん？」　その声は冷ややかで、人をみくだしたような響きがあった。

彼は後頭部をかき、顔をしかめた。「ご存知ですね、グラフ雑誌の編集部がぼくを保安官助手にしたことを…」

「ええ、知っています」

「では—もしよろしければ—二点お尋ねしたいのですが…」

「いいですよ」

「ご主人はひょっとして美術商にお知り合いがありましたか？」

「まったく知らないわ」

「残念。でももしかしてご主人の知人仲間にシューマンという男の方がおられますか？」

「さあね、知らないわ」

「三つ目の質問もしてもよろしいでしょうか？」

「どうぞ」

「ご主人は芸術とか、画家とか、絵画などにかかわっておられましたか？」

「ええ、折にふれて。概して画家というよりはおそらくそのモデルたちに…でも絵画にも興味をもっていた。私たちのいまの家が売りにでていた当時、物件の情報を主人がもらったのも絵画仲間だったと思うけど—正確なことは知りません。そのころ主人はまだ最初の奥さんといたので…いずれにせよ家はシーアバウム教授という人のものでした。教授はここに画廊のようなものをもっていた。か

なり大規模なコレクションを所有していたそうよ。なんとなく教授はその後ナチ
党员のもとで意見が違ったのでしょ—コレクションは党员が差し押さえたの
だと思いますが、教授はどうやら強制収用所で亡くなっらしい。マックスはそ
のあと家を買った…マックス・ネドマンスキーと芸術の話題はここまで。まだシ
ーアバウムの所有していた時代から地下室のどこかにねむっている、がらくたの
ことなど主人は一度も気にかけていなかった…こういったすべてのことがいつ
たいあの…あの殺人とどんなかかわりがあるのか、いってちょうだい」

「おそらくまったく無関係です、奥さん。ただなんとなく一裏^{バックグラウンド}の事情が知りたくて」

「わかりました…でも、たえず最新の情報を知らせてくれますね？」

「もちろんです、奥さん。どうもありがとうございました！」

彼は受話器を置く。結局なにひとつ得るものはなかった。ティーナのホームバ
ーへ移動し、ウイスキー、ネドマンスキーが残しておいたウイスキーで元気をつ
けた。ナイトテーブルに半分はいったネド薬一箱があった。白い錠剤を二粒飲み
こむ。調子が悪いときは、ネド薬をどうぞ…急に具合が悪くなった。

「おい、こいつは役に立たない、やれやれ！」 彼はおのれにむかって大声で
叫んだ。「おまえは頭がおかしいぞ！」 それから職業別電話帳をさがし、ペー
ジをめくりはじめた。ところが、どうやらベルリンじゅうに、シューマンSchumann
—またはhのあるシューマンSchuhmann—という名前で絵画とかかわりのある者
はいないらしい。古美術商でも見つけられなかった。電話帳には、シューマンと
いう名前でおおよそ二百人が掲載されているが、hのあるシューマンはかなり珍
しい。あの老いた道化はカックシュタインさんとかボゼツケさんとかにも電話を
かけられなかったとすれば—そのような名前ならきっとさほど多くなかったは
ずなのに…ひどい芝居だ。

ボルケンハーゲンにhのあるシューマンからはじめ、ひきつづきhのないシュ
ーマンを次から次へと、つねに順番どおりに電話をかけた。毎回同じ文句を単調
にくりかえした：もしかしてお宅は美術商でしょうか？ もしやマックス・ネド
マンスキーという人をご存知ありませんか？ ご存知ない？ どうも失礼しま
した…女性が電話にでると、もしもし、シューマンさん、ご主人をお願いできる

でしょうか？ 主人がいて、在宅なら、最初の文句は適当に変形した。とてつもなく単調なゲームだった。十人の不機嫌な通話の相手に対して、気のきいた者はわずか一人しかあらわれなかった。ただ、だれも美術の専門家や業者はおらず、ネドマンスキーを—新聞から以外で—知る者もなかった。

一時間半あまりに五十回電話して、さじを投げようとした。あまりにもばかばかして。でも思いなおし、努めてつづけることにした。

すると幸運に恵まれた。八十九回目の通話は当たりにあつた。美術商ヘンリー・シューマン（hのない）の受付が電話口にでた。

「ちょっとお待ちください、シューマンはいまパリから帰ったばかりです…」

シューマンは、なんらかの理由から故意に職業を申告しないで電話帳に登載し、またかなり長いあいだセーヌのほとりですごしていたため、バーデンアレーの殺人についてまったく知らなかったことがわかった。先方はひどく驚いた。

「マックスは私のよい知人でした！ いつも陽気で、いつも活力にあふれていた—それなのに！ まだ皆目のみこめない！」

「最後に故人と話されたのはいつですか？」

「だから、それは…」 シューマンは考えた。「少し前…あなたがいま話してくれたところによれば、殺人の直前であつたにちがいない。マックスは真夜中に電話をかけてきた…」

「それで？ 彼はなにを、真夜中に？」

シューマンは笑う。「彼は一杯機嫌で、私をちょっとからかったのです」

「どうして？」

「私にすぐにちょっと家に立ち寄ってほしい、といった—真正のゴッホが地下室にあつたとか…なんとも楽しいでしょう？ でも、まさしくこのような人物でした。真正のマックス・ネドマンスキーは！」

ボルケンハーゲンはやっとの思いで平静をよそおい、なんとか作り笑いをした。「ああ、つまりそういうことですか！ それはまあ—少しぐらいの冗談はあってもいいでしょうね、あの…」 あの死体には、といおうとしたが、かろうじて言葉を飲みこむことができた。あわててボルケンハーゲンはつづけた：「ちょうど運よくあなたと電話中なので、シューマンさん—このごろでもまだときおり、どこ

かで貴重な絵があらわれることが起こるのですか？」

シューマンは気さくにこたえる。「もちろんですとも！」　シューマンは明らかにエルザスの住民で、アレマン方言の、ややフラン語なまりのアクセントで話した。「あるイギリスの理容師が近ごろ古道具屋で一枚の絵に七マルク支払ったが、あとで真正のゴヤとわかった一五〇万マルクの値打もの。ロンドンの人が自宅の屋根裏で見つけた、一枚のティントレット¹の絵も、同じくらいのお金になった」

「それは大金ですねえ！」

「そういえるでしょうなあ…ちなみにヴァン・ゴッホ——一八八六年に花を描いたゴッホの静物画がこのあいだもサザビーⁱⁱで、ほんとの話、九万ポンドの値をつけた—だから私の友人マックスがもし投資するためにちゃんとしたものをもっていたとしたら！」

「たしかに…」　ボルケンハーゲンは、知りたかったことが、いまわかった。「心から感謝します、シューマンさん！」

「いや、どういたしまして！」

ボルケンハーゲンは受話器を置いた。さらに、短いラブレターをマルティーナあてにさっと書いてから、バーデンアレーへ車をとばした。マルティーナのことはさておき—ネドマンスキーのかわいい侍女イーナの面倒を少しみておいたことが、とてもよかった…いかなるチャンスをも見逃してはいけない。

呼び鈴を鳴らすと、イーナが玄関口にあらわれ、まるで郷土映画で見るようにひざ膝をかがめてお辞儀じぎをし、わざとらしく舌たらずにいう。「奥様は残念ながらお出かけで…」

「いえ、かまいません。ただ石炭貯蔵用地下室の古いがらくたを一度見たいだけです」

「石炭…廃品回収業者になったの？」

「とりわけ涙にぬれたエプロンを集めているのよ」

「ばか…家にいっぱい職人がいなければ、まったく入れてあげないところよ」

「よく中に通してくれたね！」

「あきらめたの。あんたの場合は簡単に探り当てられいわ、なにが望みか、な

ぜそれを望むのか…いらっしゃい！」

「じゃあ、きみに関するかぎり、ぼくの意図は完全にお見通しなのだ！」

イーナは忍び笑いをし、男を期待にみちて地下室へ案内したが、ボルケンハーゲンにはマルティナーのことが頭にあり、そのうえ隣室で配管工が騒音をたてていた。イーナは幻滅してそこから立ち去った。

次の時間は考古学者としてすごした。砂塵^{さじん}にうずくまって、ボルケンハーゲンは、何十年か昔のがらくたをひっかきまわした。そこには古い乳母車、そり、クリスマスロウソク、スケート靴と模型の鉄橋、古いいす、テーブル、ひとつの飾り戸棚、呼び鈴のひも、ソファの外装と漬物なべ各一個、散歩用ステッキ、日傘、靴脱ぎ台、ヘアアイロン、ゲートル、吸入器一個、痰^{たん}つぼ一個に、ラーンズドルフ近郊のミュゲル湖とトレプトの卵小屋を描いている、下手な水彩画二枚一だが、ほんのわずかでもヴァン・ゴッホの作品かと疑わせるような絵は全然なかった。

それでもボルケンハーゲンは、階上でイーナにほこりをブラシで払ってもらったとき、上機嫌であった。手がかりは有望だ。なにをすべきかわかった。

ここまではボルケンハーゲン自身が書いたもの。彼は次の場面でも登場するが、そこは私が描いている。さしあたり起こったことを、彼は私に話した。

ドライアー、ベルリン＝ヴィテナウ、テセノ通り一〇二ーボルケンハーゲンは新しい住所を古い富くじ券の上に書きとめていた。市街地図をのぞく—それからボルケンハーゲンはワインレッドのR四で出発した。その後まもなく一午後五時直前だった—ディーター（「ディーターレ」）・ドライアーに相続分として割り当てられた、一世帯用住宅のまえにとまる。二つの切妻と赤い瓦^{かわら}屋根からなる白い石灰塗料を塗ったさいころ形の建物は、正面に記されているところによれば、西暦一九二九年に建てられたものだが、手入れがゆきとどいている。木のさくにはすでに新しい表札：ディーター・ドライアー。ボルケンハーゲンは呼び鈴を鳴らした。

十秒、十五秒がすぎて、ドライアーが戸をあけた。彼はしゃれたベージュ色の

背広を着ていた。「ああ」 その声はとっととうせろ！というふう聞こえた。

「おや—そんなにめかして？」、とボルケンハーゲンは尋ねた。「写真でもとってもらおうの？」

「ちょうど町から帰ったばかり」

「お邪魔じゃないですか？」

「まあ…いや」

「いちど模写を見せてくれる、といいましたねえ—つまり、あんたのおじいさまの模写を…」

「ええ」

「それで—このこのこやってきたが…あるいはもうだれかが絵画コレクションを全部買い取ってしまいましたか？」

「いえ、いえ」 ドライアーは頭をふった。

「それというのも新しいコレクションを買う必要があるのですよ—ぼくのあずまやが、いっさいの印刷物もろとも、焼失したので」

「焼失した？」

「焼失しちゃった」、ボルケンハーゲンは陽気に確認した。

「焼失した、そう…じゃあ、ちょっと見まわしてください。みんな上のアトリエにある」 ドライアーは訪問を受け入れたらしい。

彼はボルケンハーゲンを家に入れ、最上階へ通じる、急な螺旋階段らせんに案内した。薄暗い玄関の間にはシカの角、撃ち砕かれた王の円板、それに古い地図がかかっていた。ボルケンハーゲンの頭髪はくせいが剥製のはくせい一羽のノスリに軽くふれた。ドライアーはすぐあとについてくる。

二人が広い屋根裏にあがると、そこは三個の大きい天窓と、広く全体にガラスをはめた奥の切妻のおかげで、重宝なアトリエに変身していた。古い画架が一基そこに立っていた。画筆、チューブ、パレットが散乱し、すべてが少しかびっていた。それに絵。おびただしい絵。キャンバスはさまざまな技巧と手法で油絵の具が塗られ、多くはくさびつき画枠に張られ、いくつかは額縁に入れてある。テルペンチンとワニスのおいがした。

「ほとんどが模写です。でも、ベルリンの画家たちの原画もあります。かつては祖父の友達でしたが—ほとんどが今ではもうだれも知らない」

ボルケンハーゲンは最初の絵、G・ブライトバールトという画家のハーフェル川^{lii}の風景画を右の膝^{ひざ}にもたせかけ、ゆっくりと次の絵を順々に前へ倒していった。

ドライアーはいすからファイルをとって開けた。「祖父はきわめて些事^{きじ}に拘泥^{こうでい}する人でした。すべに番号をつけ、画家と画題をここに書きとめてある…ほとんどの模写は祖父自身が制作している」

「三十七番？」

ドライアーはちょっとさがした。「ここ：クロード・モネ^{liii}、…のテラス—読めない。一九六七年ニューヨーク、メトロポリタン美術館でみずから模写」　ドライアーはすべてを記載されているままに述べた。

「これはなかなか気に入った。そしてこれ—二十二番は？」

「ちょっと待って…ココシュカ^{liiv}、婦人肖像画、一九六五年テートギャラリー、ロンドン、模写…じいさんは頭がどうかしていたのですよね？　くだらないものを模写するために、世界じゅうをあちこち旅してまわったが、クリスマスに一台の自転車もぼくにプレゼントしてくれなかった…ちょっと失礼ですが、いったいいくらくらいお金を出すおつもりですか？」

「さあ、二・三百マルクぐらいかな」

ドライアーは相手を不信そうにじろじろ見た。「そんなにたくさん？」

「えーえー。グラビア雑誌からまあまあもらっているのでねえ」

「ああそうですか、なるほど…じゃあ、もう少しさがせますね」

ボルケンハーゲンはさらにさがした。すでに見た絵をわきへ置けば、次々と山積みになった絵が見つかる。ドガの扇子をもつ二人の踊り子、セザンヌの花束、ゴーガンの南洋の情景を描いたマオリの女と犬、ルノアールの子供の肖像画。^{へきがん}壁龕に少し隠れていた、ノルデ^{lv}の変形を偶然に見つけた。どうやら本物の絵のモチーフや断片を組み合わせたものらしい、一枚の絵であった。さらに同じところに、できの悪いヴァン・ゴッホの模写が一枚—ドライアーの情報によると郵便配達人ルリンの作だとか—、ルノアールの芸術の橋の模写—ドライアーの祖父の作ではないが、絶対にルノアールの作品でもない—など、ほかにもいろんなものがあつた。ドライアーはピカソ、シャガール^{lvi}、レンブラント^{lvii}、フランス・ハルス^{lviii}、フェルディナント・ボルス、ワトー^{lix}、リーバーマン^{lx}、メンツェル^{lxi}のような名前をあげた—熱心な祖父は、手にはいったものを、ほんとうにことごとく模写していた。

「まだ一枚も見つからない？」と尋ねて、ドライアーは時計を見た。

ボルケンハーゲンは肩をすくめる。「多けりや多いで選ぶに苦労！」

やがてボルケンハーゲンは、構成と筆跡からみてひとりの画家、ヴィンセント・ヴァン・ゴッホの作品としか考えられない、一枚の絵にぶつかった。まさしく、絵の上部左隅にかなり鮮明にヴィンセントという署名が認められた。油絵の具を塗ったキャンバスは、粗いくさびつき画枠に張られ、おおよそ五十センチ四方ぐらいであった。富士山、雪にうずまる村、満開の桜の木と色あざやかな着物をきた背の高い婦人を描いている、一連の継ぎ目なしにつながあわされた日本の木版画の前に、少女のほそい頭、ほとんどヒスイ色の顔、真っ黒な髪にトウモロコシのように黄色いブラウスが見えた。

ボルケンハーゲンはこの絵を床から高くもちあげ、注意深く観察したあと、五メートルばかり離れて眺めようと、用心深く画架にかけた。ドライアーは階段のきわに立ち、フィルターのないタバコをすっていた。

数秒間の完全な静寂のあと、ボルケンハーゲンは突然叫んだ：「気にいった！これをもらう」

ドライアーはタバコの火をもみ消した。「それはまずい…その絵はどれほど値打ちがあるのか、さっぱりわからないので。こちらが電話しておいた美術商が、や

っと今晚きます」

「そんなばかな！ 二百マルクを頭金として支払う。残金はあとで受け取ることにしてください」

ドライアーは右手親指の先端をかむ。「すでにここに来た、ぼくの友人に、それをほしがっているやつがいるのだ」

「ああ、いまになってそれはないでしょう！ 思い切って決断してください—先んずれば…」

「ほんとうは…つまり、ぼく自身がぜひ手もとにおいておきたい…ここには、ずっとよい模写が、ほかにもあるのだから。どうかこの橋…ええと…ええと…」

「ルノアール？」

「そう、ルノアールの。これを三百マルクで譲ります…」

「実はねえ、ぼくはルノアールに文句がある。ヴァン・ゴッホのほうが好きだ」

「そうですか、でも…だめ。それは手放しません！」

「どうでしょう…たとえば、五百マルク。半金はきょう、残りはあした。ぼくはすぐ編集部でかけ、残りの金をもらってくる…ほら—いい申し出でしょう？」

「残念です」 ドライアーは首をふった。「どうにもなりません」

ボルケンハーゲンが財布をとりだし、百マルク紙幣二枚と五十マルク紙幣一枚をさがしだした。それで扇子のようにあおぎ、すばやい動作で紙幣を小さい棚のうえにおいた。それから絵を画架からはずし、小脇^{こわき}にはさんだ。

「へい…！」 ドライアーは少し脚をひろげてボルケンハーゲンのまえに立ちはだかった：「そいつを置いておけ！」

「さあ—ちょっとわきにどけ！」 ボルケンハーゲンは相手を左腕でわきへ押しつけた。ボルケンハーゲンはドライアーよりも頭ひとつ大きく、スリムだが、三十ポンド^{lxi}ほど重そうだ。

ドライアーは道をあけた。

「それじゃまあ！」 ボルケンハーゲンはにやりと笑った。慎重にバランスをとりながら、急な階段をおりていく。「ここじゃどこで通りにでるのだ？」

「ここじゃもう全然でられない」

ボルケンハーゲンは驚いてふりむく。

ドライアーは突然ピストルを手にしていた。「とまれ！」

ボルケンハーゲンは一瞬、首がまわらないショーウイダーのマネキン人形に似ていた。顔にはうつろな笑みがはりついていて、が、やっと目をほそめた。「ははあ…」　ボルケンハーゲンはひきずるようにいった。

「なんだ—ははあ、とは？」　ドライアーがたずねる。

銃口からボルケンハーゲンのズボンのウエストバンドまであるいは百八十センチあったかもしれない。

「絵は本物なのだな？」

「あたり！」　ドライアーはにやりとした。

「それでつまり…」

「それでなんだ？」

「それでネドマンスキーは死ぬはめになった」

「なぜ？」

「このくさびつき画枠の裏側に—」ボルケンハーゲンは絵をゆっくり回転させた—「小さい刻印があり、かろうじて見分けられる：シーアバウム教授コレクション」

「それで？」

「この教授は、ネドマンスキーのまえにバーデンアレーの邸宅に住んでいた男だ。教授はナチ党員に逮捕された、かなり突然に。かろうじて一番貴重な絵を地下室に隠すだけの時間がとれた。それからほぼ三十年近くそこにうずもれていたが、ついにネドマンスキーは古い石炭貯蔵用地下室を片づける気になった。心にやましいところがあって—きつと少々違法に家屋敷を手に入れたために—それまで近寄る勇気がなかった…そうです、ね？」

ドライアーは背広のサイドポケットにハッカ入りドロップを見つけ、口にいった。「あんたは透視者か？」

「いや、いくらか知性のある男にすぎない」　ボルケンハーゲンは軸足を変えた。「ちょっとピストルをしまってくんない？」　ボルケンハーゲンは突然ベルリンなまりで話した。

「用心するに越したことはない」

「そりゃたしかに…老ネドマンスキー氏を殺したときも、そう考えたのだろう、な？」

「老…だれが—おれが？ おい、頭がおかしいぜ！ あのヴァルターは、まったく下手人でもなくせに、自白したと考えているの？」

「うん、そう考えておる」

「その絵はたいしてきみの役にたつまい！」 ドライアーは大声で笑いだした。

「きみにもその絵はたいして役にたたないぞ」、ボルケンハーゲンはいいかえした。

「刻印はおれがとりのぞく…」

「それでも警察へ出向き、きみのヴァン・ゴッホの由来を話してやる！」

「貴様にもうそんな機会はないだろうね…」 ドライアーは左腕で浴室のドアの取っ手につかまった。

「きみがネドマンスキーを殺したって認めろ」

「おれはやってない！ おい、おれにはまるで殺す動機もなかった！」

ボルケンハーゲンは左の^{まゆ}眉をつりあげた。「ネドマンスキーはきみにもしかしてその絵をプレゼントしたのか、え？」

「そのとおり！」 ドライアーはにやりと笑った。

「とんでもない…ネドマンスキーは芸術について多少とも知識があった。だからすぐに気づいたにちがいない…」 ボルケンハーゲンは息をのんだ。「ああそうか！」 急にボルケンハーゲンの顔がふたたび晴れやかな表情になった。「あたりまえだよ、おい、ぼくが即座に思いつかなかったのは！」

ドライアーの右まぶたがけいれんしはじめた。「なにを思いつかなかった？」
ドライアーの声はよわよわしく聞こえた。

「絵が模写だということ！ それとも贋^{がんさく}作かな…そのことにネドマンスキーはすぐ気づいた—だからこそきみにそのこけおどしの大作を贈ったのだ」

「そうじゃないんだ！ 本物だよ…おれはつまり鑑定書も見つけた、さあ忘れないでくれ！」

「それでネドマンスキーは—」 ボルケンハーゲンの両眼がかっと開いた—
「おやじさんは鑑定書のことをなにも知らなかったのか？」

「少しも知らなかった」

「絵はネドマンスキーの相続人のもの…あるいは、あのシーアバウムに相続人がいたら、その人たちのもの—私の知ったことか。いずれにせよ、きみのものじゃない！」

「たわごとをほざくな！」

「たわごとじゃない。きみは鑑定書を不当に渡さなかったか、または盗んだことで、絵までも盗んでしまった…ぼくが法律にいささか心得があることを忘れるな！」

「鑑定書のことはいずれも知らないよ」

「ぼくが知っている！」

「それはもうあんたの役にはたたないぜ、わかった?!」 ドライアーはころがっている卓球のボールをけて地下室のドアにぶつけた。「真正のヴァン・ゴッホは少なくとも五十万マルクの値打ちがある—少なくとも！ これはおれのものだ」

「絵はまだこちらの手にあるぞ」、とボルケンハーゲンはいった。

「むこうの^{げた}下駄箱の上に置け、さもないと撃ち殺すぞ！」

ボルケンハーゲンはその場から動かなかった。「この殺人はサツが必ず間違いなくあばく—そうなる^とまるっきりなにも手にはいらないぞ」

ドライアーはかすれた笑い声をたてた。「貴様ときたらなになし！」

一気にボルケンハーゲンは絵をもちあげ、体が隠れるようにした。「銃弾で穴のあいた、ヴァン・ゴッホの絵をどう売るつもりかな？」

「貴様の好みは…」 銃口が上に移動する。「貴様の好みは頭部銃創だな？」

ボルケンハーゲンは絵を回転させ、斜めに立てて、上の角が顔の前にくるようにした。いまや右目でしかドライアーが見えなかった。「では、みごとに命中させたまえ…そもそも射撃の腕はたしかか？」

ドライアーはためらった。

「おい、まあよく考えるのだな！」 ボルケンハーゲンは訴えるようにいった。「きみがぼくを殺せば、サツはきみのしりに食いついて離れないぞ！ そうして絵を発見しようものなら、弾痕のあるなしにかかわらず…なあ、やつらもとんま

じゃないぜ！ さらに、やつらはネドマンスキーのことまでもきみに押しつける一きみがやったかどうかなど関係なしに！」

「なにがしたいのか、さっぱりわからん—ヴァルターはとっくに自白しているのだ…」

「ところがヴァルターはホンボシじゃない！ 自白もまた取り消すだろう…」
二人はじっと見つめあった。外ではモペットが一台轟音を立てて通りすぎる、そのあと、ふたたび静かになった。ただ大きな箱型時計がゆっくり時をきざんでいる。ボルケンハーゲン汗をかいた。

ついにドライアーはピストルを下げた。「貴様はどうしたい？」

「山分けにしよう」

「なんだって？」

「山分け。半々だ」

「貴様はそう…頭が少々変だ、そうだよ！」

「もっとよい手を知っているのか？」

「もちろん…」 ドライアーは片目をつぶる：「八分と二分でどうだ？」

「六分四分」

「じゃあ、よし：七・三だ…ただし、絵はここに置いておく—いいか？ ここがいちばん安全だ、さまざまな馬鹿でかい絵には含まれているから」

「七・三、了解…」 ボルケンハーゲンは黒っぽく着色された下駄箱のうえに絵を置いた。「さあ、どうぞ—ぼくらは意見が一致すると思っていたよ！」 こちらがどんなに震えているか気づかないでくれ、とボルケンハーゲンは念じた。

「これはだ…要するに、これは元来まぎれもない恐喝だ！」

「それがどうした？ 金はぼくら二人にとってじゅうぶんあるじゃないか」

「そりゃそうだが…」

「頼む、嘆かないでくれ。あやまちをおかさなかったことを喜べ、取り返しのつかない…」 ボルケンハーゲンは話を中断した。

その瞬間に呼び鈴が鳴る。

「くそっ！」 ドライアーは激しい口調でささやいた。

「しっ…」

ふたたび呼び鈴がやかましい音をたてた。

ボルケンハーゲンはにやりと笑う。「もしかするときみの美術商…」

「あいつなら出直してくるさ…」

だれかが外からこぶしでドアをたたいた。「おい、ドライバー—あけてくれ！ボルケンハーゲンがお宅にいることはわかっている。彼の車が戸外にとまっておる…」

「あのドクターだ！ くそっ！」　ボルケンハーゲンは地団駄をふんだ。

ドライバーはピストルをもちあげた。「八百長だな、おい豚野郎！」　ドライバーの顔はゆがんでいた。

「ばかばかしい！　ぼくは彼となにもない…」

「わしらが入れてやらなければ、あいつはもしかしたら大騒ぎをするかもしれない」、とドライバーはいう。

「じゃあ入れてやれよ！」

「おれが？　いや。おまえがやるのだ…だが、ばかなことはするな！」

「ぼくがいこう…」　ボルケンハーゲンは玄関口へいき、ドアをあけた。「ほんとに劇的な登場の才がおありですねえ、ドクター！」

私が最初に見たものは、ピストルだった。

「さあ、おはいりください！」　ドライバーがうなるようにいった。

ゆるく張られた救命幕のうえを急に走らなければならないように、私はよろめきながら玄関の間へはいった。背後でドアがガチャリとしまる。私は洋服掛けのわきに、ボルケンハーゲンの左に立ちどまった。ドライバーは私たちを目からはなさない。だれもなにもいえなかった。ドライバーの背後で重みのある箱型時計がカチカチ鳴るばかり。ほかには物音ひとつなかった。

やがてボルケンハーゲンがにやにや笑う。「どうした風の吹きまわしでこちらに見えたのですか？」

「私は…」　話しづらく、私はのどがからからだった。二人のあいだでなにがあったのかわからず、ただピストルだけが見えた。それでもボルケンハーゲンが優位にたっているように思われた。それで攻撃にでようと決心して、話した：「本

を持ち去るために、ギドをうちのめした男は、しおりにしていた自由民衆舞台の観劇券を紛失した。私はひょんな偶然からギドの寝いすの下に見つけて、事情を調査したところ、当時エリーザベト・ドライアーという人が入手した券であった—ここにいるわれらが友人の母親が…どこにいけばあなたに会えるかも、教えてくれたのです、ドライアーさん」

「おめでとう！」、とドライアーは応じた。

「この大騒ぎはどういうことかね？」、と私は尋ねた。

ボルケンハーゲンが低い棚から一枚の絵をとった。「これをご存知ですか？」

私はいっそう丹念に目をやる。「いいや。しかしヴァン・ゴッホのように見えるが」

「どう思いますか、ドクター、これは本物ですか？」　ボルケンハーゲンが尋ねる。

「もちろん本物さ！」　ドライアーがけんか腰でこたえた。

私はしきりに小首をかしげる。「それほどよくはわからない…いづらか本物だと思える点もあるが。私はしよせん専門家じゃないし—専門家でもそうすぐには断定できないのでは…」

「はっきりいうが、こいつは本物だ！」　ドライアーが口をはさむ。「おれは鑑定書をもっているのだから」

「この絵はどこからきているか、あなたにもわかりますか？」　ボルケンハーゲンが私に尋ねた。

「そのように聞くとすれば…」　私は一瞬ためらった。「この絵がネドマンスキー殺害の動機なのか？」

「おれは彼を殺していない！」　ドライアーが叫んだ。

「彼の話では、ネドマンスキーが絵を贈ってくれた。本物だとも知らずに」

「じゃあ鑑定書は？」、と私は尋ねた。

「鑑定書は彼があとで発見し、ネドマンスキーには伏せておいたようです」、とボルケンハーゲンが答えた。

「知らせなくても犯罪じゃないぞ！」　ドライアーが叫ぶ。

「ではなぜギドをうちのめしたのです？」、と私はただした。

「本を手に入れたかったから、だって…」

「あつたりまえさ！」

「…そこにはおれの書きこみがあった。おれはいつも欄外に書く癖がある。悪いことに、あの本を春に読んでいた。もしサツが本を見つけたら、おれはさっそく犯人にされていただろう…あれは正当防衛だった！」

「それから私の右前輪のタイヤを刺してパンクさせたのはあんただな？」

「そうだ、おれがやった。あんたがネドマンスキー夫人と話していたとき、おれは聞き耳をたてた。それで…あんたより先にギドの家に行く必要があった！」

「なるほど！ あなたはここのところおばあさんの小さな家や、おじいさんの複製画で、なぜ大騒ぎを演じていたのか？ ただ、ヴァン・ゴッホの絵をここの絵のあいだにいれ、それがずっとここにあって、とみんなに思いこませるためだね」

ドライアーはほほえむ。「絵はネドマンスキーがおれにくれたもの、わかりましたね！」

「それならなぜネドマンスキーは美術商に電話をかけ、地下室に真正のヴァン・ゴッホがあるといったのかね？」 ボルケンハーゲンが尋ねた。

「だまれ！」 ドライアーはうなった。「貴様は味方してくれるものと思っていたが？」

ああ、そういうことだったか！ やっとわかった。ボルケンハーゲンは商売じょうず…それとも正当防衛で？ あるいは両方かな？

ボルケンハーゲンは無視するような手ぶりをした。「あれはいずれにせよ全部ぼくらだけの話だ」

ドライアーは無意識にピストルを握った手をあげた。「どういうことだ—もしかすると三つに割らせるつもりか？」

「もちろんだ」、私はボルケンハーゲンのすばやい一瞥^{いちべつ}に気づいていった。「ご存知でしょうが、絵は法律上ネドマンスキーの相続人のものです。あるいは、シーアバウムに相続人がおれば、その人たちのものです。おまけに、あなたには殺人の嫌疑がかかっている」

「まさか！」

「あなたは本の内容をかなり正確に知っていたので、ネドマンスキーがどんな誕生パーティーを考えだしたかに気づいた—あなたはばかじゃないのだから！ ショートのあと、あなたはネドマンスキーの部屋にはいりこんだ—しかも、ラーベとヴァルター・ネドマンスキーがすでにまた外にいた瞬間に…ちょっと待った：あなたがショートをまさか故意に…？」

「ばかばかしい！メイドのイーナに聞いてくれ。おれが二・三日前にヒューズをつけかえたことを知っている。屋敷にヒューズは一本もなかった。おれは修理のあとヒューズを買い求めるのを忘れていたのだ。そしてあのとき、とにもかくにもヒューズがとんだ…」 ドライアーはにやにや笑う。「だが肝心なことを忘れていた：ヴァルター・ネドマンスキーは自白しているのだ！」

「たしかに…」 ボルケンハーゲンはいくつをしてみたが、とってつけたような感じがしないでもなかった：「ヴァルターが考えを変えなければね…」

「絵はおれのものだ！」 ドライアーが力をこめていった。「おれにはその権利がある」

「…なぜならばヴァルターのためにネドマンスキーを殺したのだから」 そう私は補足した。

ドライアーはだまっていた。ピストルをもちあげ、銃口をボルケンハーゲンから私に移動させ、ふたたびボルケンハーゲンへもどした。ボルケンハーゲンはつぶやく：「やめてくれ…」 ボルケンハーゲンは突然真っ青になった。

「あの男はきっと私たちを撃ち殺したりしない。自殺行為だから」 私は思ったよりもはるかに大声でそういった。

銃口がふたたび私のほうへ揺れ動いてきた。「自信あるのか？」

「あなたのお母さんは、私がどこへでかけたか、ご存知です！」 あわてて私は叫んだ。

「あんたらの死体が見つかるまえに、おれはカイロにずらかっているさ」

私は勇気をふるいおこした。「ばかなことはやめなさい！ ヴァン・ゴッホを売っても二束三文だよ！ ^{インターポール}国際刑事警察機構があんたを追っていると気づけば、買い手の口車に乗せられるだけだね！」

「そりゃまあ…」 銃口が少しぐらぐらし、やがて下にさがった。

ボルケンハーゲンはふたたび元気づく。「分配するほうがいいよ！ 半分はきみに、ぼくらは四分の一ずつ」

「きみのほうはいいが、その男は…」とドライアーは私に目を転じた。「あんたは信じられん！」

「でもこれしか方策がない」ボルケンハーゲンは固執した。

「おれがこやつを射殺するから、死体を片づけよう…やつはうちにこなかった、とおれら二人が口裏をあわせば、だれも反証をあげられない」

「きみはどうかしているぜ！」とっさにボルケンハーゲンはいった。

「ああ、それなら…」ドライアーはまず私を、次にボルケンハーゲンを見つめた。「それなら、てめえらはともかく二人とも覚悟を決めてもらおう！」

カード番号二七

絵画発見時のドライアーとネドマンスキー。再構成。

日曜日の夕方、うすら寒く雨模様。マックス・ネドマンスキーは書斎にすわり、新聞の経済欄をぱらぱらめくっている。企業の政策はまさしく、企業の目標設定と将来の行動に関する、原則や方針の極力厳密な確定を意味する…ネドマンスキーはあくびをして、新聞をわきに投げ、伸びをする。関節がぽきっと音をたてる。

そのとき、職人が古い石炭貯蔵用地下室をトレーニングルームに改造するために、翌日くる予定になっていることを思いだす。室内用自転車、こぐ器械、パンチングボール、卓球板、二個のダンベルはすでに発注してある。医者に運動を指示されていた…ネドマンスキーは白い受話器をとり、階上のドライアーを呼びだす。

「はい、ご用でしょうか…？」

「ちょっとおりてきてくれ。古い石炭貯蔵用地下室のがらくたを調べよう…」

「はい、まいります」

二人が地下室の階段をおりるとき、ドライアーが話す。「やっとながらくたが追い出される！ ぼくがここにきて以来、ずっと邪魔になっていました。ねえ、なぜがらくたをこんなに長くとっておいたのですか？」

「そうだなあ…」ネドマンスキーは返答をためらう。「がらくたとはかかわ

りたくなかった。わしには…いやなことだった。わしは別にシーアバウムを強制収用所に送りこんだわけじゃないが…要するに、心苦しかった。—だが、いつかはしなければならんことだから…」

ドライアーはなにもいわず、自分のことを考えている。

二人は家財道具にざっと目をとおし、有用なものをさがしはじめる—古物はふたたび相場があがっているから。ネドマンスキーは古い吸入器を発見し、ドライアーは中国の扇子、靴脱ぎ台、全体にさびたヘアアイロンをさがしあてる。

「ベルリンに蚤^{のみ}の市がないのは残念です」、とドライアー。

「買い手はきっと見つかる」　ネドマンスキーは笑う。「心配無用！　きょうアメリカ兵の営舎にビラをはれば、あすには司令部の全員がここに集合するよ。アメ公はこのような古道具に目がないから…おい、ちょっと見ろ、そこの飾り戸棚の下にあるのはいったいなんだ？」　ドライアーは身をかがめると、指先が古い柄付きめがねのつるにぶつかる。

「これはカーニバルなんかに使えますね」、とドライアーはいう。

「そのとおりだ—じゃあ、わしがそいつを持っていよう」

ところが、柄付き眼鏡のかわいい鎖が飾り戸棚の脚にはさまれる。

「こっちへこい、戸棚をちょっと運びだそう。そうすれば、ここにもっと空間ができる」とネドマンスキー。

二人はほこりだらけの飾り戸棚を押して数センチ壁から離し、それから苦もなくこうこうと明かりのついた廊下へ運びだした。曇った鏡の左右のかわいらしい棚板には少しひっかき傷があるが、ほかにどんな損傷も見当たらない。この上物は—もちろん修繕すれば—自室のいずれかにふさわしいかどうか、さらにユーゲントシュティール^{lxiii}がふたたび流行し、ヴィルヘルム様式がその次にはやりだすだろうか、とネドマンスキーはあれこれ考える。

「このこれはいったいなんですか？」　ドライアーが聞く。

飾り戸棚の後ろの壁に、打ちこんで曲げた四本の釘^{くぎ}によって、ほぼ正方形の木枠が固定されている。木枠には暗褐色がかかったカンバスが張ってある。

「絵だ！」　ネドマンスキーが叫ぶ。

ドライアーは釘をやわらかい木からぬく。そのあとカンバスのほこりを吹きは

らう。少女の頭が見えてくる。

ネドマンスキーは驚き、近づいて眺め、絵をとり、地下控え室の明るいランプのもとへもっていく。「これはまさか—」ネドマンスキーはハンカチをポケットからとりだし、さらにほこりの層を払い落とす—「ヴァン・ゴッホ！」

ネドマンスキーの胸は早鐘をうつ。シーアバウムのコレクションだ！ 逮捕の直前に大急ぎで、せめてこの絵だけでも安全な場所に移そうとところみたのか？

ネドマンスキーはできるかぎり、残りのほこりを慎重にはらう。絵をじっくり眺め、目をぐっと近づけて、色の構造、筆のタッチを調べる。専門家じゃないが、しかし…

「どうですか？ それは値打ちのあるものですか？」

「だまれ！」しかし少しは事情に通じている。ネドマンスキーはシューマンと親しくして久しい。いや—おそらくこれは偽物だ。模写、変形…それにしてもシーアバウムはなぜこの絵を隠したのか？ それにはただ一つの説明しかない。この絵はつまりオットー・ヴァッカーの在庫品に由来するにちがいない—そうしてシーアバウムはこれを一九二七年にベルリンのパウル・カシーラー店で買った。おそらく、絵が絶対に本物であることを認める、マイアー＝グレーフェかローゼンハーゲンかブレマーの鑑定書つきで。ネドマンスキーはシューマンからオットー・ヴァッカー事件について多くのことを聞いていた。同事件はシューマンの好きな話題なのだ。

ドライアーは目を見開いてネドマンスキーを凝視する。ちょうどサインを判読したところだから。「これは本物です—ね？」

ネドマンスキーは相手を見つめる。いかにも単純な子供っぽいドライアーの顔にいらついてくる。ドライアーのいうことを真に受けることはできない。こいつをからかい、危険な状況に陥れても、罰を受けずにすみ、こいつをおもちゃにすることができる。たとえば、しっぽに缶を結びつけた、猫のように、あるいは二本の裸の針金をさわるのがいかにすばらしいかを信じこませ—いざさわれば、電流を通じる、ばかな遊び友達のように。

「これは本物じゃ、ほんとうにわしに芸術の心得があるとすれば！」ネドマンスキーはそう言って、ひどくまじめな顔をする。それからまた一つ思いつく：

「おい、わしもいまわかった…ああそうか、あのころ、おまえはまだうちにいなかったなあ…」　ネドマンスキーはドライアーに「あんた」といったり、「おまえ」で呼びかけたりする。「一度うちの食品食器用エレベーターが動かなかったことがある。わしらはふたを開けて点検した。おまえになんといったらいいのか、原因は薄い書類ばさみだった—一枚の鑑定書だよ！　そいつをシーアバウムはそこに隠したにちがいない。すでにあれからしばらくたっている—きっともう十年になるが、わしの記憶が正しければ、鑑定書はこのこの絵に関連していた…なんてことだ！」

ドライアーは主人のいうことを信じた。なぜならネドマンスキーは美術通と一般に認められ、いくつかの高価な絵も所有し、わりとよく画廊をおとずれ、それどころかあちこちの画廊を支援し、シューマンと親しくしているのだから。それにまだなにかがある。このこの絵は、ドライアーの祖父によるヴァン・ゴッホの模写とくらべると、どことなく違ったふうに見え、なんとなく本物らしく思える。特徴と構成の点で、みんなが真正のヴァン・ゴッホに想像するものと、この絵はきわめて正確に対応している。

「あと一点だけ面倒なことがある」、とネドマンスキーはいう。

「どうして？」

「絵は五十万マルクの価値がある、おそらくさらにずっと高い…」

「おやおや！」

「…絵をここで見つけたことがばれると、わしらはシーアバウムの相続人にわずらわされるだろう」

「相続人がいるのですか？」

「まったく知らん。しかし相続人がいない、とどうしていえる？　しかも…ええと、特殊な状況のもとでは…強制収容所とか…」

「くそっ！」

「きつとなにか打開策を考えだしてみせる—わしらはただ何事もあせってはならん。まずもって、だれにもこのことを知らせてはいけない—わしの女房にもだめだ。いいかね？」

「ええ、もちろんです」

「すべてがうまくいけば、分け前をやる一心配無用…こい、絵をふたたび飾り戸棚の後ろに固定するのが、一番よかろう。職人も断らなければならん—トレーニングルームはまだ急がない…」

カード番号四七

ドライアーは十三歳のとき交通事故で入院：頭蓋底骨折。^{とうがい}（エリーザベト・ドライアー夫人の報告に基づく再構成。）

ゆっくりと、ごく徐々にしか体温曲線はさがらない。何時間も壁の色あざやかな箇所をじっと見つめている。このカラフルな箇所とはよくできた一枚の複製画のこと。ヴァン・ゴッホ、花盛りの桃の木、一八八八年四月アルルにて制作、七三×五九、五センチ。原画はオッテルローのクレラー＝ミュラー美術館にある。

医師たちはドライアーを見放すが、患者は危機を克服する。目をあければ、視線は明るい複製画に落ち、患者は視線を固定させ、泡立つ色彩がしっかりと網膜に刻みつけられる。桃の花—極東の幻想、木の根もとにはとけてゆく雪。無重力の気配、やさしい愛にみちた最初の春の日。スケッチふうの画法、軽くたたつけられた透明色、パリ時代の末期。叙情的な旋律が響きだす。

ドライアーは絵を何時間もながめ、自分がちっぽけな綿球となってまだらな画面上をただようのが見える。あたかもタンポポのように、絵と一体になって、さまざまな色と溶け合う。こうして数日がたち、数週間がすぎさるが、彼の空想は一段と勢いづくばかりだ。ヴァン・ゴッホ。ヴァン・ゴッホ、花盛りの桃の木。

私は後ろへさがり、壁にぶつかり、自分の蒼白^{そうはく}な顔に、大きく見開いた目が鏡に一瞬見えた。私は一言もしゃべることができなかった。

ボルケンハーゲンは、ほとんど身を守れない、せまい壁の突出部のかげに体を押しつけた。汗が額にたまっていた。

「ばかなまねはよせ…するな！ 死にたくない…そんなことはするな！」

ドライアーの後ろの大きな箱型時計が時鐘をうちはじめた。一、二…

「それで、もしもそれが—」 私はせきばらいをしないではいられなかった—
「それで、もしもそれがやはり偽作だとすれば？」

「偽作じゃない！」

私は目を閉じた。

するとドライバーは大声でどっと笑った。「きみたち、ばかだなあ…」 ドライバーはあやうくむせそうになった。「これはただのガス銃だ！」

私たちは彼を見つめた。

「ガス銃—それ以外の何ものでない！　だがこの仕置き、これをきみらに一度しておく必要があった…きみらはおそらく人間を一頭の家畜のように追っかけられると考えているのだろう—ただセンセーショナルなネタを仕入れるために…、いいや、おれには通用しない！」

ボルケンハーゲンがドアを押しあげ、安楽いすを見つけ、悠然と腰をおろした。私も見習った。ドライバーは私たちにタバコをすすめた。

「それで絵は？」　ボルケンハーゲンはしばらくして尋ねた。

「よくできた偽作で、アルルの少女と絵画商タンギーの変形だ。そいつをおれはもちろんひと目で見抜いたよ—なんといっても祖父は画家で模作家だったし、おれは絵とともに大きくなった」

「じゃあ鑑定書は？」

「お笑いでしょう：おれはまるきりもってない！」

「そしてネドマンスキーがきみに絵を贈ったのだね？」

「ええ、そのとおり。彼は例のシーアバウムのものをもうなにも家に残したくなかった。おれはただすぐには持ち帰らなかった。母の家に置く場所がなかったから—それからネドマンスキーは、あの美術商をかついでやろうと、ばかげた考えを思いついたにちがいない」

「それはまあ—あの晩たしかに彼はずいぶん酔っ払っていた…」、とボルケンハーゲンはつぶやいた。

「ギドにしかけた不意打ちはどうなの？」　私が尋ねた。

ドライバーは頭をたれた。「おれはそのしりぬぐいをさせられるだろうが…しかし、おれが逆上したのは、あんたらのせいだ！　おれはたしかによくネドマンスキーと衝突し、ときたま、できることなら彼を…事実またはさみを投げつけたようなこともあり…さらにその事実を知っている連中もいる。だから、もちろん

不安になった、あんたらがおれを…まあいいや！」

「それなら即刻サツに知らせるのが一番よい」

「おれにはどうやらほかに残された道はなさそうだ…」　ドライアーは電話を
かけにおりていった。

これが本来は結末のはずだが。これ以上私たちは尾ひれをつけなかった。やれやれ。いまや書きこみのあるカードも二・三枚しか残っていない…外はもう明るくなっている。

カード番号八三

主任警部マンハルトとの通話。

マンハルトは電話でこう伝えてきた。ヴァルター・ネドマンスキーが自白を取り消した。いま弁護人が報道陣のまえで、ヴァルターは警察のきびしい取り調べ方法に倒れ、さしせまった心筋梗塞^{こうそく}をまぬがれるために、自白をしたにすぎない、と得々としゃべっている。未決監の医師も予想どおり極度の高血圧を確認した。ヴァルター・ネドマンスキーはまず間違いなく無実であることがさしあたり動かないので、明朝、釈放せざるをえないだろう。

つまり、ヴァルター・ネドマンスキーはふたたび自由の身だ！　私は彼を近いうちに訪れ、かちとったばかりの自由にお祝いをいおう。

(付記、三日後；ヴァルター・ネドマンスキー家訪問、例のごとく薬草酒、長い話し合い、ただし新たな視点はうまれない。二人ともかなり酔っぱらった。ヴァルターは、弟を溺死^{できし}させるという経過をたどる、奇妙な白昼夢を私のために書きとめてくれる。)

カード番号八四

ヘンリー・シューマンとの通話。

ネドマンスキー邸で見つかった絵は悪名高いオットー・ヴァッカーの所有していたものに十中八九間違いない、とシューマンは私に話した。(オットー・ヴァッカーはデュッセルドルフ出身であり、アマチュア画家だった父親の絵を、生地

で若いころ売っていた。のちに美術商兼ダンサーとなる。二十年代の終わりに、ある謎にみちたロシアの亡命者から仕入れたという、ヴァン・ゴッホの絵三十枚近くをベルリンの美術商に売却する。一九二八年、ヴァン・ゴッホの専門家ド・ラ・ファイユは、オットー・ヴァッカーのコレクションに由来する絵の大多数をヴァン・ゴッホの贋作がんさくだとし、さらに、刑事警察の求めに応じて、国立美術館館長ルートヴィヒ・ユスティ教授は、ヴァッカーから出た十枚の絵は確実に偽物だと断定する、鑑定書を作成している。ところが、マイアー＝グレーフェやオランダ人ブレマーのような有名な専門家は、ここで問題になっている、ヴァン・ゴッホの絵が本物であることをいまもひきつづき確信している。) シューマンは、ネドマンスキーの地下室から発見された絵で昔の論争が再燃するかもしれない、と意見をもらした。シューマンの考えでは、専門家でない人ならみんな問題の絵を絶対に本物だと思うにちがいないとのこと。

カード番号八五

ディーター・ドライアーに対する訴訟。法廷メモ。

検事はディーター・ドライアーがマックス・ネドマンスキーを殺害したとする。被告は、その価値と真正を心の底から確信していた、ヴァン・ゴッホの絵を、自己の勘定で売るために盗んだ。祖母から相続した家へ引っ越すために、自分の荷物を受け取りにいったとき、絵を気づかれずに運び去るのは、被告にとってたやすいことであった。被告は少し前に読んだ(本人も認めていること)、*相続人選*びと題する書物を手がかりに、ボルケンハーゲンとその後の被殺害者とがいかに不気味な芝居を取り決めていたかを推論することができた。ショートのと一般の混乱に乗じて雇い主の寝室に侵入し、同人を枕で窒息させることは、邸内の事情に詳しい被告にとって造作もなかった。マックス・ネドマンスキーは、きわめて高価と思われる発見品についていくらか承知していた、唯一の人間であった。富への道は、ドライアーからすればただ、味方でありパトロンであるネドマンスキーの死体を乗り越えていくしかなかったのであろう—また被告はためらうことなくその道を歩んだ。

公訴がよりどころにしている事由は、下記の五点である：

- 一、ドライアーがギド・ヴィンクラーを殴り倒した事由は、書物そのものを奪って、自分にたどりつきかねない、手がかりを消し去るためである。一被告はその点を否認しないが、無理からぬ不安から行動した、と反論している：ネドマンスキーから贈られた絵のために、被告のボスである、ネドマンスキー殺しの疑いをかけられることを恐れた。ネドマンスキーが絵を贈ってくれ、しかも、それが偽作であることを両者とも最初から確信していた、と被告は繰り返し強調している。
- 二、ボルケンハーゲンが美術商シューマンを通じてドライアーの策略を見抜くと、ドライアーはボルケンハーゲンのあずまやに火をつけ、同人を殺害しようとした。犯行時間のアリバイがない。一ドライアーは、問題の時間にはベッドで寝ていた、と主張し、これを否定することはできない。（放火にさいして、殺害意図の有無にかかわらず、あれほど「へたくそな」行動にでるのは、言葉どおり、「まさにばかげている」であろう、と弁護人も主張している。）
- 三、ネドマンスキーは絵を最初から偽作と思っていたとするドライアーの供述は、真実であるはずがない。なぜならネドマンスキーは、すでに証明済みのごとく、のちほど美術商のシューマンに、自宅の地下室にヴァン・ゴッホの真作がある、と伝えていたからである。一ドライアーの抗弁は、要するに、ネドマンスキーは、ボルケンハーゲンの証言によれば、問題の電話をしているとき酒に酔っており、おそらく信頼のおける専門家をからかおうとしたにすぎない、ということである。
- 四、ドライアーは、絵の発見に口実をもうけるために、あらかじめアトリエにねむっている祖父の模写について方々ではでに吹聴^{ふいちよう}していた。その行動は、のちに相対的に価値のない模写にまじって真作と思われる絵が発見されていたならば、その場合にかぎって、筋道がとおりに、なにも疑わしくなかったであろう。一ドライアーは、さまざまな模写を売ろうとする自己の努力を指摘して、これに異を唱えている。
- 五、ドライアーは、盗んだ絵を売って大金をつかめるものと期待して、イタリア製のスポーツカーを注文した。一ドライアーは、いくつかの模作の収益

から簡単に支払えた、かなり古い中古車である、と抗弁している。

このあと重大な予期せぬ出来事が起こる：第四回公判日に、三名の鑑定人は、検察庁の見解にしたがえば、被告にとってまさにその所有が問題であった、絵に関する鑑定を述べる。鑑定、反対鑑定、それにつづく専門家間の激しい論争は、^{しんがん}眞贋問題を解明しないままに終わる。ともかく三名のうち二名は、絶対にヴァン・ゴッホの作品ではない、との所見に固執する。

それにもかかわらず、検事は論告で殺人が証明されたとして無期懲役を求刑する。主要な論拠：ドライアーは、鑑定人たちが合意できない事柄について、確信をもって認識しうるはずがなかった。

弁護側は同一の論拠を逆転させる：確信をもって認識しえなかったからこそ、ドライアーにはそもそも犯行の動機がない—ただ無罪判決しか考慮の対象にならない！

かなり長い協議のあと、判決が言い渡される：証拠不十分により無罪。

弁護側はそのあと報道陣に、潔白が証明されたとの理由で無罪判決をかちとるために、控訴することを検討する、と知らせる。

思いに沈みながら、私は夜中に通覧して整理した、書類の山を集めてかたづけする。もはや眠くなく、さえきっている。おまけに浴室でシャワーがシューシュー音をたて、女房が起きだす。朝食のことを考えると、ようやく心がなごむ。

そう、ネドマンスキー事件は…そのもっとも興味をひく点は、厳密に言えば、まったく未解決の結末である。潜在的容疑者はおおぜいいたが、いまではただ一人しか残っていない—しかも、この者の有罪を立証することができない。考えられる犯行動機はおのずからくずれる—その根は、本物かどうか依然として疑わしい、一枚の絵にある…こうして本件は骨折り損のくたびれもうけに終わった。

マックス・ネドマンスキーはそもそも殺されたのか？

あっ そうだ—まだ補足しなければならないことが一つある：ドライアーがボルケンハーゲンと私をおどした、あのいわゆるガス銃は、れっきとしたワルサー七、六五であった。ドライアー一家の家宅捜索で発見された—だが、弾薬なし。

エピローグ

電話が鳴る。

「はい、もしもし」

「ドクター？」

「おい、ボルケンハーゲン！ このところいったいどこにいるのだ？」

「家にいました。放蕩息子^{ほうとう}^{lxiv}は家に帰る—やむをえなかったのです。ぼくはとうとう文字どおりの素寒貧になってしまいました」

「それで？ 父親に子牛をつぶしてもらったのか？」

「ええ、まあいくらかは。しかし…」

「ええ？」

間。それから：「ドクター、ぼくはお金がいらいます」

「だれだってそうだよ、きみ—金のいらない者がいるのか？」

「そんなにつらく当たらないでくださいよ。ほんとうなら謝礼がもらえると思
って…」

「どんな謝礼だ？ わが社はルポを発表しなかった。それをよもや見落として
はいまいね」

「不成就報酬のようなものはありませんか？」

「そうだなあ…了解。あんたのためになにかせしめられないか、調べてみよう。
でも金銭の搬出用に大型トランクはいらない。これだけは即答できる」

「ちりも積もれば山となる…ぼくのためにほかにしていただけるものはない
でしょうか？ 人間はちりだけじゃ生きられませんので」

「いや…つまり、いまのところ…」

「それにしても、あのルポが没になったとは！ れっきとした刑事事件、いわ
ばもっとも純粋な推理小説を間近から体験しながら、そこからなにも生まれない
なんて、そのわけは…ちょっと待って！」 最後の言葉は興奮ぎみに聞こえる。

「いったいどうした？」

「ぼくは…ぼくはポリュクラテス^{lxv}の卵をうんだのだと思います、ドクター！」

「とんでもない無精卵だろう。さあはじめろ！—火皿になにを用意しておるの
だ？」

「いまとっさに口にしたばかりです…ネドマンスキー事件、あれはしごく純粋な推理小説でしたし…」

「それが小説のように長くなければ、少なくとも採用してもらえたのだが」

「まさにそこなのです！　じゃあ、なぜぼくらはすぐ小説にしないのでしょうか？」

追記

本書は要するに、厳密に言えば、小説ではない—これは小説の成立史であり、作者自身も、これが小説になろうとは予想していなかった。（ボルケンハーゲンとの合意により、公式には私ひとりが作者として表にでている。）現実には小説となるまでには、もちろん、さらにきわめて多くの作業が必要であった：臆^{おく}することなく、「推理小説」という言葉を題名にそえられるように、出来事を異化し、舞台や人物も変えることが必要でした。その結果、本書で「事実と合致する」ものは、ある意味ではなにもなく、事実また皆無に等しくなっている。本書がモデルにしている、現実の出来事、人物、現場などは、もはやいっさい同定することができない。したがって、私はいまや心安らかに、これは小説であり、現実を起こったことも、生者あるいは死者とのいかなる類似も、ただ偶然に基づく可能性があるにすぎないと主張できます。相変わらず事実と符合している、唯一のことは、私が自分自身の編集寄稿に署名するときによく使う、略称：キーだけである。

キー

ⁱ 少女にしか性欲を感じない成人男性。

ⁱⁱ 一八八〇年—一九四二年、オーストリアの作家。小説『特性のない男』で有名。

ⁱⁱⁱ 一八五五—一九二〇、皇帝ヴィルヘルム二世と市民階級に愛された作家。

^{iv} 地中海西部、バレアス諸島南西部のスペイン領の島。

^v 鎮静剤。

^{vi} 誇大妄想・残忍な行為をとまなう、君主や独裁者にみられる病的な権力欲。

^{vii} 医長・主任医師の対語。

^{viii} フランスの紙巻きたばこ。

^{ix} 無声映画時代に「笑わぬ喜劇俳優」として人気を得たアメリカの俳優。

^x ゴッホはベルギーの国境に近い、北ブラバント州の小村フロート・ズンデルトで新教の牧師の長男として生まれた。

^{xi} 他人を傷つけ、危害をくわえ、強制し、辱しめるといった行動を、現実的ないし幻想的な様式で実現する傾向あるいはこうした諸傾向の総体をいう。

^{xii} Obel, blingen Sie uns bitte dlei Gläser mit lotem Maltini

^{xiii} 現行法では、「(一) ある者が、殺人の被害者の明示の真剣な要求によって、殺害を決意するに至ったときは、六月以上五年以下の自由刑を科する。(二) 本条の罪の未遂犯は、これを罰する」、と改正されている。

^{xiv} ベルリンの目抜き通り。俗にクーダムと呼ばれる。

^{xv} 原文は六対三になっているが、これでは試合が終わっているはず。

^{xvi} Da liegt der Hund begraben. 「これが問題の核心なのだ」の意。元来「^{フンデ}宝」とすべきところを慣用的に「^{フント}犬」とドイツ語ではいう。あるいは財宝を守る犬と考えてもよい。

^{xvii} シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の都市。

^{xviii} 一八七一一七三年。

^{xix} 一八〇一一八五年、小市民の生活をユーモラスに描いたドイツの画家。

^{xx} 中南米に移住したヨーロッパ人の子孫。

^{xxi} 一九四五年ナチス・ドイツの敗戦後、西側占領地区で四六年五月に第一回ドイツ社会主義統一党大会が開かれ、エーリヒ・オレンハウアー（一九〇一一六三）は副党首に就任。なお、党首はクルト・シューマッハー。

^{xxii} フランスの紙巻きタバコの銘柄。

^{xxiii} ヘンリー・ミラー（一八九一―一九八〇）の大胆な性描写をふくむ小説。

^{xxiv} ゲーテの小説。

^{xxv} Yorck von Wartenburg―ルートヴィヒ・ヨルク・フォン・ヴァルテンブルク伯爵（一七五九―一八三〇）、対ナポレオン戦争で偉功をたて、のちに元帥となった、ドイツ（プロイセン）の軍人を指しているのであろうか。

^{xxvi} 一九世紀、特に一八一五―一四八年ごろのドイツの小市民的な風俗・芸術を特徴づける。過度の装飾をきらい、単純明快な形を好む。

^{xxvii} ドイツ北西部ニーダーザクセン州、ブレーメンに近いところにあり、一八八九年、そこに芸術村ができた。

-
- xxviii Ludwig Börne (一七八六—一八三七) ドイツのジャーナリストで、青年ドイツ派の指導者。
- xxix Nicolò Machiavelli (一四六九—一五二七) イタリアの政治学者・歴史家。
- xxx Oswald Spengler (一八八〇—一九三六) ドイツの文化哲学者。
- xxxi Jean-Paul Sartre (一九〇五—一八〇) フランスの哲学者・作家。
- xxxii Ortega y Gasset (一八八三—一九五五) スペインの哲学者・批評家。
- xxxiii Friedrich Wilhelm Nietzsche (一八四四—一九〇〇) ドイツの哲学者。
- xxxiv Charles Baudelaire (一八二一—六七) フランスの詩人。
- xxxv Gottfried Benn (一八八六—一九五六) ドイツ表現主義の詩人。
- xxxvi Ezra Pound (一八八五—一九七二) アメリカの詩人・批評家。
- xxxvii Johann Gottfried von Herder (一七四四—一八〇三) ドイツの思想家・文学者。
- xxxviii Max Dauthendey (一八六七—一九一八) ドイツの詩人。
- xxxix ドイツの総合化学会社。
- xl ドイツの化学・医薬品会社。
- xli Paul Gauguin (一八四八—一九〇三) フランスの画家。
- xlii Wassily Kandinsky (一八六六—一九四四) ロシア生まれの画家。
- xliii Auguste Renoir (一八四一—一九一九) フランスの印象派の画家。
- xliv Hilaire Germain Edgar Degas (一八三四—一九一七) フランスの印象派の画家。
- xlvi Mikhail Aleksandrovich Bakunin (一八一四—一七六) ロシアの無政府主義者・著述家。
- xlvi 地球上にさまざまな混乱をひきおこすといわれる伝説上の存在。
- xlvi 一八九〇年ブルーノ・ヴィレの提唱で自由劇場から分かれて発足した演劇大衆化運動の観客組織、またはその運動の中心であったベルリンの劇場を指す。
- xlvi 木の実・果物・クリームなどをチョコレートにつつんだチョコレートボンボン。
- ¹ Jacopo Robusti Tintoretto (一五一八—一九四) イタリアのベネチア派の画家。宗教画を得意とした。
- li 骨董品、稀^{きこう}観本、美術品を扱う英国の競り取引業者。
- lii エルベ川の支流。
- liii Claude Monet (一八四〇—一九二六) フランス印象派の画家。なお、「読めない」箇所

を補えば、『サンタドレスのテラス』（一八六七年作）か。

^{liv} Oskar Kokoschka（一八八六—一九八〇）オーストリアの画家・版画家・劇作家。

^{lv} Emil Nolde（一八六七—一九五六）ドイツの画家。

^{lvi} Mare Chagall（一八八七—一九八五）ロシア生まれのユダヤ系画家でシュールレアリスムの先駆者。

^{lvii} Rembrandt van Rijn（一六〇六—一六九）オランダの画家。

^{lviii} Frans Hals（一五八一？—一六六六）オランダの肖像・風俗画家。

^{lix} Antoine Watteau（一六八四—一七二一）フランスの画家。

^{lx} Max Liebermann（一八四七—一九三五）ドイツの画家。

^{lxi} Adolf Friedrich Erdmann von Menzel（一八一五—一九〇五）ドイツの画家。

^{lxii} ドイツの一ポンドは五百グラム。

^{lxiii} 一九〇〇年前後のドイツの工芸・絵画・建築の様式。

^{lxiv} 聖書、ルカ一五、一一—三二参照。

^{lxv} サモス島の^{せんしゅ}僭主。前五三八年ころ二人の兄弟とともに貴族政を倒して政権を奪い、前五三二年ころまでに兄弟を排除して独裁者となった。サモスに空前の繁栄をもたらすが、最後はペルシアの太守に欺かれ惨殺された。